

# シャレミア語文法

Ziphil Shaleiras

H4649 版

# 目次

## 文字

§1 シャレイア文字と転写 .....	18
§2 文字の改定 .....	18
§3 アルファベット .....	18
§3.1 基本形	
§3.2 定高形	
§4 数字 .....	20
§4.1 基本形	
§4.2 定高形	
§5 ダイアクリティカルマーク .....	20
§5.1 基本形	
§5.2 簡略化や省略	
§6 転写の代用表記 .....	21

## 約物とスペーシング

§7 約物 .....	24
§7.1 概要	
§7.2 デック類	
§7.3 タデック	
§7.3.1 概要	
§7.3.2 必須の箇所	
§7.3.3 任意の箇所	
§7.4 タデックロット	
§7.5 ノーク	
§7.6 ディカック	
§7.6.1 概要	
§7.6.2 有無の傾向	
§7.7 フェーク	
§7.8 ロセック	
§7.9 カルタック	
§7.10 フォーハック	
§7.11 タドニビット	
§7.12 タドヴォール	
§7.13 フェークレディック	
§7.14 ラクット	
§7.15 ヴァクット	
§7.16 小数点	
§8 スペーシング .....	30

# 目次

§8.1 基本法則	
§8.2 デック類	
§8.3 タデック	
§8.4 タデックロット	
§8.5 ノーク	
§8.6 デイカック	
§8.7 フェーク	
§8.8 ロセック	
§8.9 カルタック	
§8.10 フォーハック	
§8.11 タドニビット	
§8.12 タドヴォール	
§8.13 フェークレーディック	
§8.14 ラクット	
§8.15 ヴァクット	
§8.16 小数点	
§9 改行	33
<b>音素</b>	
§10 音素	36
§10.1 子音	
§10.2 母音	
§11 文字と音素の対応	36
§11.1 基本法則	
§11.2 ダイアクリティカルマーク付きの母音字	
§11.3 c, q	
§11.4 l	
§11.5 h	
§11.6 kin, 'n に現れる n	
§12 発音変種	38
§12.1 軽発音と重発音	
§12.2 現行発音と旧発音	
§13 音節	40
§14 連音	40
§15 音素の実現	40
§15.1 基本法則	
§15.2 母音連続間での接近音の挿入	
§15.3 同子音連続の長子音化	
§15.4 子音連続の同化	
§15.4.1 阻害音の連続	
§15.4.2 流音の連続	

# 目次

§15.4.3 特筆すべき非例

§15.5 単語間での曖昧母音の挿入

## アクセント

§16 アクセント .....	44
§17 有アクセント語とアクセント位置 .....	44
§17.1 総論	
§17.2 1	
§17.3 アクセントの消失	
§18 無アクセント語 .....	45
§18.1 総論	
§18.2 pa	
§18.3 助接辞, 連結辞	
§18.4 縮約形	
§18.5 前接語の連続におけるアクセント	
§19 副アクセント .....	46
§20 否定活用接頭辞のアクセント .....	47
§21 合成語化のアクセント .....	47

## 品詞

§22 語彙的品詞と文法的品詞 .....	48
§23 語彙的品詞 .....	48
§23.1 概要	
§23.2 名詞型不定辞	
§23.3 動詞型不定辞	
§23.4 連述詞型助接辞	
§23.5 特殊詞型不定辞	
§23.6 助接辞	
§23.7 連結辞	
§23.8 間投辞	
§23.9 機能辞	
§24 文法的品詞 .....	50
§24.1 概要	
§24.2 名詞	
§24.3 動詞	
§24.4 形容詞	
§24.5 副詞	
§24.6 連述詞	
§24.7 特殊詞	
§24.8 助詞	
§24.9 接続詞	

§24.10 連結詞

§24.11 問投詞

§24.12 機能詞

## 語彙的品詞と文法的品詞

§25 語彙的品詞と文法的品詞の関係 ..... 54

§26 動詞型不定辞: 形容詞と動詞との関係 ..... 54

§26.1 分類

§26.2 意味関係と対応規則

§26.3 ニュアンスの違い

§26.3.1 状態か性質か

§26.3.2 変化のニュアンスの有無

§27 動詞型不定辞: 副詞と形容詞や動詞との関係 ..... 57

§27.1 分類

§27.2 意味関係と対応規則

§27.2.1 被修飾語型

§27.2.2 文脈補完型

§27.2.3 kin 節型

§27.2.4 fa 節型

§27.3 ニュアンスの違い

§28 動詞型不定辞: 名詞と動詞との関係 ..... 61

§28.1 意味関係と対応規則

§28.1.1 総論

§28.1.2 kin 節

§28.1.3 接続詞節

§28.2 ニュアンスの違い

§29 名詞型不定辞: 名詞と形容詞との関係 ..... 63

§30 助接辞: 助詞と接続詞との関係 ..... 63

§31 比較可能性 ..... 63

§31.1 概要

§31.2 比較可能な動詞型不定辞

§31.3 比較不能な動詞型不定辞

## その他の特殊な形態素

§32 飾辞 ..... 66

§33 倍数接頭辞 ..... 66

## 活用

§34 活用総論 ..... 68

§35 動詞型不定辞の活用 ..... 68

§35.1 動詞として

§35.2 形容詞か副詞として

## 目次

§35.3 名詞として	
§36 名詞型不定辞の活用 .....	69
§36.1 形容詞として	
§36.2 名詞として	
§37 連述詞型不定辞の活用 .....	69
§38 特殊詞型不定辞の活用 .....	70
§39 助接辞の活用 .....	70
§40 極性による活用 .....	70

### 基本語順

§41 文 .....	72
§42 動詞先頭 .....	72
§43 修飾語句の位置 .....	72
§43.1 総論	
§43.2 動詞を修飾する語句	
§43.3 名詞を修飾する語句	
§44 修飾語句の順序の傾向 .....	75
§44.1 動詞修飾の助詞句	
§44.2 形容詞	
§45 修飾語句の語順の例外 .....	76

### 助詞句

§46 助詞句の構成 .....	78
§46.1 名詞や kin 節を伴う助詞句	
§46.2 形容詞を伴う助詞句	
§46.2.1 総論	
§46.2.2 基本助接辞	
§46.2.3 節の代替によって生じる場合	
§46.3 問投詞を伴う助詞句	
§47 助詞の種類と修飾 .....	79
§47.1 一般助接辞の動詞修飾形	
§47.2 一般助接辞の非動詞修飾形	
§47.3 例外助接辞の動詞修飾形	
§47.4 例外助接辞の非動詞修飾形	
§48 格組 .....	80
§48.1 概要	
§48.2 動詞	
§48.3 問投詞	
§48.4 動詞型不定辞由来の形容詞	
§48.5 名詞型不定辞由来の形容詞	
§48.6 動詞型不定辞由来の名詞	

§48.7 名詞型不定辞由来の名詞	
§49 基本格の用法 .....	81
§49.1 主格	
§49.2 対格	
§49.3 与格	
§49.4 奪格	
§49.5 能格	
§50 特筆すべき助詞 .....	84
§50.1 i	
§50.2 qe	
§51 二重助詞句 .....	85
§51.1 概要	
§51.2 話題化	
§51.3 挿入表現による補足説明	
§51.4 詩歌における強調	
<b>否定表現</b>	
§52 否定形による否定表現 .....	88
§52.1 名詞以外	
§52.2 名詞型不定辞由来の名詞	
§52.3 動詞型不定辞由来の名詞	
§53 部分否定と全部否定 .....	89
§53.1 否定形による部分否定	
§53.2 dil による部分否定	
§54 否定相当語 .....	90
§55 二重否定 .....	91
<b>疑問表現</b>	
§56 疑問文の共通法則 .....	92
§57 諾否疑問文 .....	92
§57.1 構成	
§57.2 返答方法	
§58 疑問詞疑問文 .....	93
§58.1 構成	
§58.2 返答方法	
§58.2.1 動詞修飾の助詞句を抜き出す方法	
§58.2.2 遊離 e 句を使う方法	
§59 選択疑問文 .....	95
§59.1 構成	
§59.1.1 ve による構成	
§59.1.2 á による構成	

# 目次

§59.2 返答方法	
§60 間接疑問	96
§60.1 疑問詞疑問, 選択疑問	
§60.2 諾否疑問	
<b>時制と相</b>	
§61 時制	98
§61.1 概要	
§61.2 現在時制	
§61.3 過去時制	
§61.4 未来時制	
§61.5 通時時制	
§62 相	100
§62.1 概要	
§62.2 開始相	
§62.3 経過相	
§62.4 完了相	
§62.5 継続相	
§62.6 無相	
§63 相動詞による相の表現	101
§64 時制と相の対応関係	102
§64.1 無相以外	
§64.1.1 総論	
§64.1.2 点を表す時制 + 瞬間相	
§64.1.3 点を表す時制 + 期間相	
§64.1.4 期間を表す時制 + 瞬間相	
§64.1.5 期間を表す時制 + 期間相	
§64.2 無相	
§64.3 時間を表す表現がある場合	
§64.3.1 総論	
§64.3.2 <i>teku</i> 句	
§65 従属節の時制	106
§65.1 総論	
§65.2 主節	
§65.3 動詞を修飾する従属節	
§65.4 動詞以外を修飾する従属節	
§65.5 直接話法部	
§66 特筆すべき時制や相の用法	108
§66.1 叙述の現在時制	
§66.1.1 概要	
§66.1.2 無相	
§66.2 動作を実際に行う経過相	



## 態

§67 態 .....	110
§67.1 概要	
§67.2 通常態	
§67.3 補助態	
§68 補助態と使役表現 .....	111

## 動詞の特殊表現

§69 動詞の助動詞的用法 .....	112
§69.1 概要	
§69.2 格組が e 格のみの動詞	
§69.3 格組が a 格と e 格のみの動詞	
§69.4 余分な修飾語がある場合	
§70 命令表現 .....	114
§70.1 構成	
§70.2 縮約形と丁寧度	
§71 反復表現 .....	115

## 連結詞

§72 連結辞 .....	118
§73 連結詞の用法 .....	118
§73.1 総論	
§73.2 修飾語句が ら で繋がる場合	
§74 o と ら の使い分け .....	119
§74.1 総論	
§74.2 名詞句を繋ぐ場合	
§74.3 形容詞句を繋ぐ場合	
§74.4 副詞句を繋ぐ場合	
§74.5 節を繋ぐ場合	
§75 標準形と別形の使い分け .....	122
§75.1 概要	
§75.2 意味の違いが生じる場合	

## 接続詞

§76 接続詞節の構成 .....	124
§77 接続詞の種類と修飾 .....	124
§77.1 一般助接辞の動詞修飾形	
§77.2 一般助接辞の非動詞修飾形	
§77.3 例外助接辞の動詞修飾形	
§77.4 例外助接辞の非動詞修飾形	

## 目次

§78 動詞修飾形の接続詞 .....	125
§78.1 総論	
§78.2 接続詞節を修飾する語句	
§78.3 接続詞節内の時制の基準	
§79 非動詞修飾形の接続詞 .....	125
§79.1 総論	
§79.2 接続詞節内の時制の基準	
<b>kin 節</b>	
§80 kin 節 .....	128
§80.1 構成	
§80.2 kin 節を修飾する語句	
§80.3 kin 節内の時制の基準	
<b>限定節</b>	
§81 限定表現 .....	130
§81.1 総論	
§81.2 限定節内の時制の基準	
§82 限定表現で <b>cok</b> が省略されない状況 .....	131
§82.1 <b>cok</b> を含む助詞句が限定節末にある場合	
§82.2 <b>cok</b> が限定節内に2つ以上現れる場合	
§82.3 1つの名詞に2つ以上の限定節に係る場合	
§82.4 詩歌で限定節と被修飾語が分かれている場合	
<b>優劣表現</b>	
§83 優劣表現 .....	134
§83.1 概要	
§83.2 ini 節による構成	
§83.3 ini 句による構成	
§83.4 比較対象がない場合	
§84 優劣表現に関する特筆事項 .....	136
§84.1 ini 句による表現で曖昧性が生じる例	
§84.2 ini 句による表現にできない例	
§85 優劣表現での差異の表現 .....	137
§85.1 構成	
§85.2 差異の基準	
§86 逆の優劣表現 .....	138
<b>同等表現</b>	
§87 同等表現 .....	140
§87.1 概要	

§87.2 ini 節や ini 句による構成	
§87.3 ni を用いない構成	
§88 同等表現での倍数の表現	141
<b>最上表現</b>	
§89 最上表現	142
§89.1 概要	
§89.2 構成	
§89.3 比較範囲がない場合	
§90 順位の表現	142
§91 逆の最上表現	142
<b>数の表記と読み</b>	
§92 数辞の種類	144
§93 数の表記	144
§94 動詞型不定辞の数辞の読み	145
§94.1 整数	
§94.2 整数部分が 0 の小数	
§94.3 一般の小数	
§95 名詞型不定辞の数辞の読み	147
§96 合成語でのみ見られる数辞	147
§96.1 10 以上の数辞	
§96.2 序数辞	
<b>数辞の用法</b>	
§97 動詞型不定辞の数辞の用法	150
§97.1 基本用法	
§97.2 基数表現	
§97.3 序数表現	
§97.4 比較表現での用法	
§97.4.1 優劣表現	
§97.4.2 同等表現	
§97.4.3 最上表現	
§97.5 「以上」や「以下」の表現	
§98 名詞型不定辞の数辞の用法	154
§99 数辞を用いた表現	154
§99.1 日付	
§99.2 時刻	
§99.3 回数	
§99.4 動作の程度の明示	

## 助詞や接続詞の特殊構文

§100 例外助接辞の動詞修飾形 .....	158
§100.1 助詞用法	
§100.2 接続詞用法	
§101 限定節の動詞の省略 .....	159
§102 接続詞の意味の助詞 .....	160
§103 接続詞や連結詞の副詞的用法 .....	160

## 話法

§104 直接話法 .....	162
§104.1 e 句に置く方法	
§104.2 遊離直接話法	

## 遊離助詞句

§105 遊離助詞句 .....	164
§105.1 概要	
§105.2 疑問文への回答	
§105.3 yo 句	
§105.4 名詞のみを述べるため	
§105.4.1 概要	
§105.4.2 遊離 a 句	
§105.4.3 遊離 e 句	
§105.5 命令表現的な遊離助詞句	
§105.6 上記以外の遊離助詞句	

## モノとコト

§106 モノとコト .....	168
§107 モノとコトの使い分け .....	168
§107.1 基本助接辞の補語	
§107.2 基本助接辞以外の助接辞の補語	
§107.3 形容詞の被修飾語	
§108 モノとコトの例外規則 .....	170
§108.1 接続詞用法をもつ助接辞の直後	
§108.2 内容のあるモノ名詞	
§108.3 節の代わりに名詞が置かれる場合	

## 修辭的な表現

§109 挿入 .....	172
§109.1 概要	
§109.2 記号による違い	
§109.2.1 タデックによる挿入	

# 目次

§109.2.2 タデックロットによる挿入	
§109.3 挿入表現かどうかによる意味の違い	
§110 強調	174
§110.1 kod, les による強調	
§110.2 転移による強調	
§110.2.1 文頭転移	
§110.2.2 文末転移	
§111 反語	175
<b>省略</b>	
§112 助詞句の省略	176
§113 受動相当表現	176
§114 節の代わりとなる表現	177
§114.1 名詞	
§114.2 形容詞	
§115 助詞や連結詞の省略	178
§115.1 o	
§115.2 i	
§115.3 iva	
<b>縮約</b>	
§116 縮約形	180
§117 縮約の傾向	180
§117.1 'l, 'c, 's, 't	
§117.1.1 基本法則	
§117.1.2 縮約が起こりにくいケース	
§117.1.3 命令文での loc	
§117.2 'k	
§117.3 'n	
§117.4 di'	
§117.5 al', ac'	
§117.6 s'	
<b>繰り返しの回避</b>	
§118 繰り返しの代わりをする単語	184
§118.1 概要	
§118.2 met による方法	
§118.3 l による方法	
§119 合成語化	185

## その他の表現

§120 動詞の同族項 .....	186
-------------------	-----

## 代辞

§121 代辞 .....	188
§121.1 総論	
§121.2 近接代辞	
§121.3 遠方代辞	
§121.4 指示代辞	
§121.5 疑問代辞	
§121.6 不在代辞	
§121.7 不定代辞	
§121.8 特定代辞	
§121.9 任意代辞	
§121.10 同種代辞	
§121.11 一般代辞	
§122 複数回使われた代辞 .....	190
§123 〈不定代辞+修飾の代辞〉による言い換え .....	190
§123.1 概要	
§123.2 指示代辞	
§123.3 指示以外の代辞	

## 間投辞

§124 間投辞 .....	192
§124.1 用法	
§124.2 修飾語句を伴う間投詞	
§125 yo 句 .....	193
§126 擬音間投辞 .....	193

## 派生語の構成

§127 合成成分 .....	194
§128 合成語の構成 .....	194
§128.1 合成成分による合成語	
§128.1.1 構成	
§128.1.2 意味	
§128.2 飾辞との合成語	
§128.2.1 構成	
§128.2.2 意味	
§129 アプラウトによる派生 .....	195
§129.1 名辞化アプラウト	
§129.1.1 構成	

§129.1.2 意味	
§129.2 動辞化アブラウト	
§129.2.1 構成	
§129.2.2 意味	
§130 間投辞の派生 .....	196
<b>外来語の転写規則</b>	
§131 外来語の転写方法 .....	198
§132 音写 .....	198
§132.1 一般則	
§132.2 英語での諸規則	
§132.3 日本語での諸規則	
§133 音節構造の調整 .....	199
<b>補遺</b>	
§134 別名 .....	202
§134.1 語彙的品詞	
§134.2 副詞と形容詞や動詞との意味関係	
§135 古い用語 .....	202
§135.1 語彙的品詞一般	
§135.2 語彙的品詞	
§135.3 文法的品詞	
§135.4 態	

# 初めに

## この本の概要

この本は、シャレイア語公式サイト『Avendia』で公開されている参照文法を書籍の形に整形し直したものである。

この本の内容は、<sup>H4649</sup>(グレゴリオ暦2024年10月14日)時点で公式サイトに公開されていた参照文法と同一である。シャレイア語の文法は研究や改定などにより随時更新されるものであるから、この本の内容が最新のものであるとは限らないことに十分注意されたい。この本の内容と公式サイトの内容とに齟齬がある場合は、公式サイトの内容が優先される。

## 口語と文語について

シャレイア語は、口語と文語の区別がほとんど存在しない。そのためこの本では、基本的に口語と文語を区別せずに規則を記述している。両方で規則に違いが生じる場合は、文語での規則を述べた後に口語との違いを補足するという形式を取っている。

## 用語について

### 送り手と受け手

この本では、発音や表記法に関するセクションを除き、口語と文語を基本的に区別していない。そのため、口語における話し手と文語における書き手のことを総称して「送り手」と呼び、口語における聞き手と文語における読み手のことを総称して「受け手」と呼んでいる。

### 前接語と後接語

この本では、前の単語と発音上結びつく接語(encliticの意味)を「前接語」と呼び、後ろの単語と発音上結びつく接語(procliticの意味)を「後接語」と呼んでいる。これらの用語は文献によって逆の意味で使われることがあるので注意せよ。

### その他の注意すべき用語

以下に挙げるシャレイア語における用語は、一般的な意味とは特に異なる意味で用いられる。これらの用語のシャレイア語における詳細な意味は、この本の該当のセクションで確認されたい。

「完了相」と「終了相」はどちらも相の一種であるが、その意味は一般的なものから大きく異なる。詳細な意味は§62.1を見よ。

「能格」は、他動詞の動作主体を表す格ではなく、補助態という独自の態で現れる



## 初めに

動作主体を表す格を指す。詳細な意味は §24.8 や §67.3 を見よ。

「名詞句」や「形容詞句」のような品詞名に「句」が付いた形の用語は、その品詞のように扱われる語句のことではなく、その品詞の単語を主要部とする語句のことを指す。例えば、〈助詞＋名詞〉の形の語句は形容詞のように名詞を修飾することがあるが、これは形容詞句ではない。

「活用」は、動詞の語形変化のみならず、語形変化全般を表す。

# 文字

## §1 シャレリア文字と転写

シャレリア語は、「シャレリア文字 (Shaleian script)」と呼ばれる独自の文字体系をもつ。しかし、これは創作された架空の文字体系であるため、Unicodeなどの既存の文字コードには収録されておらず、コンピュータ上で入力したり表示したりするのが難しい。そこで、シャレリア文字それぞれに既存の文字を対応させ、シャレリア文字を記す代わりに対応する既存の文字を記すという方法が用いられることが多い。この表記を「転写 (transliteration)」と呼ぶ。

転写による表記は、シャレリア文字をコンピュータ上で扱う目的の他に、シャレリア文字に慣れていない初学者に対して文章を読みやすくする目的でも用いられることもある。

## §2 文字の改定

シャレリア文字は  $H_{2138}$  (グレゴリオ暦 2017 年 11 月 29 日) に一度改定されており、この文法書に記載されているものは改定後の文字である。この改定以降は基本的に改定後の文字が利用されるが、改定前のデザインを引き継いだ場合などで改定前の文字がそのまま用いられることもある。改定前の文字についてはこの文法書では触れないため、を参照すること。

## §3 アルファベット

### §3.1 基本形

シャレリア文字は音素文字であり、1つの文字に1つの音素が対応している。この対応関係については §11 に記載されている。

以下に、シャレリア文字の基本字母 25 字の一覧を示す。表の中央がシャレリア文字の形を表し、左上のラテン文字はその転写を表す。シャレリア文字には複数の書体があり、書体ごとに各字母の標準的な形は異なるが、以下では最も基本的とされる「シフ体」という書体での形を示す。

s	z	t	d	k	g
U	U)	C	C)	δ	δ)
f	v	p	b	c	q
∩	∩)	δ	δ)	φ	φ)
x	j	l	r	n	m
∞	∞)	φ	φ)	∩	∩)
y	h				
∩	∩)				
a	e	i	o	u	
o	∩	∩	∩	∩	

シャレイア文字は、ラテン文字等と同じくベースライン、ミーンライン、ディセンドー、アセンドーの概念をもつ。文字形の基本部分はベースラインとミーンラインの間に収まり、文字によってはそこから下にはみ出るディセンドーや上にはみ出るアセンドーをもつ。

z, d, g, v, b, q, j, r, m, h に共通して見られる縦線は「変音符 (transphonetic mark)」と呼ばれる。変音符はあくまで文字の一部であり、独立した記号として見なされることはない。

一部の文字にはダイアクリティカルマークが施されることがある。これについては §5 で触れる。

### §3.2 定高形

アルファベットには、以下に示す形もある。この形は「定高形 (isohypsal form)」や「大文字 (capital letter)」と呼ばれ、これに対して通常のは「基本形 (basic form)」や「小文字 (small letter)」と呼ばれる。

定高形は、ベースラインからアセンドーまでを占め、文字によらず全て同じ高さで

書かれる。ディセンダーはもたない。

定高形は、文字が単語の音素を表すためではなく記号として使われるときに用いられる。例えば、「主語を *S* で表すことにすると」という表現における「*S*」は、/s/ という音素を表しているのではなく変数という記号として使われているが、このようにときに定高形が用いられる。また、ロゴやサイン等で装飾目的で用いられりすることもある。

## §4 数字

### §4.1 基本形

数は 10 進法によって数えられるため、数字は全部で以下に示す 10 字ある。表の中央がシャレイア文字の形を表し、左上のラテン文字はその転写を表す。数字にも書体の区別があるが、以下では最も基本的とされる「シフ体」という書体での形を示す。

0	1	2	3	4
0	6	γ	0	h
5	γ	ω	h	9

数を表記する際は、dev al'6 や ben ac'12 のように数字が用いられることもあれば、dev al'aric や ben ac'atisetqec のように数の読みがアルファベットで綴られることもある。数の表記法については §93 を、数の読みについては §94 と §95 を参照すること。

### §4.2 定高形

数字には、以下に示す形もある。アルファベットと同様に、この形は「定高形 (isohypsal form)」や「大文字 (capital letter)」と呼ばれ、これに対して通常の形は「基本形 (basic form)」や「小文字 (small letter)」と呼ばれる。

文章中における数字は、基本形も定高形もどちらも用いられる。ただし、1つの文書内で基本形と定高形を混在させることはない。

## §5 ダイアクリティカルマーク

### §5.1 基本形

a, e, i, o, u の5つの字母には、以下のように3種類のダイアクリティカルマークが付けられることがある。表の中央がシャレイア文字の形を表し、左上のラテン文字は転写を表す。

ā	ê	î	ô	û
â	è	ï	ò	ù
á	é	í		

ダイアクリティカルマークがあるものとなないものは異なる文字として扱われ、同一視されることはない。しかし、少数の例外的な単語に現れる場合を除き、ダイアクリティカルマークの有無で表す音素は変化しない。なお、文字と音素の対応については§11を参照すること。

### §5.2 簡略化や省略

3種類のダイアクリティカルマークの有無および種類は厳密に区別され、通常の記事においては簡略化されたり省略されたりしない。しかし、文書の題字やロゴなどで文字に特別な装飾を加える場合に限り、ダイアクリティカルマークが簡略化されたり省略されたりすることがある。

ダイアクリティカルマークが簡略化される際は、3種類のダイアクリティカルマークが全て水平な横線もしくは点に置き換えられる。この簡略化がなされている箇所では、ダイアクリティカルマークの有無のみが区別され、ダイアクリティカルマークの種類は区別されなくなる。

### §6 転写の代用表記

§5で述べたように、シャレイア文字の転写にはâやáのようなダイアクリティカルマークが付けられたラテン文字も用いる。これらの文字が技術上どうしても入力できない場合は、以下の表に示すような代用表記が用いられることがある。ただし、

技術上不可能でないのであれば正式な転写を用いることが強く推奨されている。

正式	代用
â (U+00E2)	aa
ê (U+00EA)	ee
î (U+00EE)	ii
ô (U+00F4)	oo
û (U+00FB)	uu
á (U+00E1)	ai
é (U+00E9)	ei
í (U+00ED)	ie
à (U+00E0)	au
è (U+00F8)	eu
ì (U+00EC)	iu
ò (U+00F2)	oa
ù (U+00F9)	ua
' (U+02BB)	'







転写	名称		用途の概略
.	dek	デッキ (dek)	文の終わりを示す
!	vadek	ヴァデッキ (vadek)	強調の意味を込めて文の終わりを示す
?	padek	パデッキ (padek)	疑問の意味を込めて文の終わりを示す
,	tadek	タデッキ (tadek)	文中での区切りを示す
—	tadeklot	タデッキロット (tadeklot)	挿入を示す
'	nôk	ノーク (nok)	省略を示す
'	dikak	ディカック (dikak)	固有名詞であることを表す
-	fêk	フェーク (fek)	合成語を作る
+	losek	ロセック (losek)	飾辞の接続方向を示す
:	kaltak	カルタック (kaltak)	データの区切りを示す
...	fôhak	フォーハック (fohak)	静寂や余韻を表す
^	tadnibit	タドニビット (tadnibit)	発話の中断を表す
~	tadvôl	タドヴォール (tadvol)	発話における長音を表す
=	fêklêdik	フェークレーディック (fekledik)	文と文の繋がりを表す
« »	rakut	ラクット (rakut)	会話文であることを明示する
" "	vakut	ヴァクット (vakut)	引用や強調であることを明示する
.	tîktaz	小数点 (decimal point)	整数部分と小数部分を分ける

デッキ, タデッキ, ヴァデッキは、総称して「デッキ類 (deklike)」とも呼ばれる。

ラクットとヴァクットは、それぞれ左側と右側から成る1組の約物である。左右は区別される。ラクットの左右は明確に形が異なるが、ヴァクットの左右は形が同じになることも多い。

形が似ている約物の違いには十分注意されたい。ノーク, ディカック, ヴァクットは全て短い縦線だが、ノークは垂直もしくは若干傾いた直線として上から下へ書かれるのに対し、ディカックは右上へ払うように曲線的に下から上へ書かれる。また、ヴァクットはノークやディカックよりも若干高い位置に書かれる。

## §7.2 デッキ類

文の最後には、デッキ, パデッキ, ヴァデッキのいずれかが置かれる。通常の文ではデッキが置かれるが、その文が疑問のニュアンスを含む場合はパデッキが代わりに置かれる。また、その文を特別強調したいときや語調が強いときなどはヴァデッキが代わりに置かれ、そのときにその文が疑問のニュアンスも含む場合はヴァデッキとパデッキがこの順で置かれる。パデッキとヴァデッキを同時に使う場合は必ずヴァデッキが先に置かれ、パデッキが先に置かれることはない。また、パデッキやヴァデッキがそれぞれ2つ以上同時に使われることもない。

ヴァデックとパデックが同時に用いられる場合、ヴァデックとパデックを単純に並べて書くと点は合計4つになるが、点は4つではなく2つしか書かれない。これは、ヴァデックとパデックがまとめて1つの記号になっていると考えられているためである。この合字記号は!?(U+2049)で転写される。

## §7.3 タデック

### §7.3.1 概要

タデックは、文中における構文の区切りを示す。続くサブサブセクションで、タデックが必ず置かれる場所とタデックが置かれることのある場所を列挙する。ここに挙げた場所以外にタデックが置かれることはない。

### §7.3.2 必須の箇所

以下の場所にはタデックが必ず置かれる。

- ▶ 副詞的用法で用いられている接続詞の直後 (§103 参照)
- ▶ 間投詞の前後 (§124.1 参照)
- ▶ 文頭強調された語句の直後 (§110.2.1 参照)
- ▶ 文末強調された語句の直前 (§110.2.2 参照)
- ▶ 挿入構文の前後 (§109.2.1 参照)

### §7.3.3 任意の箇所

以下の場所ではタデックが置かれることも置かれなくてもある。

- ▶ 動詞修飾接続詞節と主節の間 (§78.1 参照)
- ▶ 従属節の終わり
- ▶ kin の直後 (§80.1 参照)

## §7.4 タデックロット

タデックロットは、タデックの代わりに用いられて、囲まれた部分が挿入句であることを明示する。タデックロットで囲まれている場合、通常の挿入構文に加えて、完全な節がそのまま挿入される形も許される。詳細は §109.2.2 を参照せよ。

## §7.5 ノーク

ノークは、縮約形を明示するために使われる。語彙として認められている縮約形に対してのみ使われ、単に単語の綴りの一部分を省略しただけの箇所にノークが使われることはない。縮約形については §116 を参照せよ。

## §7.6 ディカック

### §7.6.1 概要

ディカックは、それに続く語が固有名詞であることを示す。フェークによって複数の単語が組み合わさっている場合は、それを構成している単語それぞれに対し、その単語が固有名詞であればその直前にディカックが付けられる。例えば、*kolod* と *'tôkôs* の組み合わせでできる *kolod-'tôkôs* においては、*kolod* は一般名詞なためディカックが付けられておらず、*'tôkôs* は固有名詞であるためディカックが付けられている。また、シャレイア名は2つの単語から成るが、両方とも固有名詞であるため、*'zifil-'xaléras* のように両方にディカックが置かれる。

### §7.6.2 有無の傾向

全ての固有名詞にディカックが付けられるわけではなく、辞書に載っていない名詞や広くは知られていない名詞であればあるほどディカックが付けられやすくなる。逆に、誰もが知っていて辞書にも載りそうな固有名詞であれば、ディカックが付けられないことが多い。ただし、これらはあくまで傾向であって絶対的な規則はなく、筆者や文脈によって同じ単語でもディカックが付けられたり付けられなかったりする。以下に、名詞の種類ごとのディカックの有無に関する詳細を述べる。

人名については、その人名が指す人の知名度などにはよらず、ディカックが付けられる。ただし、*nikolas* 「サンタクロース」や *kerâset* 「キリスト」など、ディカックが付けられない方が多い例外的な名前もある。企業名や集団名も、人名と同様にディカックが付けられる。

国名は、受け手として想定している人の間で知名度が高いと考えられるものであればディカックが付けられず、知名度が低いと考えられるものにはディカックが付けられる。国より下位の都市や村などの名前には、知名度に関係なくディカックが付けられるのが普通である。

書籍や楽曲などの作品のタイトルは、ヴァクトで囲むのが普通で、そのヴァクトが囲まれた中身が固有名詞であることを明示する役割を担うため、そこにさらにディカックが付けられることはない。天体名、言語名、暦名、宗教名、書体名、文字名、記号名にはディカックは付けられない。

## §7.7 フェーク

フェークは、複数の単語を組み合わせて1つの単語と見なすとき、単語と単語の間に入れられる。1つの意味の言葉は必ず1つの単語で表されるため、複数の単語を1つにまとめるためにフェークが用いられる。例えば、「京都大学」は *ziddes-'kôtos* と書かれ、このフェークは省略されない。

また、数の読みを綴る際には、区切りの位置にフェークが入れられる。詳しくは

§94を参照せよ。

修飾語句で修飾された名詞を参照するとき、その名詞とその修飾語句に含まれる名詞をフェークで繋げて1単語としたものが、その名詞句を指す代名詞として使われることがある。詳しくは§119を参照せよ。

### §7.8 ロセック

ロセックは、それが付いている単語が飾辞であることを示すとともに、その飾辞の接続方向を表す。ロセックが最初に付いている飾辞は他の単語に接尾して合成されるものであり、ロセックが最後に付いている飾辞は他の単語に接頭して合成されるものである。飾辞が別の単語と合成されて合成語を作った場合、ロセックは合成語の綴りから取り除かれる。なお、飾辞については§32を参照せよ。

### §7.9 カルタック

カルタックは、数値などのデータを区切るのに用いられる。日本語や英語におけるスラッシュと用法が似ている。主に日時の略記に用いられることが多いが、これについては§99.1と§99.2でも詳しく述べる。

### §7.10 フォーハック

フォーハックは、発話における余韻や沈黙を表す。単語と単語の間ならばどこにでも置かれるが、節の始まりか終わりに置かれることが多い。また、フォーハックのみで文を構成することもある。さらに、複数のフォーハックが連続して置かれることもあり、その場合は個数で余韻や沈黙の長さを表す。

フォーハックは、その性質上、発言を文字起こししたものや小説中の台詞部分などにしか現れない。特にフォーマルな文章で使われることはない。

### §7.11 タドニビット

タドニビットは、発話においてその位置で発言が中断されたことを表す。ある単語の直後で発話が途切れた場合、その単語の直後にタドニビットが置かれる。ある単語を発している途中で発話が途切れた場合は、発した部分までの不完全な綴りの直後にタドニビットが置かれる。例えば、*kosaxlêsal* の *lê* の箇所まで発音した後に言い淀んだり囁んだりしたことを表すために、*kosaxlê^* と表記される。

タドニビットによる中断の明示は任意であり、文の途中で発話が切れたことが約物によって明示的に示されないこともある。ただし、単語の途中で発話が中断した場合は、そこまでの不完全な綴りが約物なしで記されることは少なく、タドニビットが用いられることが多い。

タドニビットは、その役割上、発言を文字起こししたものや小説中の台詞部分などにしか現れない。特にフォーマルな文章で使われることはない。

### §7.12 タドヴォール

タドヴォールは、発話においてその直前の音が通常より長く発音されたことを表す。基本的には単語中の母音の直後に挿入される形で置かれる。また、タドヴォールが複数個連続して挿入されることもあり、そのときはその音が非常に長く伸ばして発音されたことを意味する。例えば、*siya* の *i* が通常より長く発音されたことを表すために、*si~ya* や *si~~ya* などと表記されることがある。

タドヴォールによる長音の明示は任意である。実際の発話で長く発音されていても、文字の上では一切明示されないことも多い。

タドヴォールは、その役割上、発言を文字起こししたものや小説中の台詞部分などにしか現れない。特にフォーマルな文章で使われることはない。

### §7.13 フェークレーディック

フェークレーディックは、文末のデッキ類の直後に置かれ、その文と次の文とが構文的もしくは意味的に密接な関係にあることを示す。英語におけるセミコロン用法に似ている。

典型的には、遊離直接話法において、発言や思考を表す動詞がある文と直後の直接話法部分との繋がりを表すのに使われる。ただし、遊離直接話法で必ずフェークレーディックが使われるわけではない。遊離直接話法については §104.2 を参照せよ。

### §7.14 ラクット

ラクットは、開きラクットと閉じラクットの2つの記号から成り、必ず対となって用いられる。開きラクットと閉じラクットで文を囲むという形で用いられ、囲まれた部分が会話内容や思考内容であることを示す。ラクットによる囲みが入れ子になることもあるが、そのときに記号が変えられることはない。なお、日本語の鉤括弧や英語のクォーテーションマークなどと違い、ラクットは会話内容や思考内容を表すのみで、引用や強調を表すことはない。

ラクットの中身は文になるので、文末には文末を示すデッキ類が置かれる。ただし、ラクットの中身が数単語で短い場合は、文末のデッキ類が省略されることがある。

ラクットで囲まれた部分が文末にあっても主文の最後のデッキ類は省略されないため、ラクットの内部のデッキ類が省略されていないのであれば、デッキ類, 閉じラクット, デッキ類がこの順で文末に並ぶことになる。一方、ラクットが遊離直接話法で用いられている場合は、ラクットの外側にデッキ類は置かれない。

ラクットを用いた話法については §104 で詳しく扱う。

## §7.15 ヴァクト

ヴァクトは、開きヴァクトと閉じヴァクトの2つの記号から成り、必ず対となって用いられる。開きヴァクトと閉じヴァクトで表現を囲むという形で用いられ、囲まれた部分を強調したりその部分が引用であることを示したりする。ヴァクトによる囲みが入れ子になることもあるが、そのときに記号が変えられることはない。

ヴァクトの中身におけるデック類の扱いはラクトの場合と全く同様である。詳細は§7.14に譲る。

## §7.16 小数点

小数点は、数を数字で記す際に、整数部分と小数部分を分けるために小数部分の直前に置かれる。数の表記についての詳細は§93に譲る。

## §8 スペーシング

### §8.1 基本法則

単語と単語の間にはスペースが1つ入れられる。約物周りのスペーシングについては続くサブセクションで個別に述べる。

デック類の直後と遊離直接話法におけるラクトの前後に入れられるスペースは、単語の区切りである上に文の区切りでもあるため、単語間のスペースの1.5倍の幅になることが望ましいとされている。しかし、単語間のスペースと同じ幅にされる場合も多い。電子データで表現する場合は、このスペースも単語間のスペースも同じスペース符号(U+0020)1つで表現される。

### §8.2 デック類

デック類の前にはスペースは入らず、デック類の後にはスペースが入る。

以下にデック類が使われた表記例を挙げる。

- (1) lanes a ces ca sod i refet.  
▶ 彼は友達の家に行った。
- (2) pa salot e pas a qos? dusokat a tel e ces.  
▶ あの人は誰? 私知らないんだけど。
- (3) salot a cal e adasos ebam! di'dupâmis a's.  
▶ それはとても重要です! 忘れないでください。
- (4) pa xânac a ces!?  
▶ 彼は生きているの!?

### §8.3 タデック

タデックの前にはスペースは入らず、タデックの後にはスペースが入る。

以下にタデックが使われた表記例を挙げる。

(1) pa lesec, sê, e pil a loc, te cákes a ces?

▶ ねえ、彼が来たとき何してたの？

### §8.4 タデックロット

タデックロットの前後には必ずスペースが入る。

以下にタデックロットが使われた表記例を挙げる。

(1) sôdes a ces e sakil — adoqsaret ebam.

▶ 彼はリンゴを食べた——とてもまずかった。

(2) nîpes a ces fi tirad adak — fadakas okòv a tel e cal — zi sokul acik.

▶ 彼は全く音を立てずに——私はそのことに気づいていたのだが——その部屋を立ち去った。

### §8.5 ノーク

縮約形は1つの単語として扱われることが多いが、スパーシング規則の例外として、縮約形のノークが置かれている側にはスペースが入らない。したがって、ノークの前後にはスペースが入らない。

以下にノークが使われた表記例を挙げる。

(1) lices a'l te tazit e'n raflesac a's ca refet afam al'ayos.

▶ 私は昨日彼が3人の女友達と話しているのを見た。

### §8.6 ディカック

ディカックの後にはスペースが入らない。また、必ず単語の先頭に置かれるため、フェークで繋がれた2つ目以降の単語に付けられている場合を除き、ディカックの前には単語の区切りを表すスペースが入ることになる。

以下にディカックが使われた表記例を挙げる。

(1) qorases a tel fe 'xastil ca feranes.

▶ 私はシャスティルと一緒にフランスへ旅行した。

### §8.7 フェーク

フェークの前後にはスペースは入らない。

### 58.8 ロセック

ロセックの前後のうち、飾辞の綴りがある側にはスペースは入らない。すなわち、ロセックが飾辞の前に付いているならロセックの後ろにはスペースが入らず、ロセックが後ろに付いているならロセックの前にはスペースが入らない。

### 58.9 カルタック

カルタックの前後にはスペースは入らない。

以下にカルタックが使われた表記例を挙げる。

- (1) nipes a tel te 30:07.  
▶ 7時30分に家を出た。

### 58.10 フォーハック

基本的には、フォーハックの前にはスペースは入らず、後にスペースが入る。ただし、フォーハックの後にデッキ類やタデッキが続く場合は、フォーハックとデッキやタデッキの間にはスペースが入らない。また、フォーハックが節の頭で使われているときは、フォーハックの前にスペースが入り、後にはスペースが入らない。

以下にフォーハックが使われた表記例を挙げる。

- (1) ..... dà..., bari salot a cal... e ayát, ...duzefedak a'l e cal...  
▶ ……。でも…、たとえそれが…本当だとしても、…私は受け入れられない。

### 58.11 タドニビット

タドニビットの前にはスペースは入らない。また、タドニビットは常に単語の末尾に置かれるため、タドニビットの後ろには単語の区切りを表すスペースが(必要なら)入ることになる。

- (1) yo 'xas^ 'xastil asen.  
▶ シヤス…シヤステイルさん。  
(2) te qetet a tel vo vosra^..., du, te qetet a'l vo sod, cákes a ces.  
▶ 私がカフェ…、いや私ที่บ้านにいるとき、彼女が来た。

### 58.12 タドヴォール

タドヴォールの前後にはスペースは入らない。ただし、タドヴォールが単語末に挿入されている場合は、その後ろに単語の区切りを表すスペースが(必要なら)入ることになる。

- (1) e nibi~t! nozejac a loc.  
▶ ストープ!間違ってるよ。



(2) *sî~ya~~ yo loc!*

▶ こーんにちは一、みなさん!

### §8.13 フェークレーディック

フェークレーディックの前にはスペースは入らない。また、フェークレーディックは文末に置かれるため、フェークレーディックの後ろには文の区切りを表すスペースが入ることになる。

(1) *reves a ces.- «dozat lesaf a tel e cal te sot?»*

▶ 彼女は思った。「それを今やる必要はあるのだろうか?」

(2) *lanes a tel e kolot.- dules a ces.*

▶ 私は駅に行った。彼は行かなかったけど。

### §8.14 ラクット

ラクットの内側にはスペースは入らず、外側にはスペースが入る。閉じラクットの後にデッキ類やタデッキが続くときは、その間にはスペースは入らない。

以下にラクットが使われた表記例を挙げる。

(1) *kéces a ces e «zedat lanis a'l ca zîdrahit, ri xakalit te tacál.»*

▶ 彼は「もし明日晴れたら、遊園地に行こうと思う。」と言った。

(2) *kéces a ces. «zedat lanis a'l ca zîdrahit, ri xakalit te tacál.»*

▶ 彼は言った。「もし明日晴れたら、遊園地に行こうと思う。」

(3) *bava kéces ca tel e «di'dukûvis odûg a'c ca cêd!», kûves a tel ca cêd.*

▶ 「そこには絶対入るな!」と言われていたのに、私は入ってしまった。

(4) *sitifes a ces e «te lôk acál.»*

▶ 彼は「また今度ね」と囁いた。

### §8.15 ヴァクット

ヴァクット周りのスペーシングは全てラクットの場合と同様であるため、詳細は§8.14に譲る。

### §8.16 小数点

小数点の前にはスペースを入れない。ただし、整数部分が0であるような数は小数点から始めて記されるので、そのような場合は直前に単語の区切りを表すスペースが入ることになる。

## §9 改行

改行はスペースがある場所かフェークの直後でのみ行われる。単語の途中で改行されることはない。

スペースがある場所で改行された場合、改行がスペースの役割を果たすため、行末や行頭に空白は作られない。フェークの直後で改行された場合、フェークは前半の行の最後に置かれる。

標識などにおいて1つの単語を1行に入れられないほどに横幅が狭く、やむを得ず改行が必要な場合は、音節の区切りで改行される。この際、単語の途中で改行されたことを示すような特別な記号は用いられない。



# 音素

## §10 音素

### §10.1 子音

シャレイア語で用いられる子音の音素を、以下に国際音声記号で示す。各記号は、音素を表しているとともに、その音素の最も代表的な実現音声にもなっている。

		唇 歯		口蓋 声門	
破裂	無声	/p/	/t/	/k/	
破裂	有声	/b/	/d/	/g/	
摩擦	無声	/f/	/θ/	/s/	/ʃ/
摩擦	有声	/v/	/ð/	/z/	/ʒ/
破裂	無声		/t͡s/		
破裂	有声		/d͡z/		
鼻		/m/	/n/	/ɲ/	
接近			/l/	/ɻ/	/j/
弾き			/r/		

### §10.2 母音

シャレイア語で用いられる母音の音素を、以下に国際音声記号で示す。短母音と二重母音が区別される。各記号は、音素を表しているとともに、その音素の最も代表的な実現音声にもなっている。

	前	後
狭	/i/	/u/
中	/e/	/o/
広	/a/	

	前	後
中	/eɪ/	/oɔ/
広	/aɪ/	/aɔ/

## §11 文字と音素の対応

### §11.1 基本法則

シャレイア文字は音素文字であるため、原則として1つの文字が1つの音素を表す。以下の表に各文字が表す音素を列举する。

文字	音素
s	/s/
z	/z/
t	/t/
d	/d/
k	/k/
g	/g/
f	/f/
v	/v/
p	/p/
b	/b/

文字	音素
c	/θ/, /t͡s/
q	/ð/, /d͡z/
x	/ʃ/
j	/ʒ/
l	/l/, /ɾ/
r	/ɾ/
n	/n/, /ɳ/
m	/m/
y	/j/
h	/h/, ∅

文字	音素
a	/a/
e	/e/
i	/i/
o	/o/
u	/u/

1つの文字が2つ以上の音素を表したり、特定の条件下のみで現れるため対応する文字が存在しない音素があったりなど、少数の例外がある。以下に示すサブセクションで、この例外について個別に述べる。

- ▶ c, q — §11.3
- ▶ l — §11.4
- ▶ n — §11.6
- ▶ h — §11.5

## §11.2 ダイアクリティカルマーク付きの母音字

母音字にはダイアクリティカルマークが付くことがあるが、ダイアクリティカルマークの有無で発音は変化しない。したがって、例えば a, â, á, à は全て /a/ と発音される。しかし、以下の表に示す単語に含まれているダイアクリティカルマーク付き母音字のみ例外で、表の通りの二重母音として発音される。

単語	発音
ò	/oɔ̃/
é	/eɛ̃/
á	/aɶ̃/
à	/aʊ̃/

単語	発音
lé	/leɪ/
lá	/laɪ/
dà	/daʊ̃/

なお、ここで現れる二重母音は旧発音と呼ばれる発音方式であり、これらの単語でのみ使われる。旧発音については §12.2 を参照せよ。

## §11.3 c, q

c と q の発音は、話者が軽発音と重発音のどちらの発音変種を選択しているかに応じて決まる。具体的には、以下の表の通りである。

文字	軽発音	重発音
c	/θ/	/tʃ/
q	/ð/	/dʒ/

軽発音と重発音に関する詳細は §12.1 に譲る。

#### §11.4 l

l の発音は、l が音節頭にあつて次に母音が続く場合は /l/ になり、音節末にあつて次に母音が続かない場合は /ɾ/ になる。ただし、たとえ l が単語末にあつても、次に続く単語が母音から始まる場合は、連音現象によって l とその母音は 1 つの音節を形成するため、/l/ で発音されることに注意せよ。連音については §14 を参照されたい。

#### §11.5 h

h の発音は、h が音節頭にあつて次に母音が続く場合は /h/ になり、音節末にあつて次に母音が続かない場合は無音になる。ただし、たとえ h が単語末にあつても、次に続く単語が母音から始まる場合は、連音現象によって h とその母音は 1 つの音節を形成するため、/h/ で発音されることに注意せよ。連音については §14 を参照されたい。

#### §11.6 kin, 'n に現れる n

kin とその縮約形 'n に含まれる n は、例外的に /ŋ/ で発音される。したがって、kin の発音は /kiŋ/ となる。

### §12 発音変種

#### §12.1 軽発音と重発音

c と q の発音には、2 種類の変種が存在する。この発音変種は「軽発音 (light pronunciation)」と「重発音 (heavy pronunciation)」と呼ばれる。それぞれの発音変種における c と q の発音は以下の通りである。

文字	軽発音	重発音
c	/θ/	/tʃ/
q	/ð/	/dʒ/

軽発音と重発音はどちらも正式な発音として認められており、話者は自身の好みに応じて軽発音と重発音のどちらか一方を選択して使う。軽発音を選んだ場合は c と q をそれぞれ /θ/ と /ð/ で発音し、重発音を選んだ場合は c と q をそれぞれ /tʃ/ と /dʒ/ で発音する。軽発音と重発音を混ぜて発音することはしない。例えば、c は /θ/

で発音するにも関わらず q を /dʒ/ で発音するのは不自然である。

軽発音と重発音のどちらを使うかを場面に応じて切り替えることもある。ただし、一繋がりの発話の中で発音を切り替えることはしない。

外来語を取り入れる際は常に軽発音が基準とされる。したがって、英語の /θ/ は c で写され、ドイツ語の /ʃ/ は s で写される。しかしこれはあくまで転写するときだけの決まりであり、転写した結果の単語をシャレイア語としてどう発音するかは、各話者が軽発音と重発音のどちらを使っているかに応じて決められる。例えば、Lithuania /li.θju.ei.ni.ə/ の転写である licuénas を、重発音話者は常に /li.ʃsu.e.nas/ と発音し、もともと /θ/ だったからと言って /θ/ で発音することはない。外来語の音写規則については §132 で述べる。

## §12.2 現行発音と旧発音

母音字と音節末 h の発音に、標準的な発音とは異なるものが使われることがある。この発音変種は「旧発音 (old pronunciation)」と呼ばれる。旧発音に対して、§11.1 で述べられている標準的な発音は「現行発音 (present pronunciation)」と呼ばれる。

以下に現行発音と旧発音で発音が異なる文字の対応表を示す。現行発音でしか用いられない音素があることに注意せよ。

文字	現行発音	旧発音
â	/a/	/aː/
ê	/e/	/eː/
î	/i/	/iː/
ô	/o/	/oː/
û	/u/	/uː/
á	/a/	/aɪ/
é	/e/	/eɪ/
í	/i/	/iɪ/
à	/a/	/aʊ/
è	/e/	/eʊ/
ì	/i/	/iɪ/
ò	/o/	/oʊ/
ù	/u/	/uʊ/
音節末 h	∅	/ə/

§11.2 で述べた少数の例外的な単語に現れた場合を除いて、旧発音が発話の際に用いられることはない。しかし、シャレイア語の単語を日本語や英語で表記する際に旧発音に従うことがある。これは主に歴史的理由による。例えば、シャレイア語で

「シャレイア語」は qilxaléh だが、この「シャレイア」というカタカナ表記や「Shaleian」という英語名称は、xaléh の旧発音 /ʃa.ler.ə/ に由来する。また、シェノの1人である filtih は「フィルティア」と表記されることが多いが、これも filtih の旧発音 /fɪr.ti.ə/ に由来する。

### §13 音節

許される音節の形は V, CV, VC, CVC の4種類のみである。すなわち、オンセットとコーダはともに0個か1個の子音から成り、1つの音節内で子音が2つ以上連続することはない。

外国語から単語が音写によって借用されるときは、オンセットやコーダの子音が1個以下になるよう、適宜 e が挿入されて音節が分けられる。これについては §133 を参照せよ。

コーダに /l/ と /h/ が現れることはないが、オンセットやコーダに現れる子音音素にそれ以外の制約は見られない。また、音節核に現れる母音音素としては、短母音音素は特に制約なく現れるが、二重母音音素は特定の単語でのみ見られる。二重母音音素が現れる単語については §11.2 を参照せよ。

### §14 連音

通常の発話では、文末での休止や表現の区切りがある位置での小休止を除いて、単語は区切られずに発音される。特に、子音で終わる単語の後に母音で始まる単語が続いた場合、その子音と母音が一体となって発音され、1つの音節を形成する。例えば、sôdes や tel は単独では /so.des/ や /tɛr/ だが、sôdes a tel e micés は /so.de.sa.te.le.mi.ðes/ と音節分解される。sôdes や tel の末子音が次の音節に属していることに注目せよ。

この現象のため、単語の区切りが音節の区切りであるとは限らず、特に単語末であっても音節末であるとは限らないことに注意せよ。このことは、l と h の発音に関わる。例えば、単独の tel の l は /r/ で発音されるが、上記の sôdes a tel e micés という表現の中の l は後続する e とともに音節を成すため /l/ で発音される。

## §15 音素の実現

### §15.1 基本法則

本文書では、音素を表す記号として、その音素の代表的な実現音声に対応する国際音声記号を用いた。そのため同じことだが、各音素は、それを表すのに用いられている国際音声記号の音で概ね実現されることになる。例えば、/s/ は概ね [s] として実現される。

ただし、音素の実現に関して特筆すべき現象もあるため、それを続くサブセクショ



ンで述べる。

## §15.2 母音連続間での接近音の挿入

音節を跨いで母音音素が連続した場合、その母音の間に接近音が挿入されることがある。ここで挿入される音は、/e/ や /i/ 等の前舌母音の前後では [j] が代表的で、/o/ や /u/ 等の後舌母音の前後では [w] が代表的である。/i.o/ のような前舌母音と後舌母音の連続においては、間に挿入される音は [j] と [w] の間で一定しない。

なお、これらの母音音素連続が固有の単語に出てくるのは、以下の3つの場合だけである。これ以外は外国語から借用された単語にのみ見られる。

- ▶ ia — a の非動詞修飾形
- ▶ ie — e の非動詞修飾形, 連述詞型不定辞の非動詞修飾連述詞形の活用接頭辞
- ▶ io — 動詞型不定辞の非動詞修飾副詞形の活用接頭辞

## §15.3 同子音連続の長子音化

音節を跨いで同じ子音音素が連続した場合、その子音音素は長子音として実現される。これにより、例えば rifev /ɹi'fev/ と rifeev /ɹi'fev/ はそれぞれ概ね [ɹi'fev] と [ɹi'fe:ev] として実現され、[f] の持続時間によって区別される。

## §15.4 子音連続の同化

### §15.4.1 阻害音の連続

調音位置が同じか近い阻害音が連続した場合、逆行同化により後半の子音の長子音として実現することが多い。例えば、hidsol /hid'sor/, debfot /deb'fot/, kosxoq /kos'foθ/ がそれぞれ [his:or], [def:ort], [kof:orθ] と発音されることが多い。/d.s/, /b.f/, /s.f/ がそれぞれ [s:], [f:], [f:] に同化していることに注目せよ。

ただし、以下の例外が存在する。まず、歯茎摩擦音 /s/, /z/, /ʃ/, /ʒ/ の後に歯破裂音 /t/, /d/ が続く場合は、同化が起こらずそのまま [st], [jd] 等で実現することがほとんどである。同様に重発音では、歯茎摩擦音 /s/, /z/, /ʃ/, /ʒ/ の後に歯破裂音 /tʃ/, /dʒ/ が続く場合や、歯破裂音 /tʃ/, /dʒ/ の後に歯破裂音 /t/, /d/ が続く場合にも、ほとんど同化が起こらない。

また、重発音で現れる /tʃ.s/, /tʃ.z/, /dʒ.s/, /dʒ.z/ は、例外的にそれぞれ [tʃ:], [dʒ:], [tʃ:], [dʒ:] に同化する。この現象は、例えば /tʃ.z/ であれば、これを [+affricate] + /s.z/ と分解して、[+affricate] + /s.z/ → [+affricate] + [z:] → [dʒ:] となったと考えれば理解しやすい。同様の理由で、/tʃ.ʃ/, /tʃ.ʒ/, /dʒ.ʃ/, /dʒ.ʒ/ は、それぞれ [tʃ:], [dʒ:], [tʃ:], [dʒ:] に同化する。

### §15.4.2 流音の連続

流音 /l/, /r/, /ɹ/ が連続した場合、逆行同化により後半の子音の長子音として実現す

ることが多い。例えば、*delris* /der'ris/ は [de:ris] と発音されることが多い。

### §15.4.3 特筆すべき非例

歯茎破裂音の後に歯茎摩擦音が続いた場合、後者の摩擦音の長子音に同化することに注意せよ。他の多くの言語とは異なり、破擦音には同化しない。例えば、/t.s/, /d.f/ はそれぞれ [s:], [f:] に同化し、[ts] や [dʒ] 等が現れることはない。

鼻音の調音位置の同化は起きない。例えば、/n.k/ はそのまま [nk] として実現され、[ŋk] 等になることはない。

### §15.5 単語間での曖昧母音の挿入

子音で終わる単語の後に母音で始まる単語が続く場合、その子音と母音が一体となって発音される。この際、そこが単語間であるという意識から、非常に短い曖昧母音の子音の直後に挿入されることがある。例えば、*sôdes a tel* が [so'desəte:l] のように発音されることがある。*sôdes* の発音の直後に [ə] が挿入されていることに注目せよ。



# アクセント

## §16 アクセント

シャレイア語は強勢アクセントをもつ。アクセントをもつ母音はまず他の母音と比べて少し長めに発音され、また副次的に他の母音を発音するときと比べて大きな声で発音される。

アクセントの位置は、原則として語幹の最後の母音に固定されている。ただし、一部の単語はアクセントをもたずに接語として働き、また合成語はその合成成分の最後の母音にもアクセントが置かれる場合がある。これらの例外については、続くセクションで詳しく述べる。アクセントの位置が固定であることから、アクセントに単語の弁別機能はない。

## §17 有アクセント語とアクセント位置

### §17.1 総論

具体的な意味をもつ内容語はアクセントをもつ。また、内容語ではないものの *kin* もアクセントをもつ。すなわち、アクセントをもつ単語は以下の3種類である。

- ▶ 不定辞 (縮約形を除く)
- ▶ 間投辞
- ▶ *kin* (縮約形の 'n を除く)

アクセントは例外なく語幹の最後の母音に置かれる。ここで注意すべきなのは、アクセントが置かれるのは語幹の最後の母音なのであって、活用した形の最後の母音ではないということである。例えば、*pâziq* の動詞としての活用形である *pâziqes* のアクセントは、語幹である *pâziq* の最後の母音である *i* にあり、活用後の *pâziqes* の最後の母音である *e* にはない。

### §17.2 I

代動辞の *I* には語幹にアクセントをもつための母音がないため、次のような例外的なアクセント規則が適用される。まず、*I* が肯定形で使われた場合は、活用した形に含まれる唯一の母音である動詞活用語尾の母音にアクセントが置かれる。一方、*I* が否定形で使われた場合は、否定活用接頭辞の *du* に含まれる *u* にアクセントが置かれる。例を挙げると、*las* は *a* にアクセントがあり、*dulec* は *u* にアクセントがあ

る。

### §17.3 アクセントの消失

tel と loc および指示代辞は、節の最後以外の場所に置かれたときにアクセントを失う場合がある。このとき、それらの単語は後接語となって続く有アクセント語と一体になって発音される。

## §18 無アクセント語

### §18.1 総論

§17.1 で述べた有アクセント語以外の単語は基本的にアクセントをもたず、前もしくは後ろにある有アクセント語の一部であるかのように発音される。すなわち、これらの単語は接語である。アクセントをもたない単語を列挙すると、以下の通りである。

- ▶ 助接辞, 連結辞
- ▶ 縮約形
- ▶ pa

単語ごとに特有の現象が起こるので、続くサブセクションで個別に詳細を述べる。

### §18.2 pa

pa は常に後接語であり、アクセントはもたない。

### §18.3 助接辞, 連結辞

助接辞と連結辞はともに後接語である。ただし、限定節において cok の省略によって現れる独立した助詞は前接語である。

さらに例外として、助接辞や連結辞が副詞的用法で使われている場合は、その語幹の最後の母音がアクセントをもち、有アクセント語となる。助接辞や連結辞の副詞的用法については §103 を参照せよ。

(1) vade, kavat a tel e kisol atipil.

- ▶ というのも、私には十分なお金がなかったからだ。

(2) dà, ducákés a ces ca koskald teca edif cipases a tel ca ces qi liqet.

- ▶ しかし、私が彼に電話で頼んだ後でさえも、彼は職場には来なかった。

(1) や (2) において、文頭にある vade と dà は副詞的に使われているため最後の母音にアクセントが置かれ、ともに有アクセントとなる。それ以外の助接辞 (文中にある a, e, ca, qi, teca の 5 つ) はアクセントをもたない後接語で、続く単語と繋げて読まれる。

## §18.4 縮約形

di', ac', a' の3つは常に後接語である。

s' は常に助詞の e と結びついて s'e の形で用いられるが、これは全体で後接語である。

'l, 'c, 's, 't, 'k の5つは名詞の縮約形であるため、直前には助詞が置かれておりその助詞と発音上一体となる。このときにできる a'l や e't などの〈助詞 + 縮約形〉という塊は全体で前接語となり、その前に置かれている単語と一緒に発音される。

'n も同様に、直前には助詞が置かれてその助詞と発音上一体となる。このときにできる〈助詞 + 'n〉という塊は、基本的に全体で後接語となる。しかし、これに後続する節が先行する部分から少し切り離して話される場合には、〈助詞 + 'n〉の直後にポーズが置かれ、〈助詞 + 'n〉自身は前接語となる。

## §18.5 前接語の連続におけるアクセント

前接語として振る舞う語句は2個以上連続して現れることがある。その場合、アクセントのない箇所が長く続くのを避けるために、この連続の最後の語句に含まれる最後の母音がアクセントをもつことがある。

(1) kômes a ces e yelicnelas feges e a's te tazît.

▶ 彼は昨日買ったネックレスを身につけた。

(2) pâmat a'l e'n, te câses a'l e ces vo kosxoq, cipases e pil ca'l a's.

▶ 昨日図書館で彼に会ったときに何を頼まれたのか忘れてしまった。

(1) では、e a's の部分で前接語が連続しているので、a's の a がアクセントをもつことがある。(2) では、a'l e'n と ca'l a's が前接語の連続であり、ともに最後の母音がアクセントをもって発音されることがある。

## §19 副アクセント

合成語であってもそれで1単語ではあるので、語幹全体の最後の母音にのみアクセントが置かれるのが原則である。しかし、単語が長いとアクセントのない箇所が長く続くことになるため、語幹を構成している最後以外の合成成分それぞれについて、それに含まれる最後の母音に追加のアクセントが置かれる場合がある。ただし、そのような場合でも、連続する2つの母音がともにアクセントをもつことはない。これによって追加で生じるアクセントを「副アクセント (secondary stress)」と呼び、もともとある全体の語幹の最後の母音に置かれるアクセントを「主アクセント (primary stress)」と呼ぶ。

例を挙げると、tîlirsitpiv は tîlir, sit, piv という3成分の合成であるが、全体の語幹の最後の母音である piv の i に加えて、tîlir の i もアクセントをもつことがある。この

場合、*tíllir* と *sítþiv* という 2 単語が並んでいるかのように発音されることになる。なお、*sít* に含まれる *i* は、主アクセントが置かれる *þiv* の *i* の直前の母音であり、連続した母音がアクセントをもてないという規則から、アクセントをもつことはない。

副アクセントと主アクセントの違いは、副アクセントが場合によって生じたり生じなかったりするという点のみである。副アクセントの音声的な実現は主アクセントと全く同様である。副アクセントの方が主アクセントより長さが短かったり音量が小さかったりはしない。

副アクセントは、ゆっくり喋っているときほど生じやすい。

## §20 否定活用接頭辞のアクセント

否定であることを明確にするため、不定辞の否定形に付けられる否定活用接頭辞の *du* がアクセントをもつことがある。この場合、*du* とそれに続く部分がそれぞれ個々の単語であるかのように発音される。

## §21 合成語化のアクセント

フェークによって複数の単語が繋がられているとき、文法上は 1 つの単語として扱われるが、発音上は単に複数の単語が並べられていると見なされる。したがって、フェークで繋がれている単語がそれぞれ常にアクセントをもつ。

# 品詞

## §22 語彙的品詞と文法的品詞

シャレイア語には、「語彙的品詞 (lexical category)」と「文法的品詞 (grammatical category)」という2種類の品詞がある。語彙的品詞は各単語にちょうど1つずつ割り当てられている品詞で、1つの単語が複数の語彙的品詞をもつことはない。一方、文法的品詞は文中で使われている単語の使われ方に割り当てられている品詞である。

語彙的品詞は単語の分類なので、例えば「tel の語彙的品詞は～である」のように言及することができる。しかし、文法的品詞は単語単体の分類ではなく単語の使われ方の分類なので、文なしで「tel の文法的品詞は～である」と言及することはできず、「この文中に現れている tel の文法的品詞は～である」のように文の中で単語が使われていて初めて言及することができる。ただし、あたかも文法的品詞が単語の分類であるかのように「名詞 tel は」のように言うことがある。このような言い回しは、その単語が何らかの文中で使われることが想定される場合でのみ使われ、「文中で名詞として使われている tel は」の意味である。

## §23 語彙的品詞

### §23.1 概要

語彙的品詞は以下の8種類がある。

- ▶ 名詞型不定辞 (nominal infinitive)
- ▶ 動詞型不定辞 (verbal infinitive)
- ▶ 連述詞型不定辞 (adpredicative infinitive)
- ▶ 特殊詞型不定辞 (special infinitive)
- ▶ 助接辞 (particle)
- ▶ 連結辞 (connective)
- ▶ 間投辞 (interjection)
- ▶ 機能辞 (functional)

動詞型不定辞, 名詞型不定辞, 連述詞型不定辞, 特殊詞型不定辞の4つを総称して「不定辞 (infinitive)」と呼ぶ。

### §23.2 名詞型不定辞

名詞型不定辞は内容語の一種で、主に人や物体や概念などの名称を示す。開いたクラスであり、数は多い。

### §23.3 動詞型不定辞

動詞型不定辞は内容語の一種で、主に動作や状態を表す。開いたクラスであり、数



は多い。

### §23.4 連述詞型助接辞

連述詞型助接辞は内容語の一種で、状態の程度などを表す。ほとんど閉じたクラスであるため数は少なく、20 語程度しかない。

### §23.5 特殊詞型不定辞

特殊詞型不定辞は内容語の一種で、単語によって様々な意味をもつ。ほとんど閉じたクラスであるため数は少なく、10 語程度しかない。

### §23.6 助接辞

助接辞は機能語の一種であり、名詞の格を表したり、複文における2つの節の意味的な関係性を表したりする。閉じたクラスであって数は限られており、全部で70語程度である。

助接辞は、語幹部分だけで用いられることがあるかに応じて、「一般助接辞 (normal particle)」と「例外助接辞 (exceptional particle)」の2種類に分けられる。一般助接辞は語幹部分だけで用いられ、それが最も一般的な用法である。一方、例外助接辞は語幹部分だけでは用いられず、常に活用接頭辞を伴って用いられる。助接辞の活用については§39を参照せよ。

a, e, ca, zi, li の5つの一般助接辞は、特に「基本助接辞 (basic particle)」と呼ばれる。基本助接辞は単独では意味が定まらず、その助接辞が作る助詞句が修飾する語によって意味が決められる。例えば zi は、「囲む」の意味の kucit とともに用いられれば囲むのに使うものを表すが、「遠ざかる」の意味の qon とともに用いられると遠ざかる基準点を表す。

基本助接辞以外の助接辞は、それ自身が特定の意味をもつ。例えば、te は常に時刻を表し、qife は常に被修飾語の例を表す。

### §23.7 連結辞

連結辞は機能語の一種であり、複数の語句を繋げる役割をもつ。閉じたクラスあり、o, ò, é, á, à の5語のみから成る。

### §23.8 間投辞

間投辞は内容語の一種である。以下の3種類に分けられる。

- ▶ 感動や驚きなどの際に咄嗟に口から出るもの
- ▶ 会話中で相手の注意を惹くために意識的に口に出すもの
- ▶ 擬音語

特に擬音語は間投辞に分類され、「擬音間投辞 (onomatopoetic interjection)」と呼ばれる。

擬音間投辞は、他の間投辞と少し異なる扱いを受けることがある。詳細は §126 を参照されたい。

### §23.9 機能辞

機能辞に分類される単語は pa と kin の 2 語のみであり、それぞれ独自の用法をもつ。pa については §56 を、kin については §100.2 を参照せよ。

## §24 文法的品詞

### §24.1 概要

文法的品詞は以下の 11 種類がある。

- ▶ 名詞 (noun)
- ▶ 動詞 (verb)
- ▶ 形容詞 (adjective)
- ▶ 副詞 (adverb)
- ▶ 連述詞 (adpredicative)
- ▶ 特殊詞 (special)
- ▶ 助詞 (preposition)
- ▶ 接続詞 (conjunction)
- ▶ 連結詞 (connective)
- ▶ 間投詞 (interjection)
- ▶ 機能詞 (functional)

動詞、形容詞、副詞の 3 つを総称して「述詞 (predicative)」と呼ぶ。

### §24.2 名詞

名詞は常に助詞とともに現れて助詞句を形成し、その助詞によってその格が示される。文中で名詞が単独で現れることはない。

名詞が修飾関係の根となっている語句、すなわち名詞に何らかの修飾語句 (存在しなくても良い) が係ることで構成されている語句を「名詞句 (nominal phrase)」と言う。名詞のように働く語句を指すわけではないことに注意されたい。

### §24.3 動詞

動詞は節の根幹部分となるもので、あらゆる修飾関係は修飾語の方向へ辿ると最終的に動詞に辿り着く。したがって、動詞が他の語句を修飾することはない。

動詞が修飾関係の根となっている語句、すなわち動詞に何らかの修飾語句 (存在しなくても良い) が係ることで構成されている語句を「節 (clause)」と言う。

### §24.4 形容詞

形容詞は名詞や kin 節を修飾する。また、助詞を伴って助詞句を形成し、その助詞句全体で他の語句を修飾することもある。

形容詞が修飾関係の根となっている語句、すなわち形容詞に何らかの修飾語句 (存在しなくても良い) が係ることで構成されている語句を「形容詞句 (adjectival phrase)」

と言う。形容詞のように働く語句を指すわけではないことに注意されたい。

### §24.5 副詞

副詞は基本的に動詞を修飾する。ただし、特定の表現でのみ現れる例外として、動詞型不定辞の非動詞修飾副詞形は名詞を修飾する。

副詞が修飾関係の根となっている語句、すなわち副詞に何らかの修飾語句 (存在しなくても良い) が係ることで構成されている語句を「副詞句 (adverbial phrase)」と言う。副詞のように働く語句を指すわけではないことに注意されたい。

### §24.6 連述詞

連述詞は基本的に動詞, 形容詞, 副詞のいずれかを修飾する。ただし、特定の表現でのみ現れる例外として、連述詞型不定辞の非動詞修飾連述詞形は名詞を修飾する。

### §24.7 特殊詞

特殊詞は様々な語句を修飾する。

### §24.8 助詞

助詞は名詞や形容詞や kin 節に前置され、その格を表す。この助詞と他の要素のまとまりを「助詞句 (prepositional phrase)」と言い、助詞が伴っている要素の方を「補語 (complement)」と言う。助詞句のことは、使われている助詞を明示して「a 句」や「izi 句」のように呼ぶこともある。同様にして、助詞が表す格のことも、助詞の綴りをそのまま用いて「a 格」や「izi 格」のように呼ぶことがある。

基本助接辞が助詞として形成する助詞句は「基本助詞句 (basic prepositional phrase)」と言う。また、基本助接辞が助詞として表す格は「基本格 (basic case)」と言う。基本格は次の表に示すような専用の名前で呼ばれることもある。

助詞	格
a	主格 (nominative case)
e	対格 (accusative case)
ca	与格 (dative case)
zi	奪格 (ablative case)
li	能格 (ergative case)

助詞句が修飾する語句の種類は、それを構成している助詞の分類と活用形に依存する。詳細は §47 で詳しく述べる。また、基本格の用法については §49 でも俯瞰する。

なお、yo は特殊な助詞であり、これが構成する助詞句は間投詞として振る舞い他の語句を修飾しない。詳細は §125 を参照せよ。

### §24.9 接続詞

接続詞は後ろに節を従えて、他の語句を修飾する節を作る。接続詞と節のまとまりを「接続詞節 (coordinate clause)」と言う。接続詞節のことは、使われている接続詞を明示して「te 節」や「iti 節」のように呼ぶこともある。

接続詞節は、それを構成する接続詞の分類や活用形に応じて、他の語句を修飾する。詳細は §77 を参照せよ。

### §24.10 連結詞

連結詞は2つ以上の語句を繋げる役割をもつ。このときに繋がれる語句は文法上の役割が一致している必要があり、繋がれた全体も同じ役割をもつ表現として扱われる。詳細な用法は §73 で述べる。

### §24.11 間投詞

間投詞はそれ以外の部分の修飾構造に影響を与えずに、完全文の間に挿入されて用いられるか、単独で文を成す。間投詞自身が他の語句から修飾を受けることはある。詳細な用法は §124 で述べる。

### §24.12 機能詞

機能詞として使われる単語は *pa* と *kin* の2語のみであり、それぞれ独自の用法をもつ。*pa* については §56 を、*kin* については §80 を参照せよ。



# 語彙的品詞と文法的品詞

## §25 語彙的品詞と文法的品詞の関係

以下の表に示すように、語彙的品詞ごとに文中でとることができる文法的品詞は限られている。ここに示された文法的品詞以外の使い方がされることはない。

語彙的品詞	文法的品詞
動詞型不定辞	動詞, 形容詞, 副詞, 名詞
名詞型不定辞	名詞, 形容詞
連述詞型不定辞	連述詞
特殊詞型不定辞	特殊詞
助接辞	助詞, 接続詞
連結辞	連結詞
間投辞	間投詞
機能辞	機能詞

例を挙げると、動詞型不定辞に分類される **yerif** は、動詞, 形容詞, 副詞, 名詞の4種類のいずれかとして使われ得るが、それ以外の文法的品詞として使われることはない。また、助接辞に分類される **te** は、助詞もしくは接続詞として使われ、それ以外の文法的品詞としては使われない。さらに、連述詞型助接辞に分類される **bam** は、連述詞としてのみ使われる。

1つの単語が複数の文法的品詞をとることがあると言っても、単語によって各文法的品詞の使われる頻度は大きく偏っている。例えば、動詞型不定辞の **yerif** は、形容詞として用いられる場合がほとんどで、動詞として用いられることは少なく、副詞としてはほとんど用いられない。一方で、同じく動詞型不定辞の **kût** は、動詞として用いられることが多く、形容詞として用いられることはほとんどない。

動詞型不定辞と名詞型不定辞は複数の文法的品詞として使われるが、そのうち1つの文法的品詞としての意味が決まれば、残りの文法的品詞としての意味を規則的に導くことができる。続くセクションでこの規則について詳しく述べる。

## §26 動詞型不定辞: 形容詞と動詞との関係

### §26.1 分類

動詞型不定辞は形容詞としても動詞としても使われるが、形容詞として使われた場

合と動詞として使われた場合の意味の間には明確な関係性がある。この関係性により、形容詞用法が用いられている表現を、その意味を変えずに動詞用法によって書き換えることができる。

上記の書き換えをした際に動詞用法がとる相と被修飾語の名詞がとる格が何になるかに応じて、形容詞用法と動詞用法の意味の関係性は以下のように4つに分類することができる。各動詞型不定辞はこの4つのパターンのうちどれか1つに分類され、2つ以上のパターンをもつ動詞型不定辞は存在しない。

- ▶ 継続主格型 (continuous-nominative) — 継続相 a 格
- ▶ 継続対格型 (continuous-accusative) — 継続相 e 格
- ▶ 経過主格型 (progressive-nominative) — 経過相 a 格
- ▶ 経過対格型 (progressive-accusative) — 経過相 e 格

継続主格型の例として **safey** が、継続対格型の例として **nakus** が挙げられる。経過主格型には **lixel** や **nèlav** などが該当するが、数は少ない。経過対格型をとるものはさらに少ない。

§26.2 では、形容詞用法と動詞用法の意味に対応についてより詳細に述べる。また、§26.3 では、形容詞が用いられた場合と動詞が用いられた場合との間に生じるニュアンスの違いについて述べる。

## §26.2 意味関係と対応規則

動詞型不定辞の形容詞としての意味と動詞としての意味の関係性は、〈salat a + 被修飾語 + e + 形容詞用法〉と〈経過相 or 継続相の動詞用法 + a or e + 被修飾語〉が同じ内容を表すという形で説明できる。このとき、動詞用法が経過相と継続相のいずれになるか、また助詞として a と e のいずれが使われるかは、その単語の意味関係の分類に依存する。

**safey** を例に挙げ、この関係性について具体的に述べる。

- (1) **salat a ces e asafey.**
  - ▶ 彼は優しい。
- (2) **safeyat a ces.**
  - ▶ 彼は優しい。

(1) と (2) は同じ内容を表している。ここで、**safey** の意味関係は継続主格型に分類されるため、(2) においては、**safey** が継続相をとっており、もともとの被修飾語である **ces** は a 格をとっている。

単語によっては、この言い換えの際に、動詞用法が反復表現をとる必要がある場合がある。そのような単語の例には **dalaz** が挙げられる。

(3) *salat a fay i tel e adalaz.*

▶ 私の娘は元気だ。

(4) *vomac dalazos a fay i tel.*

▶ 私の娘は元気にしている。

(3)と(4)は同じ意味である。(4)において、*dalaz*の動詞用法が、単に*dalazac*ではなく反復表現の*vomac dalazos*となっている点に注意せよ。

形容詞が修飾語句をとっている場合も、同様の書き換えが可能である。この際、形容詞に係る修飾語句は、そのまま動詞に係る。

(5) *salat a takul afik e anakus izi ficot.*

▶ この箱は布で覆われている。

(6) *nakusat a takul afik zi ficot.*

▶ この箱は布で覆われている。

### §26.3 ニュアンスの違い

#### §26.3.1 状態か性質か

動詞型不定辞の動詞用法は一時的な状態を表すことが多い。すなわち、言及している時点ではその状態であったが、それより前や後でそうでない状態になることもあり得る。一方で、形容詞用法は主に恒常的な性質を表す。すなわち、言及しているものは基本的に常にその性質をもっており、その性質を失うことはほとんどないかその性質を失うと違うものになってしまうかのどちらかである。

(1) *fêcat a yaf ca tel.*

▶ 妹が私に近くにいる。

(1)は、妹が「私の近くにいる」という状態にあることを意味するが、妹がその場所を離れてしまえば「近くにいる」という状態は成立しなくなる。したがって、妹の「近くにいる」という状態は一時的なものであるから、*fêc*が動詞用法が用いられている。

(2) *salot a zîdloq acik e afêc ica sod i tel.*

▶ その駐車場は私の家の近くにある。

(2)は、駐車場が「私の家の近くにある」という性質をもつことを意味するが、駐車場が簡単に家から遠ざかったりまた近づいたりすることはない。したがって、駐車場の「家の近くにある」というのは恒常的な性質であると考えられるので、ここでは*fêc*が形容詞用法が用いられている。

文の内容によっては、動詞用法と形容詞用法の違いが顕著に現れることがある。



(3) safeyat a ces.

▶ 彼は優しい。

(4) salat a ces e asafey.

▶ 彼は優しい。

(3)では動詞用法が用いられているので、「優しい」というのは性質ではなく一時的な状態であるというニュアンスが強い。したがって、この文の「彼」は普段から優しいわけではないが、何らかの理由で今は優しく振る舞っていると解釈されやすい。一方、(4)は形容詞用法が用いられているので、「優しい」というのは性質であるというニュアンスになる。すなわち、この文の「彼」は普段から優しい性格であり、今もいつも通り優しく振る舞っていることを表している。

なお、動詞用法が一時的な状態を表すことが多いのは確かだが、恒常的な性質を表すこともある。一方、形容詞用法が一時的な状態を表すはなく、常に恒常的な性質を表す。

### §26.3.2 変化のニュアンスの有無

動詞型不定辞の動詞用法には、「その状態になるという行為が過去に行われた」ということが含意されることが多い。一方で、形容詞用法にはそのような含意はない。

(1) fêcat a yaf ca tel.

▶ 妹が私に近くにいる。

(1)は、妹が「私の近くにいる」という状態になるための「近づく」という行為が過去に行われたというニュアンスを読み取られる可能性が高い。

(2) salat a zîdloq acik e afêc ica sod i tel.

▶ その駐車場は私の家の近くにある。

(2)では、駐車場が「私の家の近くにある」という性質をもつことを表しているため、例えば別の遠い場所から移動してきたなどのニュアンスはなく、単に現在「近くにある」ということを表しているに過ぎない。

なお、動詞用法が使われているからといって、必ずその状態になるための行為が行われたとは限らない。動詞用法が単にそのときの状態を表しているだけの場合もある。

## §27 動詞型不定辞:副詞と形容詞や動詞との関係

### §27.1 分類

動詞型不定辞は副詞としても形容詞や動詞としても使われるが、副詞として使われた場合と形容詞や動詞として使われた場合の意味の間には明確な関係性がある。ま

た、この関係性により、動詞型不定辞が形容詞として使われている節を、その内容を変えずにその動詞型不定辞が副詞として使われる節に書き換えることができる。これは逆も可能である。

動詞型不定辞が形容詞として使われる節と副詞として使われる節は相互に書き換えられるわけだが、この書き換えのパターンは動詞型不定辞によって4種類に分類できる。この4種類には以下のような名前が付けられている。

- ▶ 被修飾語型
- ▶ 文脈補完型 (complementive)
- ▶ kin 節型 (kin-clausal)
- ▶ fa 節型 (fa-clausal)

ある動詞型不定辞がどこに分類されるのかを考える際に重要になるのが、次に述べる2点である。1つ目は、形容詞として使われている節でそれが係っている名詞が、副詞として使われるように言い換えた節においてどのように現れるかという点である。2つ目はこの逆で、副詞として使われている節でそれが係っている動詞が、形容詞として使われるように言い換えた節においてどのように現れるかという点である。

§27.2では、この2点に注目しつつ、それぞれの分類における意味関係と言い換えについて具体的に述べる。また、§27.3では、副詞が用いられた場合と形容詞や動詞が用いられた場合との間に生じるニュアンスの違いについて述べる。

## §27.2 意味関係と対応規則

### §27.2.1 被修飾語型

被修飾語型をとる動詞型不定辞では次のような対応が見られる。

- ▶ 形容詞として係る名詞 … 副詞として係る動詞が導く節全体
- ▶ 副詞として係る動詞 … 形容詞として係る節の動詞

ここで、被修飾語型をとる単語の代表例として **keves** を挙げ、この対応について具体的に述べる。

(1) *salat e akeves a kin bâges a ces.*

- ▶ 彼が怒ったのは当然だ。

(2) *bâges okeves a ces.*

- ▶ 彼は当然怒った。

(1)において、形容詞として用いられている **keves** が係っているのは、**a** 句の補語である **kin** 節である。この **kin** 節の内容は、(2)においては、副詞として用いられている **keves** が係っている動詞を含む主節全体になっている。

この他に被修飾語型に分類される単語には、「あり得る」を意味する *padit* や「簡単な」を意味する *rafef* などがある。

### §27.2.2 文脈補完型

文脈補完型をとる動詞型不定辞では次のような対応が見られる。

- ▶ 形容詞として係る名詞 … 副詞として係る動詞に係っている助詞句 (多くの場合で基本助詞句) の補語
- ▶ 副詞として係る動詞 … 文脈で補完される

ここで、文脈補完型をとる単語の代表例として *bâl* を挙げ、この対応について具体的に述べる。

(1) *salet e abâl a fecaq acik.*

- ▶ その手紙は突然だった。

(2) *lôles obâl e fecaq acik.*

- ▶ その手紙は突然送られてきた。

(1)において、形容詞として用いられている *bâl* が係っているのは、a 句の補語である *fecaq acik* である。この *fecaq acik* は、(2)においては、副詞として用いられている *bâl* が係っている *lôles* に同じく係っている e 句の補語になっている。

逆に (2)において、副詞として用いられている *bâl* が係っているのは *lôles* である。これは (1)には現れていない。すなわち、文脈補完型に分類される動詞型不定辞が形容詞として使われているときは、この動詞の内容が文脈によって暗黙に想定されることになる。

この他に文脈補完型に分類される単語には、「激しく」を意味する *gicaz* などがある。

### §27.2.3 kin 節型

*kin* 節型をとる動詞型不定辞が形容詞として使われることは稀なので、ここでは副詞と動詞の間の意味関係の形で述べる。形容詞と動詞の意味関係により、「形容詞として使われたときに係る名詞」とは「動詞として使われたときに a 句か e 句の補語となる名詞」であることを留意せよ。形容詞と動詞の意味関係については §26 を参照せよ。

*kin* 節型をとる動詞型不定辞では次のような対応が見られる。

- ▶ 動詞に係る a 句か e 句の補語 … 副詞として係る動詞に係っている助詞句 (多くの場合で基本助詞句) の補語
- ▶ 副詞として係る動詞 … 動詞に係る *kin* 節をとる助詞句の中身

ここで、kin 節型をとる単語の代表例として **ligif** を挙げ、この対応について具体的に述べる。この単語の形容詞と動詞の意味関係は主格継続型なので、「形容詞として使われたときに係る名詞」とは「動詞として使われたときに a 句の補語となる名詞」であることを留意せよ。

(1) **ligifat a ces e'n rifevas a's e liker.**

▶ 彼はピアノを演奏することを集中して行っている。

(2) **rifevac oligif a ces e liker.**

▶ 彼はピアノを集中して演奏している。

(1)において、動詞として用いられている **ligif** に係る a 句の補語は **ces** である。この **ces** は、(2)においては、副詞として用いられている **ligif** が係っている **rifevac** に同じく係っている a 句の補語になっている。

逆に (2)において、副詞として用いられている **ligif** が係っているのは **rifevac** である。この **rifevac** は、(1)においては、e 句の補語となっている kin 節の中に現れている。

この他に kin 節型に分類される単語には、「真剣に」を意味する **cazec** などがある。

#### §27.2.4 fa 節型

fa 節型をとる動詞型不定辞が形容詞として使われることは稀なので、ここでは副詞と動詞の間の意味関係の形で述べる。形容詞と動詞の意味関係により、「形容詞として使われたときに係る名詞」とは「動詞として使われたときに a 句か e 句の補語となる名詞」であることを留意せよ。形容詞と動詞の意味関係については §26 を参照せよ。

fa 節型をとる動詞型不定辞では次のような対応が見られる。

- ▶ 動詞に係る a 句か e 句の補語 … 副詞として係る動詞に係っている助詞句 (多くの場合で基本助詞句) の補語
- ▶ 副詞として係る動詞 … 動詞に係る fa 節や cife 節の中身

ここで、fa 節型をとる単語の代表例として **rahas** を挙げ、この対応について具体的に述べる。この単語の形容詞と動詞の意味関係は主格継続型なので、「形容詞として使われたときに係る名詞」とは「動詞として使われたときに a 句の補語となる名詞」であることを留意せよ。

(1) **rahasat a ces, fa rifevac a's e liker.**

▶ 彼はピアノを演奏しながら楽しんでいる。

(2) **rifevac orahas a ces e liker.**

▶ 彼は楽しげにピアノを演奏している。

(1)において、動詞として用いられている *rahas* に係る a 句の補語は *ces* である。この *ces* は、(2)においては、副詞として用いられている *rahas* が係っている *rifevac* に同じく係っている a 句の補語になっている。

逆に (2)において、副詞として用いられている *rahas* が係っているのは *rifevac* である。この *rifevac* は、(1)においては、動詞に係る *fa* 節に含まれている。すなわち、副詞として使われている文を動詞として使われる文に書き換えると、「主節の内容をしつつその単語が表す様子になっている」のような表現になる。

この他に *fa* 節型に分類される単語には、「元気に」を意味する *dalaz* などがある。

### §27.3 ニュアンスの違い

動詞型不定辞が副詞として使われたときと形容詞や動詞として使われたときでニュアンスは多少異なるが、品詞の違いがニュアンスの違いをもたらしているというよりは、構文の違いがニュアンスの違いをもたらしていると考えるのが適切である。

動詞型不定辞が副詞として用いられるときは、その副詞は動詞に係る修飾語に過ぎない。そのため、主に伝えたい内容は動詞が表す動作の方であり、副詞はその動作の様子を単に説明しているというニュアンスがある。一方で動詞型不定辞が動詞や形容詞として用いられるときは、それが節の主な述語になる。そのため、その動詞や形容詞の意味の方が主に伝えたい内容であるというニュアンスになる。

(1) *līdec ocazec a ces e faltad acik.*

▶ 彼は真剣にその雑誌を読んでいた。

(2) *cazecece a ces e'n līdas a's e faltad acik.*

▶ 彼はその雑誌を読むことを真剣にやっていた。

(1)では、*cazec* が副詞として用いられており、動詞の *līdec* に係っている。そのため、この文は「彼が読んでいた」ということが主な内容であると解釈され、「真剣に」というのはそれに対する追加の説明であると捉えられる。一方 (2)では、*cazec* は動詞として用いられていて、文を先導する述語となっている。そのため、この文では「真剣にやっていた」ということがその主な内容となる。

## §28 動詞型不定辞: 名詞と動詞との関係

### §28.1 意味関係と対応規則

#### §28.1.1 総論

kin 節や接続詞節が置かれるべき箇所には、動詞型不定辞の名詞用法を置かれることがある。これは、一定の規則のもとで節を言い換えたものだと解釈することができる。続くセクションで、それぞれの節における詳細を述べる。

動詞型不定辞の名詞用法に係る助詞句は、代名詞的な単語のみから成るものように、それを省略しても文意が曖昧になりづらいつと考えられる語句は省略されることがある。動詞用法に係る助詞句については、省略された場合に一定の意味で解釈されることと比較せよ。

動詞型不定辞の名詞用法には活用が存在しないので、名詞として用いられたときは時制や相や態の情報が消失する。これは文脈に応じて適切なものが想定される。

### 528.1.2 kin 節

kin 節の代わりに動詞型不定辞の名詞用法が置かれている場合、これは次のようにして kin 節を変形したものだと思えることができる。まず、kin 節に含まれる動詞を名詞用法に変えて kin を取り除く。次に、もともとの動詞を修飾していた副詞、連述詞、助詞、接続詞を全て非動詞修飾形にする。特殊詞の形は変えない。以上の操作を行うと、動詞型不定辞の名詞用法に各種の非動詞修飾形に係る名詞句が得られるが、これがもとの kin 節と同じ意味をもつ。

(1) sâfat a tel e kin catos omêl a'l vo naflat.

▶ 私は公園でゆっくり歩くのが好きだ。

(2) sâfat a tel e cat iomêl ivo naflat.

▶ 私は公園でゆっくり歩くのが好きだ。

(1) では kin 節が用いられ、(2) では名詞用法が用いられているが、この2つの文の内容は同じである。(1)において動詞修飾形だった vo は、(2)では非動詞修飾形の ivo になっている。さらに、(1)にある omêl も、(2)では非動詞修飾形の iomêl に変化している。また、言い換えられている箇所である「公園でゆっくり歩く」の主語が「私」であることは明白であるため、(2)では a'l に相当する助詞句が省略されている。

### 528.1.3 接続詞節

接続詞節を構成する節の代わりに動詞型不定辞の名詞用法が置かれている場合、これは次のようにして節を変形したものだと思えることができる。まず、節に含まれる動詞を名詞用法に変える。次に、もともとの動詞を修飾していた副詞、連述詞、助詞、接続詞を全て非動詞修飾形にする。特殊詞の形は変えない。以上の操作を行うと、接続詞節に続いて動詞型不定辞の名詞用法に各種の非動詞修飾形に係る名詞句が続くことになるが、これがもとの表現と同じ意味をもつ。

助接辞の後に動詞型不定辞の名詞用法が続く場合、その助接辞は文構造上では助詞として扱われることになる。しかし、この形は節の言い換えだと解釈されるため、その助接辞は意味的には接続詞であるとして解釈される。

(1) debet ebam a tel te déxak a'l vo sod.

▶ 私が家で眠ったとき私はとても疲れていた。

(2) debet ebam a tel te déx ivo sod.

▶ 私が家で眠ったときとても疲れていた。

(1) では **te** の後に節が続いていおり、(2) では名詞用法が続いているが、この2つの文の内容は同じである。(1)において動詞修飾形だった **vo** は、(2) では非動詞修飾形の **ivo** になっている。また、言い換えられている箇所である「私はとても疲れていた」の主語が「私」であることは明白であるため、(2) では **a'l** に相当する助詞句が省略されている。

## §28.2 ニュアンスの違い

動詞型不定辞が名詞として用いられたときと動詞として用いられたときとは、ニュアンスの違いはそれほどない。したがって、動詞型不定辞の名詞用法と動詞用法は、意味合いの違いによって使い分けられているわけではなく、構文的な問題で使い分けられていると考える方が適切である。例えば、それほど複雑でなく短い内容に対しては、複文を作らない名詞用法を用いた表現の方が好まれやすい。

## §29 名詞型不定辞: 名詞と形容詞との関係

名詞型不定辞が形容詞として用いられると、「名詞として用いられたときに表されるものを想起させるような」といった意味になる。

名詞型不定辞の形容詞用法は専ら詩歌やキャッチフレーズで使われ、通常の会話や散文で用いられることは少ない。

## §30 助接辞: 助詞と接続詞との関係

助接辞は助詞として用いられることと接続詞として用いられることがあるが、助詞としての意味と接続詞としての意味の関係に明確な規則はない。そのため、助詞と接続詞のどちらか一方の意味からもう一方の意味を規則的に推測することはできない。

そもそも助詞と接続詞の両方の用例がある助接辞は少なく、多くの場合どちらか一方の用法しか見られない。

## §31 比較可能性

### §31.1 概要

動詞型不定辞は、「比較可能 (gradable)」と呼ばれるものと「比較不能 (nongradable)」と呼ばれるものの2種類に分類できる。その動詞型不定辞が表す内容に程度の幅がある場合は比較可能となり、程度の幅がなく二値的な場合は比較不能となる。例え

ば、**may** は形容詞として「甘い」の意味だが、甘さの度合いには大小が考えられるため、**may** は比較可能な動詞型不定辞である。一方で、**lik** は形容詞として「固有の」の意味だが、固有さの度合いというものは考えられず固有であるか固有でないかしか考えられないため、**lik** は比較不能な動詞型不定辞である。

全体の傾向として、形容詞や副詞として使われることが多い動詞型不定辞は比較可能なことが多く、動詞として使われることが多い動詞型不定辞は比較不能なことが多いが、例外も多い。

続くサブセクションで、比較可能な動詞型不定辞と比較不能な動詞型不定辞の扱いの違いについて述べる。

### §31.2 比較可能な動詞型不定辞

比較可能な動詞型不定辞は、状態のどの尺度に注目しているかのみを表し、その尺度が実際にどの程度なのかは連述詞の修飾を受けて始めて示される。ただし、その動詞型不定辞が連述詞によって修飾されていない場合は、「一般に想定される基準を超えている」程度の意味の暗黙の連述詞で修飾されていると見なす。例えば、**amay** だけではその被修飾語の甘さについて言及しているにすぎず、**amay ebam** 「とても甘い」や **amay etipil** 「十分甘くない」のように別の単語の修飾を受けることで、どの程度の甘さなのか初めて示される。また、修飾を受けずに単に **amay** だけで使われた場合は、「甘さが一般に想定される基準を超えている」という意味になり、結果日本語で単に「甘い」と言ったときの意味と同じになる。

比較可能な動詞型不定辞が動詞として使われた場合にはさらなる注意を要する。動詞として使われた比較可能な動詞型不定辞は、単独で使った場合は「その尺度が一般に想定される基準を超える程度の状態になる/する」という意味になり、連述詞の修飾を受けた場合は「その尺度が被修飾語が表す程度の状態になる/する」という意味になる。特に、比較対象が省略されて **emic** だけで修飾された場合、比較対象として過去の状態が想定されることが多く、そのときは「その尺度が過去の程度より甚だしくなる」すなわち「その尺度の程度が大きくなる」という意味になる。

### §31.3 比較不能な動詞型不定辞

比較不能な動詞型不定辞は、その単語がもつ意味をそのまま表す。また、連述詞による修飾を受けることがない。例えば、**lik** は単独で「固有の」の意味で使われ、**alik ebam** や **alik etipil** のように連述詞で修飾された形では現れない。





# その他の特殊な形態素

## §32 飾辞

既存の単語の前や後について新しい単語を作る役割をもつ形態素を「飾辞 (decorative)」と呼ぶ。飾辞ごとに単語の前に付けられるか後に付けられるかが決まっている。

飾辞は、それとの合成によって作られる単語のジャンルを明確に定める。例えば、**kos+** との合成語は何らかの施設を表す単語に必ずなり、**qik+** との合成語は何らかを行う機械を表す単語に必ずなる。

飾辞の中には生産性が高いものもあり、そのような飾辞が送り手によって既存の単語に付けられて、辞書に載っていない新しい単語が作られる場合がある。

飾辞が単独で記載されるときは、前置するものはロセックが最後に置かれ、後置するものはロセックが最初に置かれる。これにより、その形態素が飾辞であることが示され、さらにそれが単語の前後どちらに付けられるものなのかが分かる。例えば、**qil+** は常に前に付けられ、**+tip** は常に後ろに付けられる。ロセックについては §7.8 も参照せよ。

ある単語の合成成分との合成例が多く見られ、合成された単語が共通したジャンルをもっているときに、その合成成分が飾辞として切り出される。したがって、飾辞は必ず何らかの単語の合成成分であり、通常の単語と語源関係をもたないものは存在しない。合成成分については §127 を参照せよ。

## §33 倍数接頭辞

以下に示す形態素は、単位名詞に前置されてその倍量単位や分量単位を表す単語を作る。

接辞	倍数	接辞	倍数
no	$10^2$	mu	$10^{-2}$
ti	$10^4$	da	$10^{-4}$
qe	$10^8$	ci	$10^{-8}$
yo	$10^{12}$	hu	$10^{-12}$
pi	$10^{16}$	ba	$10^{-16}$
xa	$10^{20}$	je	$10^{-20}$
ri	$10^{24}$	la	$10^{-24}$



# 活用

## §34 活用総論

不定辞と助接辞に分類される単語は、語形変化によって様々な文法範疇を表す。このような語形変化は、品詞に関わらず「活用 (conjugation)」と呼ばれる。

活用は、「語幹 (stem)」と呼ばれる部分に活用接頭辞や活用接尾辞を付けることで行われる。語幹が変化するような例外的な活用は存在しない。

語幹は辞書の見出し語に用いられる。

## §35 動詞型不定辞の活用

### §35.1 動詞として

動詞型不定辞が動詞として用いられる場合は、語幹の後に2つの活用接尾辞が付けられるという形で活用する。1つ目の接尾辞は時制を表し、2つ目の接尾辞は相と態を表す。時制を表す接尾辞は以下の通りである。

辞	時制
a	現在時制
e	過去時制
i	未来時制
o	通時時制

また、相と態を表す接尾辞は以下の通りである。

辞	相と態	辞	相と態
f	開始相通常態	v	開始相補助態
c	経過相通常態	q	経過相補助態
k	完了相通常態	g	完了相補助態
t	継続相通常態	d	継続相補助態
s	無相通常態	z	無相補助態

例えば、動詞型不定辞 **sâf** が過去時制継続相通常態として用いられるときは、**e** と **t** がこの順で語幹の後に付けられて **sâfet** と活用する。

時制, 相, 態に関する具体的な説明は §61, §62, §67 などを参照すること。

### §35.2 形容詞か副詞として

動詞型不定辞が形容詞か副詞で用いられる場合は、その文法的品詞に応じて以下の接頭辞が語幹の前に付けられる。

辞	品詞
a	形容詞
o	副詞

例えば、動詞型不定辞 **padit** が形容詞として使われるときは **apadit** と活用し、副詞として使われるときは **opadit** と活用する。

上記に加え、動詞型不定辞には活用接頭辞の **io** が付けられた形も存在する。この形は、動詞型不定辞の副詞形から派生したもので、「非動詞修飾副詞形 (nonverb-modifying adverbial form)」と呼ばれる。これは、動詞型不定辞が副詞として動詞に係っている状況で、その動詞が成す節が名詞用法によって言い換えられたときのみ現れる。したがって、意味は副詞として使われた場合と同じだが、文法的には名詞に修飾する語句として働く。この言い換えについては §28.1 を参照せよ。

### §35.3 名詞として

動詞型不定辞が名詞として用いられる場合は、語幹がそのまま使われ、活用は行われない。

## §36 名詞型不定辞の活用

### §36.1 形容詞として

名詞型不定辞が形容詞として用いられる場合は、常に活用接頭辞の **a** が付けられる。

### §36.2 名詞として

名詞型不定辞が名詞として用いられる場合は、語幹がそのまま使われ、活用は行われない。

## §37 連述詞型不定辞の活用

連述詞型不定辞は、基本的に活用接頭辞の **e** が付けられた形で用いられる。

さらに、連述詞型不定辞には活用接頭辞の **ie** が付けられた形も存在する。この形は、**e** が付けられた基本的な形から派生したもので、「非動詞修飾連述詞形 (nonverb-modifying adpredicative form)」と呼ばれる。これは、連述詞不定辞が連述詞として動詞に係っている状況で、その動詞が成す節が名詞用法によって言い換えられたときのみ現れる。したがって、意味は連述詞として使われた場合と同じだが、文法的には

名詞に修飾する語句として働く。この言い換えについては §28.1 を参照せよ。

どちらの場合においても、**e** か **ie** の一方が必ず付けられるので、語幹部分のみで現れることはない。

### §38 特殊詞型不定辞の活用

特殊詞型不定辞は、常に活用接頭辞の **e** が付けられた形で用いられる。したがって、特殊詞型不定辞が語幹部分のみで現れることはない。

### §39 助接辞の活用

§23.6 で述べたように、助接辞は一般助接辞と例外助接辞に分けられ、活用の形態が異なる。

一般助接辞は、語幹部分だけでは動詞を修飾する助詞句を作るが、活用接頭辞の **i** が付けられることで動詞以外を修飾する助詞句を作るようになる。例えば **te** は、**te** という形では動詞を修飾する助詞句を形成するが、**ite** に変化すると名詞などの動詞以外を修飾ようになる。語幹部分に **i** が付けられた形は「非動詞修飾形 (nonverb-modifying form)」と呼ばれ、それに対して語幹そのままの形は「動詞修飾形 (verb-modifying form)」と呼ばれる。

例外助接辞は、原則として活用接頭辞の **i** が付けられた形で用いられる。ただし、例外助接辞が接続詞として用いられている場合は、言い換えによって **i** が付かない語幹そのままの形が現れることもある。この言い換えについては §100.2 を参照せよ。

なお、助接辞の **i** は、本来の語幹は  $\emptyset$  (何ものなし) であり、非動詞修飾形として活用接頭辞の **i** が付けられた状態が **i** という形である。この助接辞について言及するときに通常通り語幹を用いようとすると、語幹が何もないため不便なので、非動詞修飾形である **i** を代わりに用いる。辞書の見出し語にも **i** という形を用いる。このような事情のため、**i** の非動詞修飾形は **ii** ではなく **i** であることには注意せよ。

### §40 極性による活用

不定辞は、§35, §36, §37, §38 で述べた活用形に加えて、その種類によらず、活用接頭辞の **du** が付けられた形もつ。これを「否定形 (negative form)」と呼ぶ。これに対し、**du** が付かない形は「肯定形 (positive form)」と呼ばれることがある。

その他の活用接頭辞が付けられた不定辞の否定形は、その活用接頭辞の後に **du** を入れることで作られる。例えば、**safey** が形容詞として使われるときは **asafey** という形になるが、これの否定形は **adusafey** となる。

名詞以外として使われている不定辞の否定形は、「～ではない」という否定の意味

になる。また、名詞として使われている不定辞の否定形については、名詞型不定辞であれば「～以外のもの」という意味になり、動詞型不定辞であれば「～しないこと」という意味になる。この違いには注意すること。例えば、名詞型不定辞である *sakil* の否定名詞形 *dusakil* の意味は「リンゴではないもの」だが、動詞型不定辞である *sôd* の否定名詞形 *dusôd* の意味は「食べないこと」であって「食べること以外のこと」ではない。

固有名詞は例外的に否定形をもたない。

否定形を使った否定表現については §52 も参照せよ。

# 基本語順

## §41 文

文は原則として1つの節から成る。したがって、全ての文には文全体の修飾関係の根となる動詞が存在する。文となっている節のことを「主節 (main clause)」と呼び、主節の中に含まれている節を「従属節 (subordinate clause)」と呼ぶ。

例外として、以下のような節ではない文が存在する。

- ▶ 遊離助詞句が構成する文 (§105.1 参照)
- ▶ 間投詞句のみの文 (§124.1 参照)
- ▶ フォーハックのみの文 (§7.10 参照)

## §42 動詞先頭

節を構成する動詞はその節の最初に置かれる。

(1) *cates a tel.*

- ▶ 私は歩いた。

(1)では、動詞 *cates* が節の最初すなわち文頭にあり、その後ろに動詞を修飾する語句である *a tel* が置かれている。

強調によって動詞の後に置かれるはずの語句が文頭に移動することがあり、その場合は動詞が節の先頭に置かれなことがある。文頭移動による強調については §110.2.1 で述べる。

## §43 修飾語句の位置

### §43.1 総論

修飾語句は被修飾語句の直後に置かれる。したがって、1つの語句に2つ以上の修飾語句を同時に修飾させることはできない。しかし、語句に1つの修飾語句を修飾させ、それによってできた新しい大きな語句に他の修飾語句を修飾させることで、実質的に1つの語句に複数の修飾語句を修飾させることができる。結果として被修飾語句の後に修飾語句が順に並ぶことになるので、「修飾語句が複数ある場合は被修飾語句の後に順に並べられる」と解釈することもでき、そのように述べることもある。

上記のように複数の修飾語句が修飾しているとき、それら修飾語句の順番に制約は



見られない。ただし、意図していない修飾構造で解釈される余地が極力減るような順番で並べられる傾向がある。また、修飾語句の順番によってニュアンスが異なることもある。詳細は§44で述べる。

### §43.2 動詞を修飾する語句

動詞を修飾する語句には、次の5種類がある。

- ▶ 副詞
- ▶ 連述詞
- ▶ 特殊詞
- ▶ 動詞修飾の助詞句
- ▶ 動詞修飾の接続詞節

動詞修飾の接続詞節は少し特殊な振る舞いをするため、詳細は§78に譲る。接続詞を除いた複数の種類の修飾語句が同時に動詞に係るときは、次の4段階の順序に従う。

- ▶ 特殊詞
- ▶ 副詞, 連述詞
- ▶ 特殊助接辞が成す助詞句
- ▶ 一般助接辞が成す助詞句
- ▶ 副詞, 連述詞

副詞と連述詞は第2位と第5位のどちらにも置かれ得る。また、例外助接辞が成す助詞句であっても、助詞が動詞修飾形をとっている場合は、一般助接辞が成す助詞句と同様に扱われ、第4位に属するものとして扱われる。この現象については、§100.1でも詳しく述べる。

同じ順位に属する修飾語句が複数ある場合、それらの順番に制約は見られない。ただし、副詞や連述詞については、修飾語句があって2単語以上から成っているものが後ろに置かれる。

- (1) feges a tel e dezet vo vosis afik.  
▶ 私はこの店で椅子を買った。
- (2) vilises ovop a tel omêl.  
▶ 私は再びゆっくり走った。
- (3) debat evoc ebam a tel te cal.  
▶ 私はそのときとても疲れてもいた。
- (4) dodet emic ini ric a ces.  
▶ 彼は誰よりも悲しんでいた。
- (5) déxec a ces feli qisec te cal.  
▶ 彼女は人形のようにそのとき眠っていた。

(1)では、a tel, e dezet, vo vosis afikが修飾語句である。このように動詞の後に助詞

句が並べられるのが最も基本的な文の構造である。(2)では、*ovop, a tel, omêl* が修飾語句である。副詞は助詞句の前にも後にも置かれることがあり、この例では2つの副詞が2ヶ所に分けて置かれている。(3)では、*evoc, ebam, a tel, te cal* が修飾語句である。*evoc* は特殊詞で *ebam* は連述詞なので、この2つを入れ替えると不自然な文になることに注意せよ。(4)では、*emic ini ric, a ces* 修飾語句である。このように、連述詞には修飾語句が付いて2単語以上になる場合もある。(5)では、*a ces, feli qisec, te cal* が修飾語句である。*feli* は例外助接辞なので、本来であれば一般助接辞が成す助詞句である *a ces* や *te cal* よりも前に置かれるはずである。しかし、ここでは *feli* が動詞修飾形として現れているため、一般助接辞が成す助詞句と同様に扱われ、*a ces* と *te cal* に混ざって並べられている。

なお、挿入構文を用いられると、ここで述べた順番に反した場所に修飾語句が置かれることがある。挿入構文については §109 を参照せよ。

### §43.3 名詞を修飾する語句

名詞を修飾する語句には、次の7種類がある。

- ▶ 形容詞
- ▶ 特殊詞
- ▶ 限定節
- ▶ 名詞修飾の助詞句
- ▶ 名詞修飾の接続詞節
- ▶ 動詞型不定辞の非動詞修飾副詞形
- ▶ 連述詞型不定辞の非動詞修飾連述詞形

名詞修飾の語句は種類が多いためその順番に規則を見出すのは難しいが、意図していない修飾構造で解釈される余地を極力減らそうとするという傾向は見られる。特に、節を含むような修飾語句は、それ以外の修飾語句より後ろに置かれる。

(1) *kûtat a tel e dev axodol ajôm.*

- ▶ 私は高価で黒いペンを持っている。

(2) *qetat vo sokul i tel a zeqil avaf ebam séqes e ca tel a ces.*

- ▶ 彼からもらったとても大きな机が私の部屋にある。

(1)では、*axodol, ajôm* という2つの形容詞が *dev* を修飾している。この順番は逆でも自然である。(2)では、*avaf ebam* という形容詞と *séqes* 以下の限定節がともに *zeqil* を修飾している。限定節の方が後ろに置かれているが、これは、逆に *avaf ebam* を後ろに置くと限定節内の語句を修飾しているように解釈され得てしまうためである。

動詞型不定辞が名詞として使われている場合、それに係る修飾語句の順番は、名詞用法に言い換える前の節における順番を保つ。動詞型不定辞の非動詞修飾副詞形と連述詞型不定辞の非動詞修飾連述詞形が名詞に係るのはこの場合だけである。この表現については §28.1 を参照せよ。

## §44 修飾語句の順序の傾向

### §44.1 動詞修飾の助詞句

動詞を修飾する助詞句の順番に制約は見られないものの、助詞句が並べられる順番によって各助詞句の話題性に差が生まれる。

動詞に最も近い助詞句ほど話題を表し、節の最後に近い助詞句ほどそれに対する焦点を表すことが多い。すなわち、その節で何について述べるのかを表す助詞句ほど前に置かれやすく、それに対してどういった情報を伝えたいかを表す助詞句ほど後ろに置かれやすい。

(1) *câses a tel e ces vo kosax.*

▶ 私は彼女に学校で会った。

(2) *câses a tel vo kosax e ces.*

▶ 私は学校で彼女に会った。

(1) では、最初に *a tel* が置かれ最後に *vo kosax* が置かれている。「私」が話題で「学校」が焦点である場合、すなわち「彼女に会ったのは学校なのだ」という情報を新たに相手に伝えたい場合に、この語順が選ばれやすい。一方で(2)では、最後に *e ces* が置かれている。「彼女」が焦点となる場合、すなわち「学校で会ったのは彼女なのだ」という情報を新たに相手に伝えたい場合には、この語順になりやすい。

この傾向は、2文以上が連続している場合により顕著に現れやすい。

(3) *qoletes a tel e zeqil. séqes e cit ca tel a refet.*

▶ 私は机を売った。それは私が友達からもらったものだ。

1文目で「私が机を売った」という情報が受け手に与えられるので、受け手が2文目を読む段階では「私が机を売った」ということは既知である。したがって、2文目では、受け手にとって既知の情報である *cit* や *tel* が最初に置かれ、それに対する新たな情報である *refet* が最後に置かれている。仮に *refet* が最初に置かれていたとすると、受け手がまだ知らない「友達」が文の最初で提示されることになり不自然である。

### §44.2 形容詞

名詞に複数の形容詞が修飾する場合、その形容詞の限定度合いが高いものほど後ろに置かれやすい。特に、*fik* のような被修飾語を1つに限定してしまう形容詞は一番最後に置かれる。これは、1つに限定してしまう形容詞が修飾した瞬間に何を指しているのかが確定し、それ以上他の形容詞で限定する必要はないからだと考えられる。

(1) pa feges a pas e delêmtéq azaf afik?

▶ この赤い手袋は誰が買ったのですか?

(1)には *delêmtéq azaf afik* という表現が含まれているが、形容詞の順番を変えて *delêmtéq afik azaf* とするのは不自然である。これは以下のように説明できる。もし *delêmtéq afik azaf* という語順であったとすると、まず *afik* という形容詞が *delêmtéq* を修飾することになる。*afik* は送り手から近いある1つのものを指し示す役割があるため、*delêmtéq afik* という名詞句ができた時点でこれが表すものが1つに限定される。そのため、別の修飾語句でさらに意味を限定する必要はなくなるため、さらに *azaf* を修飾させて *delêmtéq afik azaf* という形にするのは不自然だと思われるのである。

## §45 修飾語句の語順の例外

ある語句をまず1つの修飾語句 *S* が修飾し、それによってできる大きな語句をさらに別の修飾語句 *Z* が修飾しているという状況を考える。この場合、*S* が先に置かれて *Z* がその後ろに置かれるのが標準的な語順である。しかし、*S* が2単語以上で *Z* が1単語であるとき、*S* と *Z* の順序が入れ替わる。このような交換現象が起こる主な原因は、規則通りの語順にしてしまうと、*Z* が *S* に含まれる語句を修飾しているように見えてしまうためだと考えられる。

(1) zêhises a ces e sálak acasat ehiv ica gulilsoz.

▶ 彼は最も頭痛に効果的な薬を作り上げた。

(1)に含まれる *acasat ehiv ica gulilsoz* という語句は「最も頭痛に効果的な」という意味であるが、ここで修飾語句の順序交換が行われている。「最も頭痛に効果的な」という意味の語句は、まず *acasat* に *ica gulilsoz* を修飾させて「頭痛に効果的な」を意味する *acasat ica gulilsoz* という表現を作り、それに *ehiv* を修飾させることで作られるので、*acasat ica gulilsoz ehiv* という形になるはずである。しかし、上の文では *ica gulilsoz* と *ehiv* の位置が交換され、*acasat ehiv ica gulilsoz* という語順になっている。これは、本来の *acasat ica gulilsoz ehiv* という語順では、*ehiv* が *gulilsoz* を修飾しているように見えてしまうためだと考えられる。この例では、*ica gulilsoz* が *S* であり、*ehiv* が *Z* であった。

(2) te lôk atov câsos te a ces, baldetos a ces.

▶ 彼らは会うたびに喧嘩する。

(2)にある *lôk atov câsos te a ces* は「彼らが会うたび」という意味だが、これも修飾語句の順序交換の例になっている。「彼らが会うたび」という意味の語句は、まず「彼らが会うとき」を意味する *lôk câsos te a ces* という語句を作り、それに *atov* を修飾させることで作られるので、*lôk câsos te a ces atov* という形になるのが本来

である。しかし、上の場合と同様に、ここでは **atov** が **ces** を修飾しているように見えるため、語順が交換されている。ここでは、**câsos te a ces** が *S* で、**atov** が *Z* であった。

# 助詞句

## §46 助詞句の構成

### §46.1 名詞や kin 節を伴う助詞句

名詞や kin 節は必ず前に助詞を伴って助詞句となる。このとき、助詞によって名詞の格が表される。

(1) *câses a tel e yaf.*

▶ 私は妹に会った。

(1)には、*a tel*と*e yaf*という2つの助詞句が用いられている。助詞句*a tel*に含まれる助詞*a*は*tel*が主語として文中で用いられていることを明示していて、*e yaf*に含まれる*e*は*yaf*が目的語であることを示している。

助詞句は他の語句を修飾する。助詞句が修飾する語句の種類については§47で詳しく述べる。

(2) *terac a ces e tirmal.*

▶ 彼女はジュースを飲んでいる。

(3) *hafe e ferac.*

▶ 手伝ってくれてありがとう。

(4) *qetat a nil i tel vo kosxoq.*

▶ 私の兄は図書館にいる。

(5) *pa kavat a loc e soki q aqôc izi fit?*

▶ これの他に時計を持っていますか？

(6) *salat a cit e agulod emic ini kèc.*

▶ それはコーヒーより苦かった。

(2)にある*a ces*や*e tirmal*は動詞修飾形が成す助詞句で、ともに動詞*terac*を修飾している。(3)にある*e ferac*は、間投詞*hafe*を修飾している。(4)にある*i tel*は非動詞修飾形が成す助詞句で、名詞*nil*を修飾している。(5)と(6)にある*izi fit*と*ini kèc*も非動詞修飾形が成す助詞句であり、それぞれ形容詞*aqôc*と副詞*emic*に係っている。

## §46.2 形容詞を伴う助詞句

### §46.2.1 総論

名詞は必ず助詞を伴うが、助詞とともに用いられるのが必ず名詞であるというわけではない。助詞の中には形容詞を伴うものがあったり、一部の条件下でのみ通常は名詞を伴う助詞が形容詞を伴ったりすることがある。このように使われた形容詞は「叙述的用法 (predicative use)」と呼ばれ、それに対して名詞を直接修飾している形容詞は「限定的用法 (attributive use)」と呼ばれる。

全ての形容詞は限定的用法でも叙述的用法でも使われ、どちらかの用法のみをもつ形容詞は存在しない。

(1) *salat a sakil afik e avôl ile lát ayos.*

▶ このリングは3個だ。

続くサブサブサクショで、助詞が形容詞を伴う個別の場合について述べる。

### §46.2.2 基本助接辞

動詞の中には、名詞の代わりに形容詞を伴った基本助詞句に係ることを許すものがある。その場合は助詞が形容詞に付随して用いられる。

(1) *salat a nayef aquk e abik.*

▶ あの花は青い。

(1)では、形容詞 *abik* が助詞 *e* を伴って使われている。これは、*e* 句が修飾する動詞が *sal* であり、*sal* が特別に形容詞を伴った *e* 句に係るのを許しているためである。

### §46.2.3 節の代替によって生じる場合

形容詞句が特定の節の代わりに使われることがあり、このときに助詞が形容詞を伴うことになる。詳細は §114.2 を参照せよ。

## §46.3 間投詞を伴う助詞句

*ra* は例外的に、助詞として用いられて常に擬音間投辞を伴う。§126 も参照されたい。

これは、擬音間投辞のみから成る直接話法表現が名詞のように扱われて *ra* 句を構成し、そこから直接話法のラケットが省略された結果だと解釈することもできる。

## §47 助詞の種類と修飾

### §47.1 一般助接辞の動詞修飾形

一般助接辞の動詞修飾形が助詞として助詞句を成しているとき、その助詞句は動詞か間投詞を修飾する。基本助接辞が成す助詞句は、被修飾語となる動詞か間投詞の

格組に含まれている場合にのみ、その動詞や間投詞を修飾できる。基本助接辞以外が成す助詞句は、あらゆる動詞を修飾できる。なお、動詞や間投詞の格組については §48.2 と §48.3 を参照せよ。

### §47.2 一般助接辞の非動詞修飾形

一般助接辞の非動詞修飾形が形成している助詞句は、次のいずれかの場合でのみ現れる。

- ▶ 名詞や形容詞の格組にその助詞句が含まれている場合 (§48.4 参照)
- ▶ 動詞型不定辞の名詞用法に係る場合 (§28.1 参照)
- ▶ 限定節の動詞が省略された場合 (§101 参照)

### §47.3 例外助接辞の動詞修飾形

例外助接辞は基本的に非動詞修飾形で使われるため、原則として例外助接辞の動詞修飾形は現れない。しかし、以下の状況においては動詞修飾形が使われることがある。

- ▶ 形成する助詞句が動詞を修飾している場合 (§100.1 参照)

### §47.4 例外助接辞の非動詞修飾形

例外助接辞が助詞として使われるときは原則として非動詞修飾形をとる。このときに構成される助詞句は、その例外助接辞に応じて動詞以外の特定の種類の語句を修飾する。例えば、ku が形成する iku 句は名詞を修飾し、ti が形成する iti 句は連述詞を修飾する。

## §48 格組

### §48.1 概要

動詞, 間投詞, 形容詞, 名詞の 4 種類の単語は、それに修飾させることのできる基本助詞句の種類が単語ごとに制限されており、定められた基本助詞句以外の基本助詞句がその単語に修飾することはない。この修飾可能な基本助詞句のことは「格組 (case structure)」と呼ばれる。例えば、sôd の通常態動詞としての格組は a 格と e 格であるため、sôd が通常態の動詞として使われているときに ca 句や zi 句が修飾することはない。

続くサブセクションで、文法的品詞ごとの格組について詳しく述べる。

### §48.2 動詞

動詞が通常態で使われているときの格組は、li 以外の動詞修飾形から成り、動詞によってあらゆるパターンになり得る。一部の動詞は通常態のときに空の格組をもち、基本助詞句に一切修飾されない。



動詞が補助態で使われているときの格組は、その動詞が通常態で使われているときの格組に II 格を加えたものになる。

### §48.3 間投詞

間投詞の格組は、a と II 以外の動詞修飾形から成り、間投詞ごとに異なる。多くの間投詞は空の格組をもち、基本助詞句に一切修飾されずに常に単独で使われる。空でない格組をもつ間投詞のほとんどは、動詞型不定辞から派生したものである。動詞型不定辞派生の間投辞については §130 を参照せよ。

### §48.4 動詞型不定辞由来の形容詞

動詞型不定辞が形容詞として用いられたときの格組は、その単語が通常態動詞として用いられたときの格組から次のようにして得られる。まず、通常態動詞の格組を構成する助詞を全て非動詞修飾形にする。さらにそこから、動詞との意味関係の分類が主格型であれば ia を除き、対格型であれば ie を除く。このようにして得られる助詞が、その形容詞の格組となる。なお、形容詞と動詞の意味関係については §26 を参照せよ。

### §48.5 名詞型不定辞由来の形容詞

名詞型不定辞が形容詞として用いられたときの格組は、常に空である。したがって、名詞型不定辞由来の形容詞が基本助詞句で修飾されることはない。

### §48.6 動詞型不定辞由来の名詞

動詞型不定辞が名詞として用いられたときの格組は、その単語が通常態動詞として用いられたときの格組を全て非動詞修飾形にしたものである。

### §48.7 名詞型不定辞由来の名詞

名詞型不定辞が名詞として用いられたときの格組は、ia と III 以外の非動詞修飾形から成り、単語によってあらゆるパターンになり得る。

## §49 基本格の用法

### §49.1 主格

動詞の項のうち、動作主になれるものは概ね主格で表される。ただし、これはあくまで動詞が表す動作を意識的に引き起こすことができるものが主格に対応するというだけで、主格に置かれたからといってそれが意志をもって動作を行ったとは限らない。特に、動詞が補助態で使われている場合、主格は補助者によって補助される対象を表すので、主格に置かれたものが意識的に動作を行っているという意味合いはほとんどない。

- (1) talefes a tel e téd.  
▶ 私は扉を叩いた。
- (2) sôdaq a tiris acik li ces e leric.  
▶ 彼はその赤ちゃんにスープを飲ませている。

経験者も概ね主格で表される。

- (3) sâfat a tel e sakil.  
▶ 私はリンゴが好きだ。
- (4) qerites a tel e qelar i ces.  
▶ 私は彼の声を聞いた。
- (5) pîtes a tel.  
▶ 私は怖がった。

多くの動詞は被動者を対格にとるが、一部の動詞は主格にとることがある。これは、動作の影響を催すものが自然現象であり具体的な動作主が認知しづらい動詞に多い。例えば、deliv「落ちる」や zacfod「沸騰する」がこれに該当する。

- (6) delives a likok.  
▶ コップが落ちた。

## §49.2 対格

被動者は概ね対格で表される。

- (1) voltiges a tel e levkit.  
▶ 私はガラスを割った。

項としてコトをとる動詞では、そのコトはほとんどの場合で対格に置かれる。

- (2) sitifes a ces e'n paveqat a's e cifèkkis.  
▶ 彼は財布をなくしたと囁いた。
- (3) foqones a tel e'n lanis a'l ca sokutqôc.  
▶ 私は外国に行くのを諦めた。
- (4) dibe e'n medeles a tel e qixov i loc.  
▶ あなたのパソコンを壊してしまってすみません。

## §49.3 与格

受取者や受益者は概ね与格で表される。

- (1) séqes a tel ca ces e xoq afik.  
▶ 私は彼にこの本をあげた。

(2) feraces a tel ca ces e'n qilinas a's e takul.

▶ 私は彼が箱を運ぶのを手伝った。

移動を伴う動作を表す動詞では、着点が与格で表される。

(3) qorases a tel ca jêmanis.

▶ 私はドイツに旅行した。

動作が行われる場所は *vo* 句で表されることが多いが、一部の動詞は与格にとることがある。このような与格で表される場所は、動作全体が行われる場所というよりは、動作に関わっているものの場所を指すというニュアンスが強い。例えば、*qet* 「ある」、*cafôv* 「営業する」、*két* 「置く」、*kotik* 「見つける」などがこれに該当する。

(4) kêtes a tel e sòlaq ca hif izi zeqil.

▶ 私は携帯電話を机の上に置いた。

(5) kotikes a tel e faxcif ca naflat.

▶ 私は叔母を公園に見つけた。

#### §49.4 奪格

移動を伴う動作を表す動詞では、起点が奪格で表される。

(1) delives a tel zi hif izi kedic.

▶ 私から台から落ちた。

道具を表すのに奪格が使われることも多い。道具は *qi* 句で表されるのが普通だが、動詞の格組に道具を表す奪格が含まれている場合は、奪格の方が好まれる。

(2) naluses a tel zi talemciq e malek.

▶ 私はハンカチで飴を包んだ。

(3) xatêlac zi xalaq e hif izi zeqil.

▶ 電灯で机の上が照らされている。

方向や順序を表す名詞は、その基準となるものを奪格にとることがほとんどである。

(4) qetat a voston acik ca cît izi sod i tel.

▶ そのレストランは私の家の隣にある。

奪格はその用法が特に多様で、動詞によって様々な意味で用いられるため、普遍的な用法を定式化するのは難しい。

#### §49.5 能格

能格は補助態の動詞に係る場合にのみ現れ、そのとき補助態の意味における補助者が能格で表される。補助態については §67.3 を参照せよ。

能格にはモノもコトも置かれる。モノが置かれた場合は補助者を表し、コトが置かれた場合は直接的な原因を表す。

(1) *kômez li tel a delem a fitul acik.*

▶ 私はその少女に靴下を履かせた。

(2) *dodez a tel li'n vahixes a ces.*

▶ 彼が亡くなったことで私は悲んだ。

## §50 特筆すべき助詞

### §50.1 i

*i* は、汎用の名詞修飾を行う助詞であり、*i* 句の補語とその被修飾語に密接な関係があることを意味する。その具体的な用法は多岐に渡る。以下に *i* の典型的な用法をいくつか列挙するが、*i* の用例はここに挙げたものに留まるわけではないことに注意されたい。

まず *i* は、所有を表すのによく用いられる。この用法は、*kav* や *kût* が成す限定節の代わりと見なすこともできる。例えば、*nîl i tel* は *nîl kavat e a tel* と同じ意味である。

(1) *salat a nîl i tel e cosrasál.*

▶ 私の兄は医者だ。

さらに *i* は、その補語の一部分を表すことがある。例えば、*kudoq i sokul* は「部屋の奥」の意味で、これは「部屋」で表される空間のうち「奥」に相当する一部分を指している。

(2) *kétat vo kudoq i sokul e tòked avaf.*

▶ 部屋の奥には大きな棚が置かれていた。

また *i* は、被修飾語に性質や特性を表す単語が置かれて、被修飾語と *i* 句全体でその補語の性質を表すことがある。例えば、*taklot i dev* は「ペンの長さ」の意味であり、*velex i sòlad* は「携帯電話の色」の意味である。

(3) *pa salat e pet a velex i sòlad acik?*

▶ その携帯電話の色は何ですか？

これら以外の *i* の用法もよく見られ、そのときの被修飾語と補語の関係は多様だが、概ねそのような *i* 句は補語を何らかの形で含む限定節の代わりとして解釈できる。このとき、その限定節の補語以外の部分は、*i* 句の被修飾語や文脈によって十分補完できるようなものである。§101 も参照されたい。

(4) *salat a tel e cossác vomac sácós a e dessotàk.*

▶ 私は数学を教える教師だ。

(5) *salat a tel e cossác i dessotàk.*

▶ 私は数学の教師だ。

(4) と (5) は実質的に同じことを述べているため、(5) にある *i dessotàk* は (4) にある *vomac sácós a e dessotàk* の代わりに「数学の教師」とだけ言ったとしても、「数学」と「教師」の関係性が「教える」であることは容易に想像できるため、(5) のような *i* 句による表現が可能になっていると考えられる。

## § 50.2 *qe*

何かを作ったり生み出したりすることを含意する動詞において、基本助詞句 (多くの場合で *e* 句) で表されるものは、その動詞の被動者のみである。その動作の結果として生み出されたものは、*qe* という専用の助詞で表される。

(1) *debêkes a ces e sodel.*

▶ 私は地面を掘った。

(2) *debêkes a ces qe denos.*

▶ 私は穴を掘った。

「地面を掘る」もしくは「穴を掘る」という行為において、「掘る」という動作によって直接的に変化を被るものは地面である。そのため、「地面」の意味の *sodel* は、(1) では *e* 句をとっている。一方、穴は「掘る」という動作によって生み出されるものであるから、「穴」を表す *denos* は、(2) のように *qe* 句をとり、*e* 句で表されることはない。

## § 51 二重助詞句

### § 51.1 概要

同じ助詞から成る複数の助詞句が1つの単語に係っている状況は、しばしば「二重助詞句 (double prepositional phrase)」と呼ばれる。二重助詞句は、その助詞句の補語となっている名詞を *ò* で繋げて1つの助詞句にしたものと同じ意味になる。

(1) *qetet te tazît vo fêd a qelad i tel, a dutel.*

▶ 昨日ここにいたのは私の弟で、私ではない。

(2) *qetet te tazît vo fêd a qelad i tel ò dutel.*

▶ 昨日ここにいたのは私の弟で、私ではない。

このうち、(1) が二重助詞句を含む文で、(2) がその2つの助詞句に置かれている名詞を *ò* で繋げて1つの助詞句にしたものである。この2つの文が表す内容は同じである。

二重助詞句は基本的に避けられるが、特定の場合では二重助詞句が見られることが

ある。続くサブセクションで、そのような二重助詞句が現れるパターンについて述べる。

### §51.2 話題化

本来ならば1つの助詞句で済むが、その助詞句の意味の一部分だけが話題として節の始めの方に移動させられたために、二重助詞句が現れることがある。

(1) *te saq, dunòqes catsatas a tel te zéc vo fecil ica sod.*

▶ 今日は、朝家の周りを散歩するのを忘れなかった。

(1)には、*dunòqes* に *te saq* と *te zéc* という2つの *te* 句が係っている。これは、本来なら *te zéc i saq* という1つの *te* 句で表現するところを、*saq* だけを話題として文頭に置きたかったために、2つの *te* 句に分離させて表現したからだと考えられる。

### §51.3 挿入表現による補足説明

すでに存在している助詞句と同じ助詞を用いた別の助詞句が、もともとの助詞句の内容に対する補足説明として、挿入表現にして追加されることがある。補足説明となる2つ目の助詞句は、それを受ける助詞句の直後に挿入されることが多いが、文末に挿入されることもある。

(1) *fékes a tel e'n benagat a hinof i loc, a nêtih asen, e benôm.*

▶ あなたの姉、ネーティアさんが風邪を引いたと聞いた。

(2) *dítat cipasis a'c ca ces e qidok ie qixov, ca qasot i tel.*

▶ 彼にパソコンを修理するよう頼んでください、私の息子に。

(1)では、*a hinof i loc* という *a* 句への補足として、*a nêtih asen* という更なる *a* 句が直後に挿入されている。(2)では、*ca loc* という *ca* 句への補足として、*ca qasot i tel* という *ca* 句が文末に挿入されている。

### §51.4 詩歌における強調

詩歌においては、強調のために全く同じ助詞句が2回以上繰り返されることがある。

(1) *fi xerat acís afík, zêhisac a zál e kovèt, e kovèt, e kovèt.*

▶ この初めての音とともに、私たちは絆を、絆を、絆を作り上げている。



# 否定表現

## §52 否定形による否定表現

### §52.1 名詞以外

動詞か形容詞か副詞のいずれかとして使われている不定辞の否定形は、「～ではない」という否定の意味になる。

(1) *duyisat a tel e loc.*

▶ 私はあなたが好きではない。

(2) *dôkes a tel te tazîk e likok aduhap.*

▶ 私は昨日安くないコップを割った。

(3) *kétes a ces e qixov odukosiz.*

▶ 彼女はパソコンを丁寧でなく置いた。

(1) の *duyisat*, (2) の *aduhap*, (3) の *odukosiz* が否定形で、それぞれ「好きではない」、「安くない」、「丁寧でなく」という否定の意味をもつ。

### §52.2 名詞型不定辞由来の名詞

名詞として使われている名詞型不定辞の否定形は、「～以外のもの」という意味になり、さらに「そうであるという前提があったときにそこに反論する」というニュアンスが加わる。

(1) *qetet te tazît vo sokul afik a duces.*

▶ 昨日この部屋にいたのは彼女ではない。

(1) は例えば、その場にいる人に「昨日この部屋にいたのは彼女だ」と思われている状況で、それに反論するときなどに見られる。そもそも「昨日この部屋にいたのは彼女だ」と思われてはいない状況で、単に彼女以外の人が部屋にいたことに言及しただけであれば、否定形である *duces* が使われるのは稀である。

前提に対する反論というニュアンスを特別出したいくない場合には、*zis aqôc ile S* や *zat iqo S* などの形が代わりに用いられる。

固有名詞は否定形をもたないので、「～以外のもの」を表現するためには、代わりに *zis aqôc ile S* や *zat iqo S* などの形が用いられる。



### §52.3 動詞型不定辞由来の名詞

名詞として使われている動詞型不定辞の否定形は、常に「～しないこと」の意味になる。名詞型不定辞の場合とは違い、「～すること以外のこと」の意味にはならないことに注意せよ。すなわち、動詞型不定辞の名詞用法の否定形は、否定された動詞の意味を名詞化したものであり、動詞を名詞化したものの否定ではない。例えば、*duviiis* は常に「走らないこと」を意味し、「走ること以外のこと」を意味することはない。

動詞型不定辞の名詞用法を用いて「～すること以外のこと」を表現するためには、*zel i qo S* などの形が用いられる。

## §53 部分否定と全部否定

### §53.1 否定形による部分否定

否定形は、否定形になっているその単語の意味のみを否定する。したがって、「全て」の意味合いを含む単語が動詞の否定形とともに用いられると、全部否定の意味になる。

(1) *dudéxat ovák a ces.*

▶ 彼はいつも寝ていない。

に含まれている *dudéxat* は *déxat* の意味だけを否定するため、*dudéxat* で「寝ていない」という意味の表現になる。その「寝ていない」に「いつも」の意味の *ovák* が係っているため、全体で「いつも寝ていない」もしくは「いつも起きている」という全部否定の意味になる。

一方、「全て」や「無」の意味合いを含む単語自体が否定形にされた場合、部分否定の意味になる。

(2) *déxat oduvák a ces.*

▶ 彼はいつも寝ているというわけではない。

(2) の場合、*oduvák* は *ovák* の意味だけを否定し、*oduvák* で「いつもでない」すなわち「時間的な例外があって」という意味の表現を作る。これが *déxat* という「寝ている」の意味の単語を修飾しているため、全体で「時間的な例外があって寝ている」つまり「いつも寝ているというわけではない」の意味になる。

このようにして部分否定の文を作る単語には、以下のようなものがある。

単語	意味
aduves	全て～するわけではない
odukôt	必ずしも～するわけではない
oduvák	いつも～するわけではない
oduvop	再び～することはない

### §53.2 dil による部分否定

dil は動詞として使われて e 句の補語を否定する役割をもつ。したがって、dilos e kin の後に節が続けられると、その節全体が否定される。dil のこの性質を用いて部分否定の文が作られることがある。

(1) dilot déxas ovák a ces.

▶ 彼はいつも寝ているわけではない。

(1)では、(助動詞の用法によって kin が省略された) kin 節の「彼はいつも寝ている」という内容全体が否定され、「いつも寝ているわけではない」という部分否定の意味を作っている。

なお、dil は助動詞の用法をとることがほとんどである。助動詞の用法については §69 を参照せよ。

### §54 否定相当語

否定形でなくても否定の意味になる語がいくつかある。そのような語を「否定相当語 (negative word)」という。例えば、dus は肯定形で「0 人の人が～する」すなわち「誰も～しない」という意味をもつ。

(1) keqit a dus e sod afik.

▶ 誰もこの家に住まないだろう。

否定相当語には以下のようなものがある。それぞれ使われる文法的品詞に制約が見られるので、それも併記する。

語	意味	品詞
dus	誰も～しない	名詞
dat	何も～しない	名詞
dol	どんなことも～しない	名詞
dûd	どこも～しない	名詞
dak	どんな～も～しない	形容詞
dûg	決して～しない	副詞
dum	全く～しない	副詞

なお、上記の表の初めの5語は代辞の一種である。代辞については §121 を参照せよ。

## §55 二重否定

否定相当語と否定形が同時に用いられると、常に強い肯定を表す。すなわち、二重否定は否定の強調ではなく肯定の意味になる。

(1) *dusalat a dol e asokes.*

▶ 何も重要でないということはない。

(1)では、「0個のことが重要でない」ということから「全て重要である」という意味になっている。また、二重否定が使われていない *salat a zel aves e asokes* などの表現よりも、この文の方が強く「全てが重要である」ということを主張する。

# 疑問表現

## §56 疑問文の共通法則

全ての疑問文では、その種類に関わらず、文の主節の動詞の直前に **pa** が置かれる。ここで現れる **pa** は、疑問文であることを標示するための特殊な単語で、しばしば「疑問機能辞 (interrogative functional)」と呼ばれる。

複数の節が連結詞で繋がれている文が疑問文になる場合は、例外的に繋がれている全ての節の動詞の前に **pa** が置かれる。複数の節が接続詞で繋がれている文が疑問文になる場合は、前述の通り主節の動詞の前にのみ **pa** が置かれる。

- (1) **pa salot a loc e pas, lo pa lesac a loc e pil vo fêd?**  
▶ あなたは誰ですか、そしてここで何をしているのですか?
- (2) **pa qetet a loc vo pâd, te liceles a tel e loc te tazît?**  
▶ 私が昨日あなたを訪ねたとき、あなたはどこにいましたか?

上記に加え、疑問文では文末のデッキがパデッキに変えられる。疑問表現を含むにも関わらず文末がデッキのままである場合は、疑問ではなく反語の意味になる。これについては §111 で触れる。

疑問文が読まれる際は、文末が上昇気味になる。

## §57 諾否疑問文

### §57.1 構成

諾否疑問文は、真偽を問いたい内容を表現した文に対し、共通法則の通りに **pa** を置いてデッキをパデッキに換えることで作られる。その他の語順の変化はない。

- (1) **pa kilat lakos a loc qi qixaléh?**  
▶ あなたはシャレイア語を話せますか?

### §57.2 返答方法

諾否疑問文への返答として最も簡潔なものは、疑問内容の真偽に応じて **ya** もしくは **du** が用いたものである。**ya** は聞かれた内容が正しいときに使われ、**du** は聞かれた内容が誤りのときに使われる。どちらも間投辞であるため、単独で文を成す。

(1) *pa séqes ca loc a ces e gisol? / du.*

▶ あなたは彼からお金をもらいましたか? / いいえ。

*ya* と *du* の使い分けは、疑問内容が否定表現になっているときに特に注意が必要である。疑問文から *pa* を取り除いた文が正しければ *ya* が使われ、正しくなければ *du* が使われる。

(2) *pa dusâfakes a loc e dat? / ya.*

▶ あなたは犬が嫌いですか? / はい。

(2) では、疑問文から *pa* を除いた文が「あなたは犬が好きではない」という意味であるため、*ya* と答えた人は犬が嫌いであるということになる。

## §58 疑問詞疑問文

### §58.1 構成

疑問詞を用いた疑問文は、尋ねたい部分を適切な疑問詞に変えた文に対し、共通法則の通りに *pa* を置いてデッキをパデッキに換えることで作られる。

(1) *pa salot a loc e pas?*

▶ あなたは誰ですか?

(2) *pa yisat a loc e fakel apéf?*

▶ あなたはどんな女性が好きですか?

以下に主要な疑問詞を挙げる。これらは使われる文法的品詞に制約が見られるので、それも同時に示す。

語	意味	品詞
<i>pas</i>	誰	名詞
<i>pet</i>	何	名詞
<i>pil</i>	どんなこと	名詞
<i>pâd</i>	どこ	名詞
<i>pek</i>	どんな	形容詞
<i>péf</i>	どのような, どのように	形容詞, 副詞

なお、上記の表の初めの5語は代辞の一種である。代辞については §121 を参照せよ。

助詞と疑問詞を組み合わせて副詞的な疑問表現が作られることがある。

(3) *pa qoletes a loc e sod vade pil?*

▶ あなたはどのようにして家を買ったのですか?

(3) では、理由を表す助詞 *vade* と疑問詞 *pil* が組み合わさり、*vade pil* で「どんなこ

との理由で」すなわち「なぜ」という意味の疑問表現になっている。  
 このような方法で作られる疑問表現には、以下のようなものがある。

助詞句	意味
te pet	いつ
vade pil	なぜ
qi pil	どうやって

## §58.2 返答方法

### §58.2.1 動詞修飾の助詞句を抜き出す方法

疑問詞疑問文に答えるときには、遊離助詞句が使われることが多い。遊離助詞句については§105も参照せよ。

疑問詞が名詞か形容詞である場合は、その疑問詞を含む動詞修飾の助詞句を取り出し、疑問詞を回答となる表現に変えたものが、返答として用いられることが多い。

- (1) pa lanes a loc ca amerikas te pet? / te tazît.  
 ▶ あなたはいつアメリカに行ったのですか? / 昨日だ。
- (2) pa sâfat a loc e zas apéf? / e zas asafey.  
 ▶ あなたはどんな人が好きですか? / 愛想の良い人だ。
- (3) pa salat a qut e soki q i pas? / e soki q i tel.  
 ▶ あれは誰の腕時計ですか? / 私の腕時計だ。

(1) の te pet, (2) の e zas apéf, (3) の e soki q i pas が疑問詞を含む動詞修飾助詞句であるため、それぞれに含まれる疑問詞を回答に置き換えた助詞句が返答として用いられている。ここで、抜き出される助詞句は必ず動詞修飾のものであることに注意せよ。例えば、(3)において、i pas だけを抜き出して回答に置き換えた i tel が返答となることはない。

(2) のように疑問詞が形容詞である場合や、(3) のように疑問詞を含む助詞句が動詞以外を修飾している場合は、回答となる遊離助詞句に回答以外の名詞が含まれることになる。この回答以外の名詞は疑問文にも含まれているものなので、繰り返しを避けるために met に置き換えることが多い。met については§118.2を参照せよ。

- (4) pa sâfat a loc e zas apéf? / e met asafey.  
 ▶ あなたはどんな人が好きですか? / 愛想の良い人だ。
- (5) pa salat a qut e soki q i pas? / e met i tel.  
 ▶ あれは誰の腕時計ですか? / 私のだ。

疑問詞が pil の場合は回答が節になることが普通である。この場合、pil に付随する助詞が接続詞の意味で使われているのであれば、pil を節で置き換えて単独の接続詞

節の形で返答される。そうでなければ、**pil** が **kin** 節に置き換えられる。接続詞の意味で使われる助詞については §102 を参照せよ。

(6) *pa câkes so pil a loc ca fêd? / so câsis a tel e refet.*

▶ 何のためにここに来たのですか? / 友達に会うためです。

(7) *pa leses a loc te tazî e pil? / e kin câses a tel e 'yutih.*

▶ あなたは昨日何をしましたか? / 私はユティアに会った。

### §58.2.2 遊離 **e** 句を使う方法

疑問詞を含む助詞句が動詞以外を修飾している場合は、遊離 **e** 句による返答も見られる。具体的には、疑問詞を直接含んでいる助詞句だけを抜き出して助詞を **e** に変え、さらに疑問詞を回答となる表現に変えて得られる **e** 句が、返答として用いられることがある。これは、§58.2.1 で述べた方法で返答しようとする、その疑問詞を含む動詞修飾の助詞句全体を抜き出す必要があるため、回答が冗長になってしまうからだと考えられる。遊離 **e** 句については §105.4.3 を参照せよ。

(1) *pa sâfat a loc e qinat i pas? / e 'xastil.*

▶ あなたは誰の絵が好きですか? / シヤスティルだ。

(2) *pa kêtes a loc e sôlaq ca hif izi dèt apek? / e met ivo sokfeti q.*

▶ どの机の上に携帯を置いたのですか? / リビングにある机だ。

(1) では、疑問詞を含む助詞句として **i pas** が抜き出され、その **pas** が **'xastil** に置き換えられて返答となっている。(2) では、**izi dèt apek** が抜き出され、**apek** が **ivo sokfeti q** に置き換えられて(さらに繰り返しを避けるために **dèt** が **met** に変えられて)返答となっている。

なお、疑問詞が形容詞のとき、回答となる形容詞に直接 **e** を付けた形の遊離 **e** 句で返答されることはない。あくまで疑問詞を含む助詞句全体が抜き出された上で、助詞が **e** に変えられる。

## §59 選択疑問文

### §59.1 構成

#### §59.1.1 **ve** による構成

複数の選択肢の中から回答させるような選択疑問文は、疑問詞疑問文における疑問詞に **ive** 句を修飾させて作られる。**ive** 句は選択肢を表し、**ive** 句の中には選択肢となる名詞句が置かれる。なお、「どれ」や「どちら」のような選択肢の中から選ばれる意味をもつ特別な疑問詞はないので、代わりに **pas** や **pet** などの通常の疑問詞が用いられる。

(1) pa sâfat a loc e pet ive zef o bak o nev?

▶ 赤色と青色と黄色ではどれが好きですか?

### §59.1.2 áによる構成

選択疑問文は、選択肢を á で繋げて文中に置くことでも作られる。このとき、á で繋がれた名詞全体が疑問表現として働く。

(1) pa sâfat a loc e zef á bak á nev?

▶ 赤色と青色と黄色ではどれが好きですか?

á は節を繋げることもある。この場合、á の代わりに別形の lá が使われることが多い。á や lá は連結辞であるため、これによって繋がれた節の両方の動詞の前に pa が置かれることに注意せよ。

(2) pa harat a loc, lá pa dodat a loc?

▶ あなたは楽しんでますか、それとも悲しんでいますか?

主節の動詞の後に á dulos が続けられると、肯定か否定かを選ばせる選択疑問文になるため、結果として諾否疑問文と同じ意味になる。この形は、通常の諾否疑問文と比べて、肯定か否定かをはっきりしてほしいというニュアンスが加わる。また、諾否疑問表現を間接疑問にしたい場合にもこの形が用いられる。詳しくは §60.2 を参照せよ。

(3) pa bozetes á dules a loc e qaled i tel?

▶ あなたは私の弟を殴ったのか殴っていないのか?

## §59.2 返答方法

選択疑問文への返答としては、疑問詞疑問文と同じものが用いられる。疑問詞疑問文への返答については §58.2.1 を参照せよ。

## §60 間接疑問

### §60.1 疑問詞疑問, 選択疑問

疑問詞疑問表現や選択疑問表現が kin 節となって文の一部となる場合は、それから pa を取り除いた形がそのまま使われる。kin 節については §80 で詳しく述べる。

例えば、以下のような疑問文があるとする。

(1) pa qetat a sod i loc vo pâd?

▶ あなたの家はどこにありますか?

この疑問文からは、例えば以下のような間接疑問表現が作られる。



(2) sokat a tel e kin qetat a sod i loc vo pād.

▶ 私はあなたの家がどこにあるか知っている。

最初の文から **pa** を取り除いて得られる形が **kin** 節になっていることに着目せよ。また、この文全体は疑問文ではないので、文末はパデッキではなくデッキが置かれていることに注意せよ。

## §60.2 諾否疑問

諾否疑問表現が **kin** 節となって文の一部となる場合は、主節の動詞の後に **á dulos** を続けることで得られる選択疑問表現に変えられた後で、**pa** が取り除かれる。**á dulos** を付け足した形の選択疑問文については §59.1.2 を参照せよ。なお、このような形になるのは、諾否疑問表現には動詞に付けられた **pa** 以外に疑問表現がないため、**pa** を取り除くと疑問文なのか平叙文なのかが区別できなくなるためだと考えられる。

(1) dusokat a tel e kin kavat á dulat a loc e nīl.

▶ 私はあなたに兄がいるかいないか知らない。

# 時制と相

## §61 時制

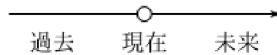
### §61.1 概要

以下の4つの時制をもつ。

- ▶ 現在時制 (present tense)
- ▶ 過去時制 (past tense)
- ▶ 未来時制 (future tense)
- ▶ 通時時制 (diachronic tense)

時制は動詞の活用によって示される。詳しくは §35.1 を参照せよ。

4つの時制のうち通時時制を除く3つの時制は、次に示す図のようにモデル化して説明することができる。この図の直線を、ここでは「時制直線 (tense line)」と呼ぶことにする。直線の矢印の方向に時間が進んでおり、中央にある現在時制を基準として、それより時間的に前となる部分全体が過去時制となり、それより時間的に後になる部分全体が未来時制となる。



この図では現在時制を点で表現したが、従属節においては現在時制が幅のある期間を表すことがあり、また小説などの叙事的な文章では現在時制が特殊な働きをする。従属節の時制については §65 を、叙事的な文章での時制については §66.1 を参照せよ。

続くサブセクションで、それぞれの時制の具体的な意味について述べる。

### §61.2 現在時制

現在時制は、主節ではその文が話されたか書かれた瞬間となる時間の1点を表し、従属節では主節が表す時間と同じ時間を表す。詳しくは §65 を参照せよ。

- (1) xôyak a tel e sokul.
  - ▶ 部屋を片付け終わった。
- (2) lices a tel e kin fevetac a ces e yaf i tel.
  - ▶ 彼が私の妹と一緒にいるのを見た。

(1) では、xôy が主節で現在時制で使われているため、発話時か執筆時にちょうど片付けが終わったことを意味している。(2) では、fevet が kin 節内で現在時制で使われているが、これは主節の「見た」と同じ時間に「一緒にいる」が行われているこ

とを表している。主節は過去時制なので、主節の「見た」は過去に起こった出来事ということになるため、それと同時間に行われた「一緒にいる」も過去の出来事であることに注意せよ。

小説などの叙事的な文章においては、現在時制は通常とは異なる働きをする。これについては §66.1 で詳しく述べる。

### §61.3 過去時制

過去時制は、現在時制が表す時間よりも前の出来事について表現するとき用いられる。その行為の結果が現在まで続いているのか続いていないのかは含意しない。

(1) *zedotes a tel e niv aq.*

▶ 私はあの紙を破った。

(1) では、過去時制が用いられているので、ただ過去のある時点で紙が破られたことのみを意味する。したがって、現在の時点でその紙が破られたままなのか、それとも修復されているのかは分からない。なお、動詞が現在時制継続相の *zedotat* であれば、現在の時点でその紙が破られた状態であるという意味になる。

### §61.4 未来時制

未来時制は、現在時制が表す時間よりも後の出来事について表現するとき用いられる。単に出来事の時間を表すのみで、意思や推測などの意味合いはない。

(1) *cákis a ces ca fêd te lon i saq.*

▶ 彼は今日の夜にここに来る。

### §61.5 通時時制

通時時制は、過去も未来も含む十分長い時間で常に成立すると考えられる内容を表すのに用いられる。特に、物理法則のような普遍的な事実を表すときによく見られる。

(1) *vahixos okók a laxol.*

▶ 人間は必ず死ぬ。

(2) *kilot lakos a ces qi qilxaléh.*

▶ 彼女はシャレイア語を話すことができる。

(1) では、普遍的な事実を表すために通時時制が用いられている。(2) では、過去にもシャレイア語を話すことができたし未来でも引き続き話すことができるだろうということを表すために通時時制が用いられている。ここで、「彼女がシャレイア語を話せる」ということは、その人物が何らかの病気で言語能力を失えば否定されてしまうため、普遍的な事実とは言えないことに注意せよ。普遍的な事実でなくても、異例な出来事がなければ未来の十分長い時間で成立すると考えられれば、通時

時制で表される。

通時時制は、時間に言及せずただ行為のみを表す場合にも使われる。この用法は従属節でのみ見られる。

(3) sâfat a tel e kin likomos a tel e nayef.

▶ 私は花を見るのが好きだ。

(3)における「花を見る」というのは現在の行為や過去の行為を指しているのではなく、「花を見る」という時間によらない行為そのものを表している。

## §62 相

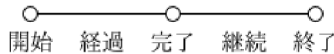
### §62.1 概要

以下の5つの相が区別される。

- ▶ 開始相 (inceptive aspect)
- ▶ 経過相 (progressive aspect)
- ▶ 完了相 (perfect aspect)
- ▶ 継続相 (continuous aspect)
- ▶ 無相 (indefinite aspect)

相は動詞の活用によって示される。詳しくは§35.1を参照せよ。

5つの相のうち無相を除く4つの時制は、次に示す図のようにモデル化して説明することができる。この図の直線を、ここでは「相直線 (aspect line)」と呼ぶことにする。直線の右方向に行為の段階が進んでおり、その中に相の基準となる3点が配置されている。この基準点のうち最初の2点は開始相と完了相によって表され、基準点の間の線分は経過相と継続相によって表される。3つ目の基準点を表す相は存在しないが、便宜的にこれを「終了相 (terminative aspect)」と呼ぶことがある。



図が示す通り、開始相と完了相は動作の局面の中の1点を表すため、これらを総称して「瞬間相 (punctual aspect)」と呼ぶこともある。また、経過相と継続相は長さのある一定期間を表すため、これらを総称して「期間相 (durative aspect)」と呼ぶこともある。

「座る」という動作を例にとると、各相が表す動作の局面は次のようになる。

相	段階
開始相	座ろうとして足を曲げ始めた瞬間
経過相	足を曲げ始めて尻が椅子などにつくまでの期間
完了相	尻が椅子についた瞬間
継続相	尻が椅子についている期間
終了相	尻が椅子から離れた瞬間

続くサブセクションで、それぞれの相の具体的な意味について詳細に述べる。

## §62.2 開始相

開始相は、行為が始まる瞬間を表す。

(1) lîdaf a tel e xoq afik te sot.

▶ 私は今この本を読み始めた。

## §62.3 経過相

経過相は、行為が始まった瞬間から完了する瞬間までの間、すなわち開始相から完了相までの期間を表す。

(1) terac a tel te sot e rix.

▶ 私は今水を飲んでいるところだ。

## §62.4 完了相

完了相は、行為が完了した瞬間を表す。

(1) feketak a tel te sot.

▶ 私は今起きたところだ。

## §62.5 継続相

継続相は、行為が完了する瞬間からそれ以降の状態が終わる瞬間までの間、すなわち完了相から終了相までの期間を表す。

(1) déqat a tel.

▶ 私は座っている。

## §62.6 無相

無相は、行為が始まってから完了するまでの一連の行為全体、すなわち開始相から完了相までの全体を表す。

(1) sôdes a tel e ric te tazîl.

▶ 私は昨日魚を食べた。

無相は、動作の局面に言及せずに動詞が表す動作そのものを表現したい場合にも使われる。この用法は従属節でのみ見られる。

(2) duqifet e'n qetanas a tel te sot.

▶ 私は今動くことができない。

## §63 相動詞による相の表現

それぞれの相は、動詞の活用形として示される以外に、相を表す動詞によって表現

されることもある。このときに用いられる相を表す動詞は、しばしば「相動詞」と呼ばれる。相動詞による表現では、動詞の活用形として相が標示された場合に比べ、相の意味が強調される。

相動詞には以下の4種類がある。

単語	相
fôc	開始相
setac	経過相
dokol	完了相
tál	継続相

次のような操作により、動詞の活用形によって相が表現された節から、相動詞によって相が表現された節を得ることができる。まず、もとの節を kin 節にして相動詞の e 句の補語とし、もとの文を現在時制無相に変え、相動詞自身の時制をもとの文の時制に一致させる。さらに、相動詞の相を、それが表す相が瞬間相なら完了相にし、期間相なら継続相にする。この操作で得られる節は、もとの節と同じ内容になる。

(1) sôdef a tel e sakil.

▶ 私はリンゴを食べ始めた。

(2) fôces sôdas a tel e sakil.

▶ 私はリンゴを食べ始めた。

(1) は動詞の活用によって相を表しており、(2) は相動詞の fôc によって相を表している。この2つの文は表す内容が同じである。

## §64 時制と相の対応関係

### §64.1 無相以外

#### §64.1.1 総論

全ての動詞は、活用によってその時制と相を明示する。このとき、時制直線上で動詞が示す時制に該当する部分と相直線上で動詞が示す相に該当する部分とに共通部分があることを意味する。

続くサブサブセクションで、いくつかのパターンに分けて、時制と相が意味する内容について具体例を挙げつつ述べる。

#### §64.1.2 点を表す時制 + 瞬間相

時制が点を表し相が瞬間相である場合の例として、以下の現在時制完了相の文を挙げる。

## (1) feketak a tel.

▶ 私は起きた。

(1)の動詞 **feketak** は現在時制完了相を示しているが、これが意味することは、時制直線上で現在時制を表す点と **feket** の相直線上で完了相を表す点に共通部分があるということである。現在時制も完了相も1点を表すので、この2つの点が一致する形になる。図示すると以下ようになる。



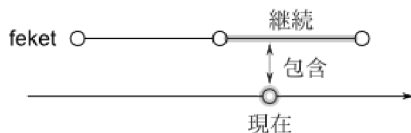
## §64.1.3 点を表す時制 + 期間相

時制が点を表し相が期間相である場合の例として、以下の現在時制継続相の文を挙げる。

## (1) feketat a tel.

▶ 私は起きている。

(1)の動詞 **feketat** は現在時制継続相を示しているが、これが意味することは、時制直線上で現在時制を表す点と **feket** の相直線上で継続相を表す部分に共通部分があるということである。現在時制は1点を表すが継続相は期間を表すので、点が期間に包含されている形になる。図示すると以下ようになる。



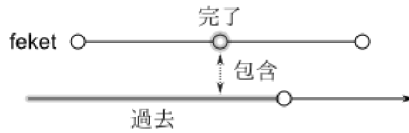
## §64.1.4 期間を表す時制 + 瞬間相

時制が期間を表す時制で相が瞬間相である場合の例として、以下の過去時制完了相の文を挙げる。

## (1) feketek a tel.

▶ 私は起きた。

(1)が意味することは、時制直線上で過去時制を表す部分と **feket** の相直線上で完了相を表す点に共通部分があるということである。過去時制は期間を表すが完了相は点を表すので、点が期間に包含されている形になる。図示すると以下ようになる。



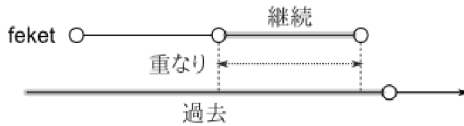
### §64.1.5 期間を表す時制 + 期間相

時制が期間を表す時制で相が期間相である場合の例として、以下の過去時制継続相の文を挙げる。

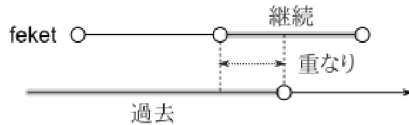
(1) feketet a tel.

▶ 私は起きていた。

(1)では、時制直線と相直線の関係には2つのパターンが考えられる。1つ目は、時制直線上で過去時制を表す部分に相直線上で継続相を表す部分が含まれているということである。これは以下の図で表される。



そして2つ目は、時制直線上で過去時制を表す部分と相直線上で継続相を表す部分が、以下の図のように部分的に重なっているということである。



なお、後者の場合では「起きている」という状態は現在でも続いていることに注意せよ。すなわち、このような状況は、過去時制継続相で feketet と表現されることも現在時制継続相で feketat と表現されることもある。しかし、両者でニュアンスは異なり、前者は過去に「起きている」という状態があったことを述べたい場合に使用され、後者は現在「起きている」という状態であることを述べたい場合に使用される。

### §64.2 無相

相として無相が用いられている場合、その無相は、開始相から完了相までの一連の流れを表すか、動作の局面に言及せず動作そのものを表すかのどちらかである。前者の場合、時制直線上で時制が表す部分と相直線上で無相が表す部分(開始相から完了相まで)に共通部分があるということ以上に、時制が表す部分に無相が表す部分が完全に含まれているということまで含意する。

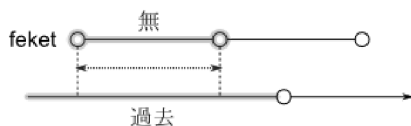
以下に例を挙げる。



## (1) feketes a tel.

▶ 私は起きた。

(1)の動詞 **feketes** は過去時制無相であるため、時制直線上における過去時制の部分と相直線上における無相の部分に重なりがあることに加え、過去時制の部分に無相の部分完全に包含されていることまで含意している。これを図示すると、以下のようになる。



このことから、主節において現在時制と無相が同時に用いられることはない。なぜなら、主節の現在時制が表すのは1点であり、無相が表すのは幅のある直線であるが、点に直線が完全に含まれることはないためである。ただし、叙述の現在時制が用いられる場面では、例外的に現在時制無相が使われることがある。これについては§66.1で詳しく述べる。

## §64.3 時間を表す表現がある場合

## §64.3.1 総論

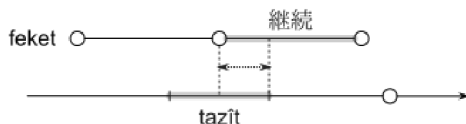
動詞が **te** や **teca** などの時を表す助詞句によって修飾されているとき、それに伴って時制直線上で動詞の時制が表す部分が制限される。

例として、次の文を考える。

## (1) feketet a tel te tazît.

▶ 私は昨日起きていた。

(1)の場合、動詞 **feketet** に係る助詞句 **te tazît** によって、**feketet** の過去時制が時制直線上で表す範囲が「昨日」に限定される。したがって、上の文が表す内容は、相直線上で継続相を表す部分が時制直線上の「昨日」を表す部分と重なっているということである。

§64.3.2 **teku** 句

**teku** は助詞として「～の間中ずっと」という意味をもつ。そのため、動詞が **teku** 句で修飾されている場合は、時制直線上で動詞の時制が表す部分が制限されることに加え、時制直線上での該当箇所が相直線上での該当箇所完全に含まれていること

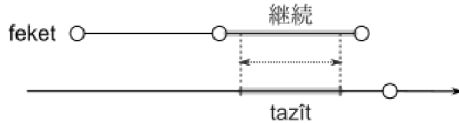
まで含意する。

例として、次の文を考える。

(1) feketet a tel teku tazit.

▶ 私は昨日の間起きていた。

(1) が表すのは、以下の図のように、時制直線上で「昨日」を表す部分が相直線上で継続相を表す部分に含まれているということである。



なお、teku のこの性質から、teku 句が幅をもち得ない瞬間相とともに用いられることはない。

## §65 従属節の時制

### §65.1 総論

過去時制は現在時制が表す区間より前の時間を表し、未来時制はそれより後の時間を表す。したがって、時制の意味は現在時制が表す区間を基準にして決まる。この区間を「基準時間 (reference time)」と呼ぶことにする。

節の基準時間は、節の種類によって以下の表に従って再帰的に定まる。ここで、ある従属節を直接含んでいる節のことを「親節 (parent clause)」と呼んでいる。

節	基準時間
主節	その文の成立時刻 (口語なら発話時, 文語なら執筆時)
動詞を修飾する従属節	親節の基準時間と同じ時間
動詞以外を修飾する従属節	親節において時制と相が表す箇所の共通部分
直接話法部	その箇所の発話時

なお、小説などで叙述の現在時制が用いられる場合では、主節の基準時間は、文の成立時刻ではなく、その文によって進んだ物語の世界内における時間になる。叙述の現在時制については §66.1 で述べる。

続くサブセクションで、上の表に示した 4 種類の節について、具体例を挙げつつ個別に詳しく解説する。

### §65.2 主節

主節の基準時間は、その文の成立時刻である。すなわち、その文が発話された場合なら話された瞬間、文字として執筆された場合ならそれが書かれた瞬間である。したがって、基準時間は幅のない点的な時間になる。

(1) *meberat a tel.*

▶ 私は眠い。

(1)では、主節の動詞 *meberat* で現在時制が用いられている。そのため、もしこれが会話等で発話された文であれば話者がその瞬間に眠いことを表し、何かに文字で書かれた文であれば筆者がそれを書いた瞬間に眠いことを表す。

### §65.3 動詞を修飾する従属節

動詞を修飾する従属節の基準時間は、親節の基準時間と同一になる。

(1) *folanes a ces bava derexec ogicaz.*

▶ 激しい雨が降っていたにも関わらず、彼は外出した。

(1)では、主節の動詞 *folanes* と *bava* 節の動詞 *derexec* のどちらにも過去時制が用いられている。主節と *bava* 節の基準時間は同じであり、主節の基準時間は文の成立時刻であるから、これは「雨が降っている」と「外出する」がともにこの文が成立するより前の出来事であることを意味している。

なお、例外助接辞が成す接続詞節が動詞修飾形をとって形式上動詞に係っている場合、この接続詞節も動詞を修飾する従属節として扱われ、その基準時間は親節と同一になる。この構文については §100.2 を参照せよ。

### §65.4 動詞以外を修飾する従属節

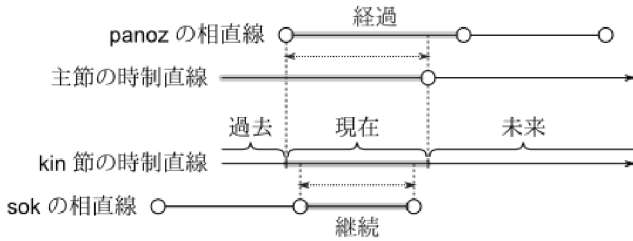
*kin* 節や限定節のような動詞以外を修飾する従属節では、その時制はいわゆる相対時制となる。より厳密には、動詞以外を修飾する従属節の基準時間は、親節において時制と相が表している時間の共通部分となる。

例として以下のような文を考える。

(1) *panozec a ces e kin sokat a's e dol.*

▶ 彼は何も知らないふりをしていた。

(1)の主節の動詞は *panozec* で、過去時制経過相で用いられている。これは、主節の時制直線上で過去時制を表す部分と *panozec* の相直線上で経過相を表す部分が重なっていることを意味する。この関係は、下の図の赤い部分で示した。そして、時制直線と相直線のそれぞれの該当箇所が重なっている部分が、従属節(ここでは *kin* 節)の時制直線で現在時制を表す部分となる。*kin* 節の動詞 *sokat* は現在時制継続相なので、これは、*kin* 節の時制直線上で今定められた現在時制を表す部分と *sok* の相直線上で継続相を表す部分とが重なっていることを意味する。これは図の青い部分で示した。



この図からも分かるように、従属節の親節において時制も相も期間を表しているとき、その従属節では現在時制も期間を表すことになる。したがって、従属節では現在時制無相も現れ得る。

### §65.5 直接話法部

直接話法部では、話したり考えたりされた内容がそのまま引用されるので、必然的にその基準時刻はその発話や思考が行われた瞬間になる。

(1) *reves a ces e «pa zavagac a pas?».*

▶ 彼は「誰が叫んでいるのだろうか?」と思った。

(1)において、直接話法部の動詞 *zavagac* は現在時制であるため、「叫ぶ」は彼が思考している瞬間に行われていることになる。「思考する」を意味する *reves* は主節にあって過去時制で現れているため、思考しているのは文の成立より前の時間であり、したがって誰かが叫んだのも文の成立より前であることになる。

## §66 特筆すべき時制や相の用法

### §66.1 叙述の現在時制

#### §66.1.1 概要

物事を起こった順に記していく叙述的な文章では、主節の基準時間はその文で描写している内容が起こっている時間になる。したがって、基本的には出来事は現在時制で表現される。これを「叙述の現在時制 (narrative present tense)」と呼ぶ。叙述の現在時制が用いられているとき、回想などの描写している内容より前の出来事は過去時制で表され、その時点での未来への予測などは未来時制で表される。

叙述の現在時制は、主に小説や伝記などで現れる。また、通常の会話の中で過去の出来事を物語りに振り返って話すときにも用いられることがある。

#### §66.1.2 無相

無相は動作が始まってから終わるまでの一連の行為を表すが、この意味合いによって、叙述の現在時制が用いられている場面で無相が用いられると、物語中の時間がその動作の完了時点まで進むことになる。これは、叙述の現在時制が用いられてい

る場面だけの無相の特殊な役割である。

例を挙げる。

(1) *lídas ozacàt a ces ca fecaq acik. qòcasas a tel e ces.*

▶ 彼は熱心にその手紙を読んだ。私は彼に呼びかけた。

(2) *lídac ozacàt a ces ca fecaq acik. qòcasas a tel e ces.*

▶ 彼は熱心にその手紙を読んでいた。私は彼に呼びかけた。

(1)では、1文目の動詞 *lídas* が無相になっているので、「彼は読む」という一連の行為が最初から最後まで行われたことを表している。したがって、この時点で物語中の時間が「彼は読む」が完了した時点まで進むので、次の文の「私が彼を呼びかける」という動作が行われるのは、「彼は読む」という動作が完了した後であるということになる。しかし(2)では、1文目の動詞 *lídac* は経過相になっている。そのため、ここで物語中の時間が進んでいるとは限らず、次の「私が彼を呼びかける」という動作が行われたときに、「彼は読む」という動作は完了していないかもしれない。

## §66.2 動作を実際に行う経過相

動詞が表す動作を実際に行う目的で、あたかもその動作がすでに行われている途中であるかのようにその内容が述べられることがある。この表現では、動詞は経過相で用いられる。典型的な例は提案を表す動詞に見られる。

(1) *cayasac a tel e ferac.*

▶ 手伝いますよ。

(2) *cakésac a tel ca loc e rasfot.*

▶ 出かけたらどうですか。

(3) *cipasac a tel ca loc e'n cákis a'c ca sod i tel.*

▶ 私の家に来てください。

感謝や謝罪の表明にもこの表現が使われることがある。間投詞を使うより若干丁寧度が増す。

(4) *haferac ebam a'l ca loc e'n qiniles a'c e cekul i tel.*

▶ 私の鞆を運んでくれて大変ありがとうございます。

# 態

## §67 態

### §67.1 概要

以下の2つの態が区別される。

- ▶ 通常態 (normal voice)
- ▶ 補助態 (adjutative voice)

態は動詞の活用によって示される。詳しくは §35.1 を参照せよ。

続くサブセクションで、それぞれの態の具体的な意味について述べる。

### §67.2 通常態

動詞が通常態で使われている場合、その動詞が本来もっている意味を表す。このときの格組は li 以外の基本助接辞から構成され、動詞によって異なる。例えば、kôm の通常態としての意味は「着る」であり、その格組は a 格と e 格である。

(1) kômes a tel e milef.

- ▶ 私はシャツを着た。

### §67.3 補助態

動詞が補助態で使われている場合は、「通常態の意味の行為を行うのに他者が直接的に補助した」という意味を表す。補助態での格組は、その動詞が通常態として使われたときの格組に li 格を加えたものとなり、この li 句が行為を直接的に補助したものを表す。例えば、kôm の通常態としての意味は「着る」であるため、この kôm が補助態で使われると「着せる」の意味になり、そのときの格組は a 格と e 格と li 格になる。

(1) kômez li tel a qasot e milef.

- ▶ 私は息子にシャツを着せた。

このように、補助態は「～させる」という他動詞的な意味になる。通常態と補助態における格の取り方を比較すると、通常態の「～する」という意味での主語と補助態の「～させる」という意味での補助の対象がともに a 句で表され、補助態の「～させる」という意味での主語が li 句で表されるため、a 格と li 格にはある種の能格

性が見られることに注意せよ。

補助態の li 句に kin 節などのコトが置かれると、その動作の直接的な原因を表す。これは感情動詞でよく見られる。

(2) zidiges a tel li kin ziltisac olov a ces ca tel.

▶ 彼が私をずっとからかっていたのにイライラした。

## §68 補助態と使役表現

deq は動詞として「～させる」の意味をもち、これにより使役が表現される。この使役表現と補助態の意味は明確に異なることには注意すべきである。

例として、次の2つの文の違いを述べる。

(1) kômez li tel a qasot e milef.

▶ 私は息子にシャツを着せた。

(2) deqes a tel e'n kômas a qasot e milef.

▶ 私は息子にシャツを着させた。

(1) では、kôm が補助態で用いられており「着せる」の意味になっている。これは、「何かを着るとい動作が行えるように直接的に補助する」という意味である。一方で (2) では、deq による使役表現が用いられていて、全体で「着させる」の意味になっている。これは、「相手に何かを着よう命じる」ということを意味しており、補助をするという意味合いは全く含まれていない。

# 動詞の特殊表現

## §69 動詞の助動詞的用法

### §69.1 概要

一部の動詞は、その直後に別の節が直接置かれることがある。結果的に動詞が2個連続することになるが、このとき1つ目の動詞が2つ目の動詞の意味を補足する。そのため、この形は「助動詞的用法 (auxiliary use)」と呼ばれる。助動詞的用法をとる動詞は一部に限られており、全ての動詞が助動詞的用法をとるわけではない。

助動詞的用法には2つのパターンがあるため、それぞれについて続くサブセクションで詳しく述べる。

### §69.2 格組が e 格のみの動詞

格組が e 格のみから成っておりその e 格がコトをとるような動詞の一部は助動詞的用法をもつ。そのような動詞が以下の条件を全て満たす形で使われているとする。

- ▶ e 句に kin 節が置かれている
- ▶ e 句以外の修飾語句が存在しない

このとき、その動詞に係っている e 句のうちの e と kin が取り除かれることがある。すると、その動詞の直後に kin 節の中身が直接置かれることになるため、動詞が2つ連続する形ができ、助動詞的用法の形となる。

- (1) dozat e kin lanis a loc te tacál ca kosax.
  - ▶ あなたは明日学校へ行くことをしなければならない。
- (2) dozat lanis a loc te tacál ca kosax.
  - ▶ あなたは明日学校へ行かなければならない。

(1) の dozat が助動詞的用法をとったのが (2) である。(1) において dozat に係っている e 句のうちの e kin の部分が、(2) では消えていることに着目せよ。

### §69.3 格組が a 格と e 格のみの動詞

格組が a 格と e 格のみから成っており e 格がコトをとるような動詞の一部は助動詞的用法をもつ。そのような動詞が以下の条件を全て満たす形で使われているとする。



- ▶ e 句に kin 節が置かれている
- ▶ a 句に置かれている名詞が e 句の kin 節でも使われており主題になっている
- ▶ a 句と e 句以外の修飾語句が存在しない

このとき、その動詞に係っている a 句が消され、さらにその動詞に係っている e 句のうちの e と kin を消されることがある。すると、その動詞の直後に kin 節の中身が直接置かれることになるため、動詞が 2 つ連続する形ができ、助動詞的用法の形となる。

(1) kilat a tel e kin ricamos ovit a tel.

▶ 私は速く泳ぐことができる。

(2) kilat ricamos ovit a tel.

▶ 私は速く泳ぐことができる。

(1) の kilat が助動詞的用法をとったのが (2) である。(1) において kilat に係っている a 句である a tel と、同じく kilat に係っている e 句のうちの e kin の部分が、(2) では消えていることに着目せよ。

#### §69.4 余分な修飾語がある場合

助動詞的用法は、kin 節句の助詞と kin が省略された結果として説明できる。したがって、連続した 2 つの動詞の後に置かれる修飾語句は 2 つ目の動詞に係ることになる。しかししばしば、2 つの動詞の後に置かれる一部の修飾語句が、意味上では 1 つ目の動詞に係ることがある。これは次のように説明することができる。

通常、動詞が助動詞的用法をとる場合、その動詞に基本助詞句以外の修飾語句が係っていることはない。しかし、基本助詞句以外の修飾語句が存在する場合でも、その余分な修飾語句が kin 節内の動詞を修飾していたとして、助動詞的用法の形をとることがある。

(1) vomac otêl a tel e kin teros a tel te lon e korlevim.

▶ 私はしばしば夜にビールを飲む。

(2) vomac teros otêl a tel te lon e korlevim.

▶ 私はしばしば夜にビールを飲む。

(1) の vomac が助動詞的用法をとったのが (2) であるが、(1) では vomac に余計な otêl という修飾語句が係っている。そのため、この otêl が kin 節句内の teros に係っていたものとして、助動詞的用法の形が作られている。このとき、あくまで形式的に otêl が teros に係っていると見なただけであり、意味的にも teros に係っていると解釈されるわけではないことに注意せよ。実際、otêl は「ときどき」の意味で反復の頻度を表す単語であるため、反復を表している vomac に意味的に係っていると解釈しなければ文意が通らない。

## §70 命令表現

### §70.1 構成

命令を表すには、**dit** という特殊な単語が用いられる。**dit** は常に現在時制継続相通常態動詞の **ditat** の形で使われ、**e** 句に命令内容をとる。この **ditat** はほぼ必ず助動詞的用法で使われ、結果的に **ditat** の直後に命令内容となる節が続けられる形になるため、**ditat** という表現が命令マーカーであると考えられることもできる。助動詞的用法については §69 を参照せよ。

命令内容として置かれる節に文法的制約は見られず、あらゆる節が置かれ得る。ただし、ほとんどの場合で、その内容が実際に行われるのは未来であることから未来時制が使われるか、もしくはすぐに実行しろという意味を込めて現在時制開始相が使われる。また、ほとんどの場合で、命令内容には命令対象として **loc** もしくは **zál** が含まれており、**loc** が含まれている場合は話している相手への命令となり、**zál** が含まれている場合は勧誘の意味になる。なお、命令対象を表す名詞が省略されることはない。

- (1) **ditat lanis a'c e zídsax.**  
▶ 学校へ行ってください。
- (2) **ditat sôdis a zál te tazál e sicoller.**  
▶ 明日はラーメンを食べましょう。

未来時制や現在時制開始相が使われなかったり、**loc** や **zál** が含まれていなかったりする命令もあり得る。

- (3) **ditat qetit a xál.**  
▶ 光あれ。
- (4) **ditat sohizes a loc te tazîk.**  
▶ 昨日勉強しておけよ。
- (5) **ditat catos a vas vo talciq i solol.**  
▶ 道路は左側を歩きましょう。

命令内容に否定表現が含まれる場合は、禁止の意味になる。

- (6) **ditat dukûvis a'c ca sokul i tel.**  
▶ 私の部屋に入らないでください。
- (7) **ditat duderexis.**  
▶ 雨よ降るな。

### §70.2 縮約形と丁寧度

**ditat** は縮約形として **di'** をもつ。縮約せずに **ditat** の形で用いられると丁寧な命令と

なり、目上の人や大衆に向けてのお願いをしたり、どうしてもやってほしいことを丁寧に申し込んだりするときに使われる。縮約した *di'* の形で用いると丁寧度が下がり、親しい人や目下の人に向けての命令でよく使われる。

(1) *ditat hilokis a'c.*

▶ 起き上がってください。

(2) *di'hilokis a'c.*

▶ 起き上がって。

口語においては、*ditat* や *di'* すらも省略され、命令内容となる節がそのまま述べられることがある。この表現は乱暴な命令として解釈される。また、緊急時などで少しでも短く命令内容を言いたいときにも使われる。

(3) *duqetanis a'c!*

▶ 動くな!

なお、さらに簡素な命令表現として遊離助詞句によるものがある。この表現の丁寧度はシチュエーションや言い方に依存する。これについては §105.5 で詳しく述べる。

## §71 反復表現

同じ動作が複数回繰り返されることは、*vom* を動詞として用いることで表現される。*vom* は常に動詞として使われ、*e* 句に反復の内容をとる。この *vom* は助動詞の用法で用いられることがほとんどである。

*lof* や *têl* や *dum* などの頻度を表す副詞は、必ず反復表現とともに用いられる。これは、物事の繰り返されていなければその頻度に言及することはできないためだと考えられる。

(1) *vomec lanos olof a tel ca kosxoq .*

▶ 私はよく図書館に行っていた。

習慣も一種の反復なので、反復表現で表される。現在でも続いている習慣は表すときは *vom* が現在時制経過相で使われ、過去に続いていた習慣を表すときは *vom* が過去時制経過相で使われる。

(2) *vomac vilisos a tel te pôd atov.*

▶ 私は毎朝走る。

反復表現は動作の一連の繰り返しを表すが、反復表現が使われていなければ必ず1回の動作のみを表す。すなわち、反復表現は義務的である。一部の表現では、反復表現になっているかなっていないかで大きく意味が変わるので注意せよ。

(3) vomak lîdos a tel te sot e xoq afik.

▶ 私は今この本を読み終えた。

(4) lîdak a tel te sot e xoq afik.

▶ 私は今この本を読み終えた。

(3) は反復の完了を表しているので、「本を読む」という行為が何度か繰り返された中の最後の1回が今終わったことを表す。その時点で反復が完了したと言っているのだから、それ以降その本を読む行為をしないということが暗に示され、結果的に本を最後まで読み切ったというニュアンスが含まれる。一方、(4) は単なる完了相であるから、「本を読む」という1回の行為の完了を表すのみで、それ以外のニュアンスは含まれない。特に、本の一部だけを読んでも「本を読む」という行為は成立するため、後者の文は本を最後まで読み切ったのかどうかを含意しない。



# 連結詞

## §72 連結辞

連結辞は以下の表に示す5つのみであり、全て1つの母音字から成る。o以外の4つの連結辞は「別形 (alternative form)」と呼ばれる子音始まりの形をもち、これに対してもとの形の方は「標準形 (standard form)」と呼ばれる。この違いについては §75 で述べる。

標準形	別形	意味
o		と、そして (並列)
ò	lo	かつ (論理的連言)
é	lé	または (論理的選言)
á	lá	または (選択肢)
à	dà	しかし (逆説)

連結辞に含まれるダイアクリティカルマーク付きの母音字は発音の例外である。詳しくは §11.2 を参照せよ。

## §73 連結詞の用法

### §73.1 総論

連結詞は、語句や節の間に置かれてその語句や節を対等な関係で結ぶ。連結詞は、文法的な役割が同じであればあらゆる語句や節を繋げるが、文法的な役割が異なる語句を繋げることはない。

- (1) cikekat a tel e dev o miv.  
▶ 私はペンと紙を持っている。
- (2) pa qolkevat e talemçik abik é anám?  
▶ 青か緑のハンカチは売っていますか?
- (3) debat ò dojat a tel.  
▶ 私は疲れているしつらい。

連結詞は3つ以上の語句や節を繋ぐこともでき、そのとき連結詞は繋がれている語句や節の間の全てに置かれる。例えば、連結詞が3つの語句を繋げている場合は、その連結詞は1つ目と2つ目の間および2つ目と3つ目の間の両方に置かれる。タ

デッキなどの他の記号で代用されることはない。

(4) fesalat a tel e milef o hâl o desek acac.

▶ 私は新しいシャツとスカートと靴が欲しい。

連結詞が節を繋いでいる場合は、連結詞の直前にタデッキが置かれる。繋がれている節がともに短い場合などでは、このタデッキは省略されることがある。

(5) kavat a tel e xoq avôi, dà dulîdes a tel e met arak.

▶ 私はたくさんの本を持っているが、どれも読んだことがない。

### §73.2 修飾語句が ò で繋がれる場合

形容詞句や副詞句のように他の単語を修飾する語句は、ò で繋がれることが少ない。これは、ò で繋げなくとも単に並べるだけで同じ意味の表現にできるからだと考えられる。

(1) sôdac a ces e malek amay ò asaret.

▶ 彼は甘くておいしい飴を食べている。

(2) sôdac a ces e malek amay asaret.

▶ 彼は甘くておいしい飴を食べている。

(1) では、amay と asaret が ò で繋がれて「甘くておいしい」という形容詞句を構成しており、それが malek を修飾して「甘くておいしい飴」という表現が成立している。しかし、(2) のように、amay と asaret を順番に malek に修飾させることでも、「甘くておいしい飴」を表現することができる。(2) の方が簡潔であるため、こちらの方が好まれる。

なお、形容詞句が叙述的に使われている場合は、単に並べることが文法的に許されていないため、ò で繋げる必要がある。

(3) salat a malek afik e amay ò asaret.

▶ この飴は甘くておいしい。

## §74 o と ò の使い分け

### §74.1 総論

o は前後に置かれたもの両方の集まりを表すのに対し、ò は前後に置かれた条件をともに満たすことを表す。すなわち、o は物の並列を表し、ò は条件の論理的連言(論理積)を表す。o は物の並列なので、原則として前後に置かれるのは名詞句や kin 節のみである。しかし、次のサブセクションで述べるように、o が名詞を連結している表現の言い換えとして、o が構文上は形容詞や節を連結する場合がある。一方、ò は様々な文法的品詞の語句を連結する。

続くサブセクションで、o や ò が連結する単語の文法的品詞別に、その使い分けと意味について詳しく述べる。

### §74.2 名詞句を繋ぐ場合

名詞句が o で連結された場合、繋がれている名詞句それぞれが表すものの集まりを表す。

(1) *kocaqat vo nasfek a milcat o monaf.*

▶ 庭にはペットと猫がいる。

(1) では、*milcat* と *monaf* が o で繋がれているので、何匹かのペット (名詞に単複の区別がないので複数の場合があることに注意) と何匹かの猫から成る集まりが庭にいることを表している。別の言い方をすれば、庭には少なくとも 2 匹の動物がいて、その一方はペットであり、もう一方は猫であるということになる。さらに、ペットである方の動物は猫であるとは限らないし、猫である方の動物はペットであるとも限らない。

名詞句が ò で連結された場合は、繋がれている名詞句それぞれであるための条件を全て満たしているものを表す。

(2) *kocaqat vo nasfek a milcat ò monaf.*

▶ 庭にはペットの猫がいる。

(2) では、*milcat* と *monaf* が ò で繋がれているので、ペットであってかつ猫であるようなものが庭にいることを表している。したがって、庭にいる動物は 1 匹の可能性がある。

名詞句が ò で繋がれている形は、肯定形と否定形の名詞が ò で繋がれた「～であって～ではない」を意味する表現でよく見られる。

(3) *sâfat a tel e sakil ò dulesit.*

▶ 私が好きなのはリンゴであってミカンではない。

### §74.3 形容詞句を繋ぐ場合

形容詞句が o で連結されて名詞を修飾している場合、それ全体で、繋がれた片方の形容詞句の内容を満たす名詞ともう一方の形容詞句の内容を満たす名詞の両方から成る集まりを表す。すなわち、名詞 *S* と形容詞句 *T, D* に対し、形容詞句 *T o D* を名詞 *S* に修飾させた *S T o D* という形は、2 つの名詞句 *S T, S D* が o で繋がれた *S T o S D* と同じ意味になる。なお、形容詞が o で繋がれた形は、名詞を修飾する形でしか使われず、*sal* に係る *e* 句や *se* 句の補語などでは使うことはできない。

(1) *kûtat a ces e cekul axac o atik.*

▶ 彼は白い鞆と小さい鞆を持っている。



(2) kûtat a ces e cekul axac o cekul atik.

▶ 彼は白い鞆と小さい鞆を持っている。

(1) と (2) は同じ意味になり、(1) は (2) を短く言い換えた形と見なすことができる。どちらの文も、白い鞆と小さい鞆の両方の集まりを持っていることを表しているので、少なくとも2つの鞆を持っていることになる。さらに、白い方の鞆は小さいとは限らず、小さい方の鞆は白いとは限らない。

形容詞句や副詞句が *ò* で連結されている場合は、繋がれている形容詞句が表す性質を全て満たしているという意味になる。

(3) kûtat a ces e cekul axac ò atik.

▶ 彼は白くて小さい鞆を持っている。

(3) にある *axac ò atik* という形容詞句は、*axac* と *atik* のそれぞれの意味である「白い」と「小さい」をともに満たすことを表す。したがって、文全体としては、白くてかつ小さい鞆という1種類のものを持っていることを言及しているに過ぎず、鞆を1つしか持っていない可能性がある。

なお、(3) にあるような *ò* で繋がれた形容詞が名詞を修飾する形は、形容詞を名詞の後に単に並べる形で代用されることが多いため、稀である。これについては §73.2 も参照せよ。

## §74.4 副詞句を繋ぐ場合

副詞が *o* で連結されることはない。

副詞が *ò* で連結されている場合は、繋がれた2つの副詞句が表す性質をともに満たしているという意味になる。

(1) qiniles a tel e rikel acik omêl ò okosiz.

▶ 私はその瓶をゆっくりと丁寧に運んだ。

なお、(1) にあるような *ò* で繋がれた副詞の形は、副詞を単に並べる形で代用されることが多いため、稀である。これについては §73.2 も参照せよ。

## §74.5 節を繋ぐ場合

節が *o* で繋がれるのは *kin* 節の中だけである。*kin* 節の中で節が *o* で繋がれると、繋がれた片方の節を単独で *kin* 節にしたものともう一方の節を単独で *kin* 節にしたものの両方から成る集まりを表す。すなわち、節 *S*, *T* に対し、*kin* 節の中で *S* と *T* を繋げた *kin S o T* という形は、2つの *kin* 節である *kin S*, *kin T* を *o* で繋げた *kin S o kin T* と同じ意味になる。

(1) qifat vo fêd e kin yepelos a vas o ritasos a ces.

▶ ここでは歌ったり踊ったりすることができる。

(2) qifat vo fêd e kin yepelos a vas o kin ritasos a ces.

▶ ここでは歌うことと踊ることをすることができる。

(1) と (2) は同じ意味になり、(1) は (2) を短く言い換えた形と見なすことができる。どちらの文も、歌うことと踊ることという 2 種類の行為が可能であることを表している。

節が ò で連結されている場合、繋がれた 2 つの節の内容がともに成立することを表す。こちらの形は kin 節の中以外でも現れる。

(3) qifat vo fêd e kin yepelos a vas ò ritasos a ces.

▶ ここでは歌って踊ることができる。

この例では、「歌う」と「踊る」という 2 つの節が ò で繋がれているので、その両方が成立する「歌っていてかつ踊っている」という 1 種類の行為が可能であることを表している。したがって、単に歌うだけは許されていないかもしれない。

## §75 標準形と別形の使い分け

### §75.1 概要

標準形と別形の大きな違いは、別形は節を繋いでいる場合にのみ現れるという点である。連結詞が語句と語句を繋ぐ場合は、必ず標準形の方が用いられ、別形が用いられることはない。

(1) sâfat a tel e sakil o lesit.

▶ 私はリングとミカンが好きだ。

(2) salet e ayefex à axodol ebam a soki q fesalat e a tel.

▶ 私が欲しかった時計は魅力的だがとても高価だった。

一方で、連結詞が節と節を繋ぐ場合は、標準形も別形も用いられる。

(3) zavages a tel e kofet i ces, à duqifet qeritas a ces e cit.

▶ 私は彼の名前を叫んだが、彼にはそれが聞こえなかった。

(4) zavages a tel e kofet i ces, dà duqifet qeritas a ces e cit.

▶ 私は彼の名前を叫んだが、彼にはそれが聞こえなかった。

ただし、節を繋いでいる場合では、標準形より別形の方が頻繁に使われ、特に主節では別形の方が圧倒的に好まれる。また、副詞的に用いられるときは常に別形が使われる。従属節内で節を繋いでいる場合は、§75.2 で述べるように標準形か別形かで解釈の違いが生じることがあるため、適切な方が選ばれる。

## §75.2 意味の違いが生じる場合

標準形は語句同士を繋げることが多く、したがって繋ぐものは比較的短い傾向にある。一方、別形は節同士を繋ぐときのみ使われるので、必然的に繋ぐものは数単語ではなく長くなる。このような使われ方の違いによって、初めから、標準形が繋ぐものは短い語句や節であり、別形が繋ぐものは長い節であると解釈される傾向にある。これがしばしば意味の違いを生む。

例として、以下の2つの文を考える。2つの文で異なる点は、使われている連結詞が標準形の *ò* か別形の *lo* かだけである。

(1) *salat onalef e adupadit a kin kocaqat a socav ayerif aquk, lo kocaqat vo cêd a bunlohis etut.*

▶ あの美しい顔が存在することなど当然あるはずがなく、ただ蚊だけがそこにいた。

(2) *salat onalef e adupadit a kin kocaqat a socav ayerif aquk, ò kocaqat vo cêd a bunlohis etut.*

▶ あの美しい顔が存在することもただ蚊だけがそこにいるということも、当然あるはずがない。

ここで、(1)と(2)のそれぞれにおいて連結詞が何と何を繋げているかを考察する。まず、(1)では別形である *lo* が用いられているので、比較的長いものが接続されていると解釈される。したがって、*lo* が接続するのは、*lo* より前にある節全体 (*salat* ~ *aquk*) と *lo* より後にある節全体 (*kocaqat* ~ *etut*) であると解釈されやすい。このとき、主節の *a* 句にある *kin* 節は *aquk* までとなるので、例文で「あり得ない」と述べているのは「あの美しい顔が存在すること」であるということになる。

一方、(2)では標準形である *ò* が用いられているので、比較的短いものが繋がれていると解釈される。したがって、*ò* が接続するのは、*kocaqat* から *aquk* までの節と *kocaqat* から *etut* までの節であると解釈されやすい。つまり、主節の *kin* 節は最初の *kocaqat* から文末までとなるので、「あり得ない」と述べているのは「あの美しい顔が存在して蚊だけが存在すること」であるということになる。

# 接続詞

## §76 接続詞節の構成

接続詞は直後に節を伴って接続詞節となり、他の語句を修飾する。このとき、接続詞節の修飾を受ける語句を直接含む節のことを「被修飾節(modified clause)」と呼ぶ。

接続詞節が修飾する語句の種類については§77で詳しく述べる。

## §77 接続詞の種類と修飾

### §77.1 一般助接辞の動詞修飾形

一般助接辞の動詞修飾形が接続詞として接続詞節を成しているとき、その接続詞節は動詞を修飾する。詳細な用法の説明は§78に譲る。

### §77.2 一般助接辞の非動詞修飾形

一般助接辞の非動詞修飾形が形成する接続詞節は、次のいずれかの場合でのみ現れる。いずれの場合も、動詞修飾形が形成する接続詞節を用いた表現からの言い換えとして説明できる。

- ▶ 動詞型不定辞の名詞用法に係る場合 (§28.1 参照)
- ▶ 限定節の動詞が省略された場合 (§101 参照)

### §77.3 例外助接辞の動詞修飾形

例外助接辞は基本的に非動詞修飾形で使われるため、原則として例外助接辞の動詞修飾形は現れない。しかし、例外助接辞の非動詞修飾形が接続詞として使われていた状態から、その接続詞節が主節の動詞を修飾する形に言い換えが行われることがあり、そのときは例外助接辞の動詞修飾形が現れる。これについて詳しくは§100.2で述べる。

### §77.4 例外助接辞の非動詞修飾形

例外助接辞が接続詞として使われるときは原則として非動詞修飾形として用いられる。このときに構成される接続詞節、その例外助接辞に応じて動詞以外の特定の種類の語句を修飾する。

## §78 動詞修飾形の接続詞

### §78.1 総論

助接辞の動詞修飾形が接続詞として使われている場合、その接続詞節は動詞を修飾する。ただし意味的には、接続詞節は動詞を修飾しているというより被修飾節全体を修飾していると解釈した方が適切な場合が多い。

助接辞の動詞修飾形が成す接続詞節は、被修飾節の前か後ろに置かれる。接続詞節が被修飾節の前に置かれているときは、接続詞節の終わり(すなわち被修飾節の直前)にタデックが置かれる。接続詞節が被修飾節の後ろに置かれているときは、接続詞節の直前(すなわち被修飾節の終わり)にタデックが置かれるが、接続詞節と被修飾節がともに短い場合はタデックが省略されることがある。

(1) *kavat a tel e xoq avôl, vade sêfat a tel e met.*

▶ 私はたくさんの本を持っているが、それは私が本を好きだからだ。

(2) *ri derexic te tacâl, dudozit cåkas a loc ca fêd.*

▶ もし明日雨が降っていたら、ここに来る必要はない。

(3) *déxet a ces fa déqet a's ca dezet.*

▶ 彼女は椅子に座って寝ていた。

(1)は接続詞節が被修飾節の前に置かれている例で、(2)は被修飾節の後ろに置かれている例である。(3)は接続詞節が被修飾節の前に置かれているが、タデックが省略されている。

### §78.2 接続詞節を修飾する語句

特殊詞は接続詞節全体を修飾することがある。このとき、その特殊詞は接続詞の直後に置かれる。

(1) *kômot a ces e levlis, te edif ricamos a ces.*

▶ 彼は泳ぐときでさえも眼鏡をかけている。

### §78.3 接続詞節内の時制の基準

助接辞の動詞修飾形が接続詞として使われているときは、その接続詞節の時制の基準は被修飾節と同じであり、主節の時制に依存しない。詳細は§65.3を参照せよ。

## §79 非動詞修飾形の接続詞

### §79.1 総論

助接辞の動詞修飾形が接続詞として使われている場合、その接続詞節は動詞以外の語句を修飾する。このとき、その接続詞節は被修飾語の直後に置かれる。

(1) *salot a dev e zat iso kôdos a vas e lakad.*

▶ ペンは文字を書くためのものだ。

(1) では、*iso* 以下が接続詞節となっており、*zat* を修飾している。

## §79.2 接続詞節内の時制の基準

助接辞の非動詞修飾形が接続詞として使われているときは、その接続詞節の時制の意味は被修飾節の時間に対して相対的に決まる。詳細は §65.4 を参照せよ。



# kin 節

## §80 kin 節

### §80.1 構成

kin の後ろに節が続けられると、全体で「～ということ」という意味になる。このときにできる〈kin + 節〉の形を「kin 節 (kin-clause)」と呼び、kin 節を補語とする助詞句をしばしば「kin 節句 (kin-clausal phrase)」と呼ぶ。ここで現れる kin は、この用途のための特殊な単語であり、しばしば「節化機能辞 (clausal functional)」と呼ばれる。

kin 節は名詞のように扱われ、文中では常に助詞を伴って現れる。

(1) *salot e asas a kin feraces a ces ca fax.*

▶ 彼が母親を手伝ったのは良いことだ。

(1) では、*feraces* 以下の節が kin の後に置かれて kin 節を構成しており、その kin 節は名詞と同様に a 句となって文の主語になっている。

kin 節の中身が長い場合、kin の直後にタデックが置かれることがある。特に kin 節の中身が複文になっている場合は、kin の直後にタデックが置かれることが多い。

(2) *revat a tel e kin, te câses a'l e ces, savet nicasos a'l ca's e litéz.*

▶ 彼に会ったときに傘を渡すべきだったと思った。

### §80.2 kin 節を修飾する語句

特殊詞は kin 節全体を修飾することがある。このとき、その特殊詞は kin 節の直後に置かれる。

(1) *haroz a tel li kin etut yepelos a'l.*

▶ 私の気分を良くするのは歌うことだけだ。

(1) では、*etut* が kin の直後に置かれて kin 節全体を修飾し、「歌うことだけ」という意味になっている。

### §80.3 kin 節内の時制の基準

kin 節内での時制の意味は被修飾節の時間に対して相対的に決まる。詳細は §65.4 を参照せよ。





# 限定節

## §81 限定表現

### §81.1 総論

「私が昨日会った男性」のように、節が名詞句を直接修飾していて、被修飾語となる名詞句がその節の中でも参照されているような表現を、「限定表現 (relative expression)」と呼ぶ。限定表現において、名詞を修飾している節は「限定節 (relative clause)」と呼ぶ。

限定表現は、修飾する節の中で被修飾語を指している部分を **cok** という特殊な単語で置き換え、その節を被修飾語の直後に置くことで作られる。関係詞に相当する単語は存在しない。

以下、例として「私が昨日会った男性」という表現の構成について述べる。これは、「男性に私は昨日会った」という節が「男性」に修飾してできる限定表現である。「男性に私は昨日会った」を表す文は次の通りである。

(1) *câses e qazek a tel te tazît.*

▶ 男性に私は昨日会った。

ここから被修飾語と同じものを指している部分を **cok** に置き換えることで限定節が作られる。さらに、その限定節を被修飾語の直後に置くことで、全体で限定表現となる。今扱っている例では、*qazek* を **cok** に置き換え、できた節を改めて *qazek* の直後に置けば、「私が昨日会った男性」という表現になる。

(2) *salat a qos e qazek câses e cok a tel te tazît.*

▶ あの人は私が昨日会った男性だ。

限定節に現れる **cok** はその限定節の被修飾語のことなので、必然的に旧情報となる。したがって、助詞句の順序の慣習に従って、**cok** を含む動詞修飾の助詞句は動詞の直後に置かれることがほとんどである。助詞句の順序については §44.1 を参照せよ。

限定節に現れる **cok** はほぼ必ず省略され、結果的にその箇所は名詞を伴わない助詞が単独で現れる形になる。

(3) *salat a qos e qazek câses e a tel te tazît.*

- ▶ あの人は私が昨日会った男性だ。

ただし、*cok* が省略されない形が現れることもある。概ね、そこが限定節であることが分かりにくい場合と *cok* を省略すると語調が崩れる場合に、*cok* が省略されず残ることが多い。§82 でそのような場合が起こる典型的な状況について詳しく述べる。

限定節内での *cok* の位置に制約は見られず、*cok* が限定節での修飾関係の深い位置にあることもある。

(4) *sokat a tel e tiqat salat a qâz i e cossâc.*

- ▶ 私は父親が教師である少年を知っている。

(5) *sokat a tel e tiqat salat a qâz i e cossâc.*

- ▶ 私は父親が教師である少年を知っている。

(4) では、(省略されている) *cok* は限定節の動詞 *salot* に係る *a* 句の中にあるが、*a* の直接の補語にはなっておらず、*a* の直接の補語である *qâz* をさらに修飾する *i* の補語となっている。

## §81.2 限定節内の時制の基準

限定節内の時制は、被修飾節の時間に対して相対的に決まる。例えば、主節が過去時制で限定節が現在時制ならば、限定節は過去における現在を表すので、過去に起こった出来事であるということになる。詳細は §65.4 を参照せよ。

§82 限定表現で *cok* が省略されない状況§82.1 *cok* を含む助詞句が限定節末にある場合

*cok* が限定節の最後に置かれている場合、*cok* は省略されずに残る方が自然である。これは、節の最後が母音になることが稀であるため、そのような聞き慣れない語調が生じるのを防ぐためだと考えられる。この場合の *cok* は、縮約形の 'k になることが多い。なお、*cok* を含む助詞句は限定節内でできるだけ前に置かれるのが普通なので、このパターンが起こるのは限定節内に *cok* を含む助詞句以外の助詞句が存在しない場合がほとんどである。

(1) *pavafac a tel e zis palanat a'k.*

- ▶ 私は暇な人を探している。

限定節の動詞が *kéc* などの発言を表すもので、発言内容を表す *e* 句が文から遊離している場合にも、このパターンが生じる。

(2) *lices a tel te tazît vo naflat e loc, zavagac a'k. «zedat duficavis a'l ca xod afik!»*

- ▶ 私は昨日公園で次のように叫んでいるあなたを見た。「私はこの世界を許さない!」と。

### §82.2 *cok* が限定節内に2つ以上現れる場合

限定節内に被修飾語を表す名詞句が複数個現れており、結果的に限定節内に *cok* が複数個現れる場合、2個目以降の *cok* は省略されないのが普通である。これは、*cok* が省略された結果生じる単独の助詞は限定節の動詞の直後で見られるのが普通であるため、それ以外の箇所でも単独の助詞が現れて語調が崩れるのを防ぐためだと考えられる。

(1) *qetat vo qôd a zis qolkevat a e xoq i cok.*

- ▶ あそこに自分の本を売っている人がいる。

(2) *salat a qos e fér lices e o fax i cok a tel vo naflat.*

- ▶ あれは、その少女とその母親を私が公園で見たとこころの少女だ。

### §82.3 1つの名詞に2つ以上の限定節に係る場合

1つの名詞に2つ以上の限定節に係る場合、2つ目以降の限定節中の *cok* が省略されないことがある。これは、2つ目の限定節が独立した文だと思われることを防ぐためだと考えられる。ただし、1つの名詞に2つ以上の限定節を修飾させなければならないような表現は通常避けられるので、このパターンは稀にしか見られない。

### §82.4 詩歌で限定節と被修飾語が分かれている場合

詩歌においては、あるフレーズの最後に限定節の被修飾語が置かれ、次のフレーズが限定節の本体になっているという構成がしばしば見られる。このとき、限定節の *cok* が省略されずに残ることがある。これは、詩歌におけるフレーズの区切りは文末なのか文中の区切りなのか明白でない場合が多いので、あるフレーズが独立した文ではなく限定節であることを明示するためだと考えられる。



# 優劣表現

## §83 優劣表現

### §83.1 概要

「*S*は*Z*より*T*である」のように、2つの対象*S*と*Z*をある基準*T*で比較して*S*の方が甚だしいことを表す表現を「優劣表現 (comparative expression)」と呼ぶ。ここで、*T*に相当する単語は比較可能な動詞型不定辞でなければならない。

優劣表現では、比較対象を表すために例外助接辞の *ni* が使われる。この *ni* は、接続詞として用いられて *ini* 節となる場合と、助詞として用いられて *ini* 句となる場合がある。一般に、文構造が簡潔になる *ini* 句による優劣表現の方が好まれ、*ini* 節による優劣表現はそれほど多くは見られない。ただし、*ini* 節による方法でのみ可能な優劣表現もある。これについては §84.2 で取り扱う。

続くサブセクションでそれぞれの場合について詳しく述べる。

### §83.2 *ini* 節による構成

*ini* 節が用いられた優劣表現は、比較内容を表す動詞型不定辞に *emic* が修飾し、そこに *ini* 節が修飾する形になる。

(1) *salat a sakil e asaret emic ini salat a lesit e asaret.*

▶ ミカンがおいしいのよりリンゴはおいしい。

(1) は、以下の2つの独立した文から作られたと考えることができる。

(2) *salat a sakil e asaret.*

▶ リンゴはおいしい。

(3) *salat a lesit e asaret.*

▶ ミカンがおいしい。

まず、(2) において比較内容を表している *asaret* に *emic* を修飾させる。次に、この *emic* に対して、(3) を内容とする *ini* 節を修飾させる。このようにすると (1) が作られる。

一般に、*ini* 節による優劣表現は、全てこの手順で作られたものだと説明できる。すなわち、「*S*は*Z*より*T*である」を表す優劣表現は、比較対象となる *S* と *Z* について独立に記述した文から始めて、以下の手順で作られたと見なせる。

- ▶ Sに関する文にある比較内容を表す動詞型不定辞に **emic** を修飾させる
- ▶ Zに関する文を ini 節とする
- ▶ この ini 節を最初の **emic** に修飾させる

この手順によって作られた優劣表現は、主節と ini 節で共通の語句が使われていて冗長であることが多いため、代動詞の I を使うなどして語句の繰り返しが避けられる。代動詞については §118.3 で詳しく述べる。

(4) **salat a sakil e asaret emic ini lat a lesit.**

- ▶ ミカンがそうであるのよりリンゴはおいしい。

(4) は、(1) と同じ内容を述べている。主節と ini 節の両方に **salat e asaret** という表現が現れているため、ini 節にある方が **lat** に置き換えられて、繰り返しが避けられている。

比較内容を表す形容詞は、限定的用法でも叙述的用法でも現れる。また、比較内容を表す単語としては、形容詞に限らず副詞や動詞なども見られる。以下に、参照用に優劣表現の例をいくつか挙げておく。

(5) **dulices a tel e zis alot emic ini hinof i tel.**

- ▶ 私は自分の姉より背が高い人を見たことがない。

(6) **dêbat emic a tel te sot ni let te tazît.**

- ▶ 私は今は昨日より疲れている。

### §83.3 ini 句による構成

ini 句が用いられた優劣表現は、比較内容を表す動詞型不定辞に **emic** が修飾し、そこに ini 句が修飾する形になる。これは、ini 節による優劣表現を短く言い換えた形として説明できる。具体的には、ini 節による優劣表現において、ini 節に含まれる名詞句 1 つだけを提示するだけでも ini 節の内容が十分伝わると考えられる場合に、ini を助詞として用いて ini の後にその名詞を続けることで、ini 句による優劣表現が得られる。

(1) **salat a sakil e asaret emic ini lesit.**

- ▶ リンゴはミカンよりおいしい。

(2) **salat a sakil e asaret emic ini lat a lesit.**

- ▶ ミカンがそうであるのよりリンゴはおいしい。

(1) は ini 句による表現で、(2) は ini 節による表現であるが、どちらも意味は同じである。この場合、比較対象を表現するために、「ミカンがおいしいのより」という節を使わなくとも「ミカン」という名詞だけ提示すれば十分だと考えられるため、(1) への言い換えが可能になっている。

### §83.4 比較対象がない場合

比較対象を表す ini 節や ini 句が存在せず、比較内容に emic が係っているだけの表現が見られることがある。この場合、文脈などで比較対象が想定されるか、漠然とした比較を意味する。特に、そのときの状況との比較になることが多い。

(1) ditat catis a'c omêl emic.

▶ もう少しゆっくり歩いてください。

## §84 優劣表現に関する特筆事項

### §84.1 ini 句による表現で曖昧性が生じる例

ini 句による優劣表現では、ini 節による表現と比べて比較対象が曖昧になる可能性がある。

例えば、以下の優劣表現を考える。

(1) yisat emic a tel e 'xastil ni yisat a tel e 'yutih.

▶ 私がユティアを好きなよりも私はシャスティルが好きだ。

(1) は、「私がシャスティルのことを好き」の度合いと「私がユティアのことを好き」の度合いを比較して、前者の方が甚だしいことを意味している。これは、私が相手のことを好きな度合いに関してシャスティルとユティアを比較しているとも考えられるため、ini 節から 'yutih だけを抜き出すことで ini 句による表現に言い換えられ得る。

(2) yisat a tel e 'xastil ovel emic ini 'yutih.

▶ 私がユティアよりシャスティルが好きだ。

一方で、以下の優劣表現も考える。

(3) yisat emic a tel e 'xastil ni yisat a 'yutih e 'xastil.

▶ ユティアがシャスティルを好きなよりも私はシャスティルが好きだ。

(3) は、「私がシャスティルのことを好き」の度合いと「ユティアがシャスティルのことを好き」の度合いを比較している。これは、誰かがシャスティルのことを好きな度合いに関して私とユティアを比較しているとも考えられるため、ini 節から 'yutih だけを抜き出すことで ini 句による表現に言い換えられ得る。

(4) yisat a tel e 'xastil ovel emic ini 'yutih.

▶ 私がユティアよりシャスティルが好きだ。

(2) と (4) は全く同じ文である。したがって、この文は (1) と同じ意味であるのか (3) と同じ意味であるのか曖昧であり、どちらであるかは文脈から判断する他ない。

一般に ini 句による短い表現の方が好まれるため、比較対象が曖昧にはなるものの



(2) や (4) のような表現の方がよく用いられる。ただし、どちらであるかを明確に区別するために、(1) や (3) のような表現が用いられることはある。そのときは、ini 節で代動詞が用いられて、以下のような形になることも多い。lat の後の助詞に注目せよ。

(5) yisat a tel e 'xastil ovel emic ini lat e 'yutih.

▶ 私がユティアを好きなのよりも私はシャスティルが好きだ。

(6) yisat a tel e 'xastil ovel emic ini lat a 'yutih.

▶ ユティアがシャスティルを好きなのよりも私はシャスティルが好きだ。

## §84.2 ini 句による表現にできない例

ini 節による優劣表現は、多くの場合で ini 句による優劣表現に置き換えることができる。ini 句による表現の方が簡潔なため、一般に ini 句による表現の方が好まれて頻度も高い。しかし、一部の ini 節による優劣表現は ini 句による表現に置き換えられないことには注意すべきである。なお、ini 句による優劣表現への言い換えについては §83.3 を参照せよ。

例えば、以下の優劣表現を考える。

(1) salat a sakil acik e avaf emic ini pafises a tel e'n lat.

▶ 私が想像したのよりもそのリンゴは大きい。

(1) は、実際のリンゴの大きさと想像のリンゴの大きさを比較している。比較対象が「私とそのリンゴがどのくらい大きさを想像した」という動詞的な内容になっているので、ここから代表的な名詞句を1つ取り出すことはできない。したがって、ini 句を用いた表現に置き換えることはできない。

なお、日本語では「想像より大きい」のように「想像」という名詞が比較対象にされることがあるが、「想像(そのもの)の大きさ」と「リンゴの大きさ」の比較ではないので、この日本語の表現を直訳することはできない。

比較対象を1つの名詞句だけで表現できない他の例としては、以下のようなものが挙げられる。

(2) di'sôdis a'c e sakil afik otív evêl ini kilat a'c e'n las.

▶ できるだけ早くこのリンゴを食べなさい。

## §85 優劣表現での差異の表現

### §85.1 構成

優劣表現において、比較対象となる2つのものの差がどのくらいなのかは、助節辞の le の非動詞修飾形によって明示される。優劣表現における le の用法についての詳

細は §97.4.1 を参照されたい。

(1) *salat a sakil afik e avaf emic ile mulôt 7 ini sakil aquk.*

▶ このリンゴはあのリンゴより 7 cm 大きい。

(2) *salat a kèl afik e avaf emic ile vâl ayos ini kèl aquk.*

▶ この箱はあの箱より 3 倍大きい。

差異が倍数で表されているときの意味には注意せよ。例えば、(2) では差異が 3 倍だと述べられているため、「この箱」の大きさは「あの箱」の 4 倍となる。なお、程度の差異を倍数で表す方法としては、比較表現より同等表現を用いた形の方が好まれる。同等表現における倍数については §97.4.2 を参照せよ。

## §85.2 差異の基準

### §86 逆の優劣表現

優劣表現において *mic* の代わりに *dès* が用いられると、主節にある比較対象の方が逆に程度が劣っていることを表す。*dès* による優劣表現では、*mic* が *dès* に変わっていること以外、可能な構文に違いは見られない。

(1) *salat a sakil e asaret edès ini lesit.*

▶ ミカンほどリンゴはおいしくない。

(2) *salat a ces e alinsiref edès ini les te zîk.*

▶ 彼女はかつてほどおとなしくない。



# 同等表現

## §87 同等表現

### §87.1 概要

「*S*は*Z*と同じくらい*T*である」のように、2つの対象*S*と*Z*をある基準*T*で比較して両者が同等程度に甚だしいことを表す表現を「同等表現 (equative expression)」と呼ぶ。ここで、*T*に相当する単語は比較可能な動詞型不定辞でなければならない。

同等表現には、比較対象を表すために例外助接辞の *ni* が使われるものと、比較対象が並列されるものの2種類がある。この *ni* の使われ方は、優劣表現と全く同じである。

### §87.2 *ini* 節や *ini* 句による構成

*ni* が用いられた同等表現では、比較内容を表す動詞型不定辞に *evêl* が修飾し、そこに *ini* 節か *ini* 句のいずれかが修飾する形になる。比較内容を意味する単語に修飾する単語が *emic* ではなく *evêl* である点を除き、同等表現の構文や性質は優劣表現と同じである。そこで、ここではいくつか例文を挙げるに留める。詳しい構文などについては §83.2 や §83.3 を参照せよ。

(1) *salat a ces e atay evêl ini qaled i tel.*

▶ 彼は私の弟と同じくらい若い。

(2) *pa qetat a celet avâc ini fit?*

▶ これと同じくらいの大きさのノートはありますか？

*ni* を用いた同等表現では、主節にある比較対象の方に焦点が当てられ、それが *ni* 句や *ni* 節で表された比較対象と同程度だと説明しているというニュアンスがある。

### §87.3 *ni* を用いない構成

比較対象全体を示す表現が含まれている節においては、比較内容を表す動詞型不定辞に *evêl* が修飾するだけでも、同等表現が作られる。この形式で比較対象を示す箇所は、複数の名詞句が *o* で並列された形になることが多いが、そうでないこともある。どちらの場合でも、比較対象を示す箇所は、意味上もしくは文脈上で複数であることが分かる表現になっている。

(1) salat a sokiq afik o yelicnelas afik e axodol evêl.

▶ この腕時計とこのネックレスは同じくらい高価だ。

(2) debat evêl a tel o ces.

▶ 私と彼は同じくらい疲れている。

(3) zetîdat evêl a voston aves qetat a vo fecil ica fêd.

▶ この辺りにあるレストランはどれも同じくらい混んでいる。

ここで述べた形式の同等表現では、両方の比較対象に等しく焦点が当てられる。

なお、この形式の同等表現は、ini cāv が省略された ini 句による同等表現であるとも解釈できる。

## §88 同等表現での倍数の表現

同等表現において、evêl に〈ile vâl + 数辞〉の形が修飾していると、比較対象となる2つのものの程度の差を倍数で明示される。このとき、比較対象の程度はもはや同じくらいではないので「同等表現」とは言い難いが、同等表現と同じ構文が用いられるため同等表現の一種と見なす。この表現についての詳細は §97.4.2 を参照されたい。

(1) zèvofes a tel te lôk avôl evêl ile vâl aqec ini ces.

▶ 私は彼の2倍の時間勉強した。

# 最上表現

## §89 最上表現

### §89.1 概要

ある範囲の中で比較してあるものが最も甚だしいことを表す表現を「最上表現 (superlative expression)」と呼ぶ。ここで、比較内容を表す単語は比較可能な動詞型不定辞でなければならない。

なお、最上表現はあくまで特定のものが最も甚だしいことを表すのみで、意味の強調には用いられない。

### §89.2 構成

最上表現は、比較内容を表す動詞型不定辞に **ehiv** が修飾し、そこに **ive** 句が修飾する形になる。ive 句は比較の範囲を表す。

(1) kilat vilisos a fes ovit ehiv ive refet i tel.

▶ この人は私の友達のうちで最も速く走ることができる。

### §89.3 比較範囲がない場合

比較の範囲を表す **ive** 句が存在せず、比較内容に **ehiv** が係っているだけの表現が見られることがある。この場合は、文脈などで比較範囲が想定されたり、あらゆるものが比較範囲になったりする。

## §90 順位の表現

最上表現において、**ehiv** に〈ile cav + 数辞〉の形が修飾していると、比較範囲内での順位が明示される。このとき、主となる比較対象の程度はもはや最も甚だしいわけではないので「最上表現」とは言い難いが、最上表現と同じ構文が用いられるため最上表現の一種と見なす。§97.4.3 も合わせて参照せよ。

(1) pa salot a solkut apek e avâc ehiv ile cav axial?

▶ どの国が5番目に大きいですか？

## §91 逆の最上表現

最上表現において **hiv** の代わりに **doqhiv** が用いられると、主となる比較対象が逆に

最も劣っていることを表す。doqhiv による最上表現では、hiv が doqhiv に変わっていること以外、可能な構文の違いは見られない。

# 数の表記と読み

## §92 数辞の種類

数を表す単語は「数辞 (numeral)」と呼ばれ、1つの数に対して動詞型不定辞の数辞と名詞型不定辞の数辞が存在する。動詞型不定辞の数辞は常に形容詞として用いられ、名詞型不定辞の数辞は常に名詞として用いられる。

## §93 数の表記

数を文章中で表記する際は、数の読みをアルファベットで綴る方法と数字を用いる方法の2種類がある。数の読みについては§94と§95で述べる。数字で表記する際は、動詞型不定辞の数辞か名詞型不定辞の数辞かを区別せず、それが示す数を数字で記したものによってその数辞を表す。

数を数字で表記する際は、一般的な10進位取り記数法を用いる。ただし、次に述べる点において、現実で広く用いられている位取り記数法とは異なる表記をする。以下、「上位」は整数部分であっても小数部分であっても小数点から遠い位を指し、「下位」は逆に小数点に近い位を指す。

小数点には専用の記号が用いられ、タデックやデックなどの他の記号で代用されることはない。

整数部分が0であるような小数を表記する際は、整数部分の0は書かれない。例えば、0.5は.5と書かれる。ただし、複数の数の間で桁数を揃えるために上位の0を明記する場面では、0.5などと書かれることがある。

大きな数を読みやすくする目的で、下位から4桁ずつに数字を区切って間にスペースが入れられることがある。この区切り位置にタデックやデックなどの記号が置かれることはない。この区切りのためのスペースには単語間のスペースよりも小さいものが用いられ、転写においてはU+202Fなどの専用のコードポイントの文字が用いられる。例えば、15342や648 3860-7037 59のように表記される。

複数の数の間で桁数を揃えるため、上位の0が明記されることがある。例えば、数を全て4桁で揃えたい場面で12の代わりに0012と書かれたり、整数部分と小数部分をそれぞれ3桁と2桁で統一したい場面では012.00と書かれたりする。



## §94 動詞型不定辞の数辞の読み

## §94.1 整数

整数を表す動詞型不定辞の数辞の語幹の読みは、以下の規則によって決まる。

まず、0 から 9 までの 1 桁の整数の読みは次の表の通りである。

数	読み	数	読み
0	nof	5	xaf
1	tis	6	ric
2	qec	7	sez
3	yos	8	kaq
4	piv	9	von

4 桁以下の整数の読みは、各桁の数の読みの後に以下に示す位取り形態素を続け、それらを上位から順に繋げることで得られる。一の位には位取り形態素は付けられない。また、値が 0 である位は普通読まれない。

位	読み
十 ( $10^1$ )	et
百 ( $10^2$ )	il
千 ( $10^3$ )	as

例えば、29 は qecetvon と読み、3087 は yosaskaqetsez と読む。

5 桁以上の整数の読みは、下位から 4 桁ずつ区切り、それぞれの 4 桁以下の整数としての読み以下に以下の位取り形態素を続け、それらを上位から順に繋げることで得られる。最下位の 4 桁には位取り形態素は付けられない。また、区切られた 4 桁の全ての位が 0 である箇所は普通読まれない。数の読みを綴るときは、この位取り形態素の直後にフェークが入れられる。

位	読み
1 万 ( $10^4$ )	otik
1 億 ( $10^8$ )	oqek
1 兆 ( $10^{12}$ )	oyok
1 京 ( $10^{16}$ )	opik
1 垓 ( $10^{20}$ )	oxak

例えば、517002 は xafettisotik-seqasqec と読み、300006401 は yosoqek-ricaspiviltis と読む。

すでに述べたように、値が 0 である位は普通読まれないが、0 であることを特別強調するためにその位が読まれることがある。例えば、500 が xafil の代わりに

xafilnofetnof と読まれることがある。また、稀ではあるが、他の数との桁数を揃えるために上位の 0 が読まれる場合もある。例えば、18 の百の位である 0 を明示して nofilitsetkaq と読まれることがある。

## §94.2 整数部分が 0 の小数

まず、整数部分が 0 であるような小数を表す動詞型不定辞の数辞の語幹の読みは、以下の規則によって決まる。

小数部分の位の読みには、整数部分の位の読みとは異なる形態素が用いられる。小数部分にある位の読みは次の表の通りである。

数	読み	数	読み
0	mul	5	jes
1	daf	6	lam
2	cid	7	ziq
3	hut	8	get
4	bac	9	fus

4 桁以下の小数部分の読みは、各桁の数の読みの後に以下に示す位取り形態素を続け、それらを小数点に近い位から順に繋げる。小数第 1 位には位取り形態素は付けられない。また、値が 0 である位は普通読まれない。

位	読み
$10^{-2}$	et
$10^{-3}$	il
$10^{-4}$	as

例えば、.07 は ziqet と読み、.4561 は bacjesetlamildafas と読む。

5 桁以上の小数部分の読みは、小数点の位置から 4 桁ずつ区切り、それぞれの 4 桁以下の小数としての読み以下の位取り形態素を最後に続け、それらを小数点に近い方から順に繋げることで得られる。小数点に最も近い 4 桁には位取り形態素は付けられない。また、区切られた 4 桁の全ての位が 0 である箇所は普通読まれない。数の読みを綴るときは、この位取り形態素の直後にフェークが入れられる。

位	読み
$10^{-4}$	otik
$10^{-8}$	oqek
$10^{-12}$	oyok
$10^{-16}$	opik
$10^{-20}$	oxak

例えば、.45613773 3 は bacjesetlamildafas-hutziqetziqilhutasotik-hutoqek と読む。

### §94.3 一般の小数

整数部分も小数部分ももつような小数を表す動詞型不定辞の数辞の語幹の読みは、整数部分の読みと小数部分の読みを順に繋げることで得られる。数の読みを綴るときは、整数部分の読みと小数部分の読みの方にフェークが入れられる。なお、小数点は読まれない。例えば、203.4561 は qecilyos-bacjesetlamildafas と読む。

## §95 名詞型不定辞の数辞の読み

名詞型不定辞の数辞の読みは、動詞型不定辞の数辞の読みから以下の方法により規則的に得られる。すなわち、動詞型不定辞の数辞において各位の1桁を表す形態素に含まれる母音字を、以下の表に従って変える。

変換前	変換後
a	e
e	i
i	a
o	u
u	o

この母音の変換は、動詞型不定辞から名詞型不定辞を派生させるときに使われる名辞化アブラウトと同一である。名辞化アブラウトについての詳細は §129.1 を参照せよ。ただし、名詞型不定辞の数辞が作られる際には、語幹の最後の母音のアブラウトするのではなく、読みを構成している各位を表す形態素の母音が全てアブラウトすることに注意せよ。

参照用に、名詞型不定辞の数辞における各位を表す形態素を以下に一覧する。

数	読み	
0	nuf	mol
1	tas	def
2	qic	cad
3	yus	hot
4	pav	bec

数	読み	
5	xef	jis
6	rac	lem
7	siz	zaq
8	keq	git
9	vun	fos

例えば、名詞型不定辞の 29 の読みは qecetvun となる。

## §96 合成語でのみ見られる数辞

### §96.1 10 以上の数辞

10 以上の数を表す数辞は、1桁の整数を表す数辞と位取り形態素とを組み合わせ

作られる。しかし、合成語の合成成分として数辞が使われる場合は、以下の表に示す特殊な単語が使われることがある。これらの単語は合成成分としてのみ使われ、単独で現れることはない。

数	単語
10	nêt
11	têf
12	qâv

## §96.2 序数辞

一部の合成語の合成成分として、以下の表に示す特殊な単語が序数を表すのに使われることがある。これらの単語は合成成分としてのみ使われ、単独で現れることはない。

数	単語	数	単語
1	lêsal	7	xâl
2	haròz	8	penruz
3	sây	9	reyîl
4	xenât	10	ginol
5	reged	11	femnih
6	sinfel	12	génoh



# 数辞の用法

## §97 動詞型不定辞の数辞の用法

### §97.1 基本用法

動詞型不定辞の数辞は、基本的に〈ile + 単位名詞 + 数辞の形容詞用法〉という形で現れる。この ile 句は形容詞や副詞などを修飾して、その被修飾語の程度を表す役割をもつ。

(1) *salot a kadet afik e ahiq ile lôt atisetsez.*

▶ この建物は 17 m の高さだ。

(2) *keqilac a zál e sod aqôl ile latvác 150.*

▶ 私たちは築 150 年の家に住んでいる。

(1) では、ile の後に「メートル」を意味する単位名詞の lôt と 17 を表す数辞の形容詞形の atisetsez が続き、ile lôt atisetsez という「17 m の」を意味する助詞句が形成されている。これが形容詞の ahiq に修飾して、ahiq ile lôt atisetsez で「17 m の分だけ高い」もしくは「17 m の高さの」という形容詞句になっている。

ile の後には〈単位名詞 + 数辞〉という形がいくつか o で繋がられることがあり、その場合は並べられた複数の単位の和を表す。この形では、大きい方の単位ほど前に置かれやすい。なお、ここでの〈単位名詞 + 数辞〉を繋ぐ o は例外的に省略されることが多い。

(3) *salot a ces e alot ile lôt 1 mulôt 70.*

▶ 彼の身長は 1 m 70 cm だ。

ile 句が修飾する形容詞や副詞には、基本的に尺度が大きいことを意味するものが用いられる。例えば、高さを表現する場合には「高い」を意味する hiq が用いられ、長さを表現する場合には「長い」を意味する lot が用いられる。しかし、尺度が小さいことを意味する単語が用いられることもあり、その場合は、その尺度の大きさが何らかの基準よりも小さいというニュアンスが特別に加わることになる。

(4) *salot a kadet afik e adéf ile lôt atisetsez.*

▶ この建物は 17 m という低さだ。

〈単位名詞 + 数辞〉という形は常に ile の後でのみ現れることに注意せよ。これは、〈単位名詞 + 数辞〉という形だけでは、単に抽象的な長さや重さなどの量を表すの

みで、具体的な実際のものは指さないためである。例えば、**tef avon** は「9 時間」の意味ではあるが、これは9 時間という抽象的な時間の長さを表しているのであって、9 時間の長さの具体的な期間を指しているわけではない。そのため、例えば「9 時間眠った」の「9 時間」を表現するのに、**tef avon** を直接 **teku** の補語にした **teku tef avon** という形が使われることはなく、直訳で「9 時間の長さの時間だけ」を意味する **teku lôk avôl ile tef avon** という形が使われる。

(5) **déxet a tel teku lôk avôl ile tef avon.**

▶ 私は9 時間眠っていた。

## §97.2 基数表現

ものの個数は、〈**avôl ile lêk** + 数辞〉という形を名詞に修飾させることで表される。これは、〈**ile** + 単位名詞 + 数辞〉という基本形における単位として「個」を意味する **lêk** を用い、それ全体を「多い」を意味する **vôl** に修飾させたものである。したがって、〈**avôl ile lêk** + 数辞〉という形は、直訳では「～個の分だけの多さの」という意味になっている。この形は「基数表現 (cardinal expression)」と呼ばれる。

基数表現は頻出するため、**avôl ile lêk** の部分を縮約形の **al'** にした形で用いられることがほとんどである。

(1) **qetat a sakil al'apiv vo hif izi dêt.**

▶ 机の上に4 個のリンゴがある。

(2) **kavat a tel e yaf al'ayos.**

▶ 私には妹が3 人いる。

基数表現が名詞を修飾するのではなく助詞の補語として現れる場合は、縮約する前の形が用いられる。ここでは縮約形は用いられない。

(3) **salet e avôl ile lêk 36 a zissohiz kéveles a e sâvak acik.**

▶ その講義に出席した学生は36 人だった。

「～個以上」や「～個以下」のような表現をしたい場合にも、縮約しない形のみが用いられる。これについては§97.5を参照せよ。

上記以外の場合で縮約しない基数表現が用いられた場合は、個数を特別に強調しているというニュアンスが加わる。

## §97.3 序数表現

ものの順位や順番は、〈**acál ile cav** + 数辞〉という形を名詞に修飾させることで表される。これは、〈**ile** + 単位名詞 + 数辞〉という基本形における単位として「番」を意味する **cav** を用い、それ全体を「次の」を意味する **cál** に修飾させたものである。したがって、〈**acál ile cav** + 数辞〉という形は、直訳では「～番の分だけ次の」

という意味になっている。この形は「序数表現 (ordinal expression)」と呼ばれる。

序数表現は頻出するため、*acá ille cav* の部分を縮約形の *ac'* にした形で用いられることがほとんどである。

(1) *salet e aqonef a lacat ac'aqec qikes e a ces.*

▶ 彼の書いた2番目の小説はつまらなかった。

序数表現が名詞を修飾するのではなく助詞の補語として現れる場合は、縮約しない形のみが用いられる。また、「～番より前」や「～番より後」のような表現をした場合にも、縮約しない形のみが用いられる。これについては §97.5 を参照せよ。

上記以外の場合で縮約しない序数表現が用いられた場合は、順位を特別に強調しているというニュアンスが加わる。

## §97.4 比較表現での用法

### §97.4.1 優劣表現

優劣表現における *emic* に *ille* 句が修飾していると、比較されているものの程度の差異がどのくらいかが数値で明確化される。

(1) *salat a gildat afik e adóz emic ille dok 40 ini met aquk.*

▶ この岩はあの岩よりも 40 kg 重い。

この表現において、単位として「倍」を意味する *vâl* が用いられた場合、程度の差異が倍数によって明確化される。より具体的には、*emic* が係っている側と *ini* 節側の比較対象をそれぞれ *S* と *Z* とし、使われている数辞が示す数を *T* とすると、*S* の程度が *Z* の程度に加えて *T* 倍分甚だしいことを表すので、*S* の程度は *Z* の程度の *T* + 1 倍であることになる。これは、同等表現において倍数が使われた場合と異なるので注意せよ。

(2) *cikekat a ces e kisol avôl ille vâl aqot ini tel.*

▶ 彼は私より 2 倍多くのお金を持っている。

(2) は、「彼の所持金は私の所持金に対して 2 倍分多い」すなわち「彼の所持金は私の所持金の 3 倍である」ということを表している。

なお、程度の差異を倍数で表す方法としては、比較表現より同等表現を用いた形の方が好まれる。同等表現における倍数については §97.4.2 を参照せよ。

### §97.4.2 同等表現

同等表現における *evêl* に 〈*ille vâl* + 数辞〉の形が修飾していると、比較されているものの一方の程度がもう一方の程度の何倍であるかが数値で明確化される。より具体的には、*evêl* が係っている側と *ini* 節側の比較対象をそれぞれ *S* と *Z* とし、使われている数辞が示す数を *T* とすると、*S* の程度が *Z* の程度の *T* 倍であることを表す。



これは、優劣表現において倍数が使われた場合と異なるので注意せよ。

(1) cikekat a ces e kisol evêl ile vâl aqot ini tel.

▶ 彼は私より2倍多くのお金を持っている。

(1)は、「彼の所持金は私の所持金に対して2倍である」ということを表している。「2倍分多い」すなわち「3倍である」ではないことに注意せよ。

倍数に1未満の数が用いられることもある。その場合、evêlが係っている側の比較対象の方が程度が劣っていることになる。

(2) vo sokut afik, qetat a tific avôl evêl ile vâl ·7 ini lanqos.

▶ この国には子供が老人の0.7倍いる。

### §97.4.3 最上表現

最上表現における ehiv に〈ile cav + 数辞〉の形が修飾していると、対象の程度が上から何番目かが数値で明確化される。

(1) pa salat a solkut apek e avâc ehiv ile cav axal?

▶ 5番目に大きいのはどの国ですか?

### §97.5 「以上」や「以下」の表現

動詞型不定辞の数辞は基本的に ile 句の補語の中で現れるが、ここで現れる le の代わりに以下の表に示す助接辞が用いられると、「以上」や「以下」の意味になる。表では、le 句の補語の中にある数辞が表す数を  $T$  で表している。

単語	意味
levo	$T$ 以上
lehi	$T$ 超過
lede	$T$ 以下
letu	$T$ 未満

例えば、ile dok atis は「1 kg の」だが、iletu dok atis とすれば「1 kg 未満の」となる。

(1) rafat fegis a tel e qikov aháp iletu dok atis.

▶ 1 kg 未満の重さの軽いパソコンを買いたいのですが。

(2) zâgat a sokul afik levo zác 32.

▶ この部屋は 32°C 以上だ。

基数や序数に対する「以上」や「以下」の表現は、縮約する前の形に現れる le を上で示したうちの適切な助接辞に変えることで作られる。

(3) *ditat cákis a loc fe refet avôl ilevo lêk axal.*

▶ 5人以上の友達と一緒に来てください。

「以上」や「以下」の表現において、数が十分大きくなると、その数を含むか含まないかはあまり重要でなくなる。例えば、「500人以上が所属している」という表現では、ほとんどの場合で「500人以上」の代わりに「500人より多く」と言っても伝わる内容は変わらない。このような場合は、等号を含む *levo* や *lede* の方が好まれる。

(4) *citkulet a zis avôl ilevo lêk 500 ca tives acik.*

▶ その集団には500人以上が所属していた。

## §98 名詞型不定辞の数辞の用法

名詞型不定辞の数辞は、名詞として数そのものを表す。例えば、17を表す名詞型不定辞の数辞である *tisetsiz* は、「17」という数そのものを表す。

(1) *salot a tisetsiz e atûl emic ini qecit.*

▶ 17は20より小さい。

## §99 数辞を用いた表現

### §99.1 日付

日付には〈*vác or ben or taq* + 名詞型不定辞の数辞〉の形が用いられる。例えば、「8月」は *ben 8* と表される。ここで、名詞が2つ連続した形が現れるが、これは名詞の間に *iva* が省略されていると見なせる。*iva* の省略については §115.3 も参照されたい。

年月日のうち2つ以上をまとめて述べる場合は、日→月→年の順でこの形を *i* で繋げて並べられる。例えば、「8月12日」は *taq 12 i ben 8* と表される。ここでの *i* は例外的に省略されることがある。

(1) *pa qifat cásis a loc e tel te lon i taq 24 ben 12?*

▶ 12月24日の夜に私と会えますか?

日付を構成する数をカルタックで区切って並べることで日付が表現されることもある。このとき、数は日→月→年の順番で並べられる。年は省略されることがある。この記法で現れる数辞は名詞型不定辞だと解釈され、発音する際は名詞型不定辞の数辞の読みが用いられる。

(2) *salat a saq e 12:08:2018.*

▶ 今日には2018年8月12日だ。

(3) qorasis a tel ca 'okinavas fe sofez te 02:07.

▶ 7月2日に家族で沖縄に旅行するつもりだ。

## §99.2 時刻

時刻の表現には、特殊な名詞である **tat** を用いた〈**tat ile** + 単位名詞 + 数辞〉の形が用いられる。例えば、**tat ile tef 23** は「23時」を意味する。この **tat** は、形式的には「その日の始まりからいくらか時間が経過した後の瞬間」という意味であると考えられるため、**tat ile tef 23** は「その日の始まりから 23 時間経過した後」すなわち「23時」の意味になる。

(1) vomac déxos ovák a tel te tat ile tef 23.

▶ 私はいつも 23 時に寝る。

時だけでなく分や秒まで述べる場合には、**ile** 句で複数の単位を述べる方法に従って、〈単位名詞 + 数辞〉の形が **ile** の後に並べられる。例えば、「14 時 20 分 52 秒」は **tat ile tef 14 meris 20 tit 52** となる。

時刻を構成する数をカルタックで区切って並べることで時刻が表現されることもある。このとき、数は時→分→秒の順番で並べられる。秒は省略されることが多い。この記法で現れる数辞は名詞型不定辞だと解釈され、発音する際は名詞型不定辞の数辞の読みが用いられる。

(2) ditat câsis ovop a zál te 18:30.

▶ 18 時 30 分にまた会いましょう。

## §99.3 回数

〈**la tal** + 基数表現〉という形で回数が表される。

(1) vomes lanas a tel ca 'amerikas la tal al'avon.

▶ 私は 9 回アメリカに行ったことがある。

この表現における基数表現という部分は、数辞を含まない他の形容詞句になることもある。例えば、「たくさんの」を意味する **avôl** が使われれば「何度も」という意味になり、「次の」を意味する **acál** が使われれば「今度」の意味になる。

(2) vomes bozetas a ces e tel la tal avôl

▶ 彼は私を何度も殴った。

(3) te xakalis la tal acál, dí'lanis a zál ca zîdrahit.

▶ 今度晴れたら遊園地に行きましょう。

〈**la tal** + 序数表現〉という形では「～回目に」という意味になる。

(4) *te vîtices a tel e ces la tal ac'ayos, rédet a ces.*

▶ 私が彼を3回目に見たとき、彼は泣いていた。

なお、この形での「～回目に」が意味するのは、それが修飾する動詞の行為と同じ行為を何回か行ううちのその回数番目の行為である。例えば(4)の *te* 節は、「彼を見る」という行為を何回か行ったうちの3回目が行われたことを意味している。何らかの一連の動作や手順のうちの3番目の行為が「彼を見る」であるという意味ではない。

ここで用いられる *tal* は普通の名詞であって、単位を表す名詞ではない。したがって、数辞を直接 *tal* に修飾させることはできず、*ile* 句の中で *tal* を使うこともできない。

#### §99.4 動作の程度の明示

動詞が *la* 句で修飾されると、その動詞が表す動作をどの程度の規模で行ったかが明示される。この *la* 句には数辞を用いた表現が置かれることが多い。

(1) *vilises a tel te saq la lim alot ile nolôt 50.*

▶ 今日は5 km 走った。

*la* 句は *ile* 句とは異なり、〈単位 + 数辞〉という形が後ろに直接置かれることはない。したがって、上の例文の *la* 句が *la nolôt 50* とされることはない。

なお、*la* 句に数辞を含まない表現も見られる。

(2) *pa savat canisis a'l la ziked avôl epác?*

▶ あとどのくらい進めば良いのですか?



# 助詞や接続詞の特殊構文

## §100 例外助接辞の動詞修飾形

### §100.1 助詞用法

例外助接辞が成す助詞句が動詞を修飾しているときに限り、その例外助接辞が動詞修飾形をとることがある。動詞修飾形となった例外助接辞が成す助詞句は、語順において一般助接辞が成す助詞句と同列に扱われる。

- (1) déxec ifeli qisec a ces te cal.  
▶ 彼女は人形のようにそのとき眠っていた。
- (2) déxec feli qisec a ces te cal.  
▶ 彼女は人形のようにそのとき眠っていた。
- (3) déxec a ces feli qisec te cal.  
▶ 彼女は人形のようにそのとき眠っていた。

(1), (2), (3) は同じ意味である。(1) は、原則通り例外助接辞 **feli** が非動詞修飾形の **ifeli** となって現れている。これが (2) では、動詞修飾形の **feli** として現れている。この **feli** 句は一般助接辞による助詞句と同じように扱われるため、(3) にあるように、他の一般助接辞による助詞句の間などに置かれることもある。

例外助接辞が成す助詞句が動詞を修飾するときは、その例外助接辞は動詞修飾形として現れる方が好まれる。

### §100.2 接続詞用法

例外助接辞が接続詞として用いられているとき、動詞修飾形をとることがある。これは、その例外助接辞の非動詞修飾形が用いられている文に対し、次のような規則的な言い換えを行ったものとして解釈できる。まず、非動詞修飾形を動詞修飾形に変える。その後、その接続詞が成す節を、それが動詞を修飾しているかのように被修飾節の前もしくは後ろに置く。この操作により、もとの文と同じ意味の文が得られる。

ここで、接続詞節が被修飾節の前に置かれているときは、接続詞節の終わりにタデックが置かれる。接続詞節が被修飾節の後ろに置かれているときは、接続詞節の直前にタデックが置かれるが、接続詞節と被修飾節がともに短い場合はタデックが省略されることがある。

- (1) *salot a xoq aquk e anisxok emic ini revat a loc e'n lot.*  
 ▶ あの本はあなたが思っているよりもおもしろい。
- (2) *salot a xoq aquk e anisxok emic, ni revat a loc e'n lot.*  
 ▶ あの本はあなたが思っているよりもおもしろい。

(1)を言い換えたものが(2)である。これらは同じ意味になる。

この形では、構文上は一般助接辞の動詞修飾形が接続詞として使われた場合と同じ形態になる。しかし、副詞的用法をとることはないという点では、一般助接辞と異なる振る舞いをする。

## §101 限定節の動詞の省略

限定節の内容が複雑でない場合に、次の手順で限定節の動詞が省略された形に言い換えられることがある。まず、その限定節の動詞を取り除き、さらに補語が(多くの場合省略された) *cok* である助詞句も取り除く。次に、取り除いた動詞に係っていた助詞句の助詞、接続詞節の接続詞、副詞、連述詞を全て非動詞修飾形にする。以上のようにして得られた表現は、もとの表現と同じ意味になる。この言い換えが行われるのは、省略後に被修飾語に係ることになる修飾語が1つしかない場合がほとんどで、さらに動詞がなくても何が消えたかがはっきり分かる場合のみに限られる。

- (1) *salet e alot a qazek qetat a vo vosis afik.*  
 ▶ この店にいた男性は背が高かった。
- (2) *salet e alot a qazek ivo vosis afik.*  
 ▶ この店の男性は背が高かった。

(1)と(2)は同じ意味である。(1)にある *qetat* が省略されたことで、(2)では動詞修飾形の *vo* が非動詞修飾形の *ivo* になっていることに注目せよ。

この言い換えの際に、代名詞的な単語のみから成る助詞句は、それを省略しても文意が曖昧になりづらいと考えられればさらに省略されることがある。

- (3) *salot a fit e qixov qilos e a tel so qiketos a'l vo sod.*  
 ▶ これは私が家で仕事をするために使うパソコンだ。
- (4) *salot a fit e qixov iso qiketos a tel vo sod.*  
 ▶ これは私が家で仕事をするためのパソコンだ。

(3)が(4)に言い換えられる際、省略された *qilos* に係る *a tel* も省略されている。

また、省略された動詞に係っていた助詞句の助詞が、言い換えの際に *i* に変えられることがある。特に、その助詞が基本助接辞だった場合は、常に *i* に置き換えられる。

(5) salet e adoqsaret a tolék qikes e a ces.

▶ 彼が作った料理はまずかった。

(6) salet e adoqsaret a tolék i ces.

▶ 彼の料理はまずかった。

(5) が (6) に言い換えられる際、基本助接辞である **a** は **ia** にはならず **i** になっている。

## §102 接続詞の意味の助詞

節の言い換えとして名詞が使われていると考えられる場合、その前に置かれている助接辞は、構文上助詞として用いられるにも関わらず、意味は接続詞のものになる。これにより、一般的には接続詞用法のみをもつ助接辞でも、後ろに名詞を伴って助詞として使われることがある。また、助詞と接続詞の用法を両方もっている助接辞についても、助詞として用いられていながら、助詞としての本来の意味ではなく接続詞としての意味をもつことがある。これが起こり得るのは次のような場合である。

- ▶ 事を表す代詞を伴う場合
- ▶ 動詞型不定辞の名詞用法によって節が言い換えられている場合 (§28.1.3 参照)
- ▶ 節から代表的な名詞や形容詞が抜き出されて節の代わりをしている場合 (§114 参照)

以下に例を挙げる。

(1) pa dulanés vade pil a loc te tazît ca kosax?

▶ どうして昨日学校に行かなかったのですか?

(2) fecòkes a ces e xoq ivo hâc qi lipotes a's.

▶ 彼女は高いところにある本をジャンプすることで取った。

(3) dudozot caqisis a vas ri tific.

▶ 子供であればお金を払う必要はない。

(1) の **vade pil** では、伴っている名詞が事を表す代詞の **pil** であるために、接続詞用法の意味しかもたない **vade** が助詞として用いられることができている。(2) の **qi lipot** では、**qi lipotes a's** のような表現の言い換えだと考えられるため、ここでの **qi** の意味は助詞としての「～を道具として」ではなく接続詞としての「～することで」である。(3) の **ri tific** では、**ri salot a ces e tific** などの言い換えだと考えられるため、接続詞用法の意味しかもたない **ri** が助詞として使われている。

## §103 接続詞や連結詞の副詞的用法

一般助接辞の動詞修飾形および連結辞の別形は、文頭に単独で置かれることがある。このような接続詞や連結詞を「副詞的用法 (adverbial use)」と呼ぶ。



接続詞の副詞的用法は、接続詞節が主節の後ろに置かれた形の1つの文を、次のようにして2つの文に分けたものとして解釈できる。まず、接続詞の直前にあるタデックをデックに変え、文を2つに分ける。その後、接続詞の直後に新たにタデックを置く。

(1) *kavat a tel e xoq avôl, vade sâfat a tel e met.*

▶ 私はたくさんの本を持っているが、それは私が本を好きだからだ。

(2) *kavat a tel e xoq avôl. vade, sâfat a tel e met.*

▶ 私はたくさんの本を持っている。というのも、私が本を好きだからだ。

(1)の *vade* を副詞的用法にしたものが(2)である。どちらも表す内容は同じである。

連結詞の副詞的用法も、連結詞が節を繋いでいる形の1つの文を、同様にして2つの文に分けたものとして解釈できる。なお、連結辞が副詞的用法で使われるときは必ず別形をとる。

(3) *cipases a tel ca ces e'n nifetis a's e celet, dà dules a ces.*

▶ 私は彼女にノートを持って来るよう頼んだが、彼女はそうしなかった。

(4) *cipases a tel ca ces e'n nifetis a's e celet. dà, dules a ces.*

▶ 私は彼女にノートを持って来るよう頼んだ。しかし、彼女はそうしなかった。

(3)の *dà* を副詞的用法にしたものが(4)である。

# 話法

## §104 直接話法

### §104.1 e 句に置く方法

kécs や rev などの発言や思考を表す単語は、動詞として使われたときに e 句に発言や思考の内容をとる。この箇所には発言や思考の内容を説明した kin 節が置かれる他に、発言や思考をそのまま引用してラクトで囲んだものも置かれる。このような発言や思考の内容をラクトで囲んだ表現は「直接話法 (direct speech)」と呼ばれる。

(1) kécs a ces ca tel e'n tòdes a's e yaf i tel vo kosxoq.

▶ 彼は私に私の妹に図書館で会ったと言った。

(2) kécs a ces ca tel e «tòdes a tel e yaf i loc vo kosxoq.».

▶ 彼は私に「あなたの妹に図書館で会った。」と言った。

(1) と (2) は同じ意味であり、(2) が直接話法を用いて発言内容をそのまま引用した表現である。

なお、直接話法表現におけるラクトで囲まれた部分は、実際の発言や思考の内容をそのまま引用する形になるので、その中の時制や時間表現はその発言や思考が行われた時間を基準に決まることに注意せよ。詳しくは §65.5 で述べる。

### §104.2 遊離直接話法

発言や思考の内容をラクトで囲んで引用したものが、前後の文から独立して置かれることがある。これは、ラクトで囲まれた部分が、その直前の文にある発言や思考を表す動詞の e 句の補語にあった状態から、文とは独立した表現として移動したものと解釈できる。この移動の際に、ラクト部分に付随していた e は省略される。さらに、その文の末尾にフェークレーディックが置かれることも多い。このような表現はしばしば「遊離直接話法 (floating direct speech)」と呼ばれる。

(1) kécs a ces ca tel e «tòdes a tel e yaf i loc vo kosxoq.».

▶ 彼は私に「あなたの妹に図書館で会った。」と言った。

(2) kécs a ces ca tel. «tòdes a tel e yaf i loc vo kosxoq.»

▶ 彼は私に言った。「あなたの妹に図書館で会った。」

(1) と (2) は同じ意味であり、(2) では遊離直接話法が用いられている。

物語のような叙述的な文章においては、発言や思考を表す動詞がなくても、発言や思考の内容をラクトで囲んだものが文の間に挿入され、そこでその発言や思考が行われたことを表すことがある。

(3) fôves a ces e téd. «pa qetat a pet voku sokul afik?»

▶ 彼女は扉を開けた。「この部屋の中には何があるんだろう？」

# 遊離助詞句

## §105 遊離助詞句

### §105.1 概要

文には原則として動詞が必要だが、しばしば助詞句だけが1つの文を構成することがある。このような助詞句は「遊離助詞句 (floating prepositional phrase)」と呼ばれる。

遊離助詞句が用いられる場面や意味は多様であるが、どの場合でも一貫して、その助詞句に係るべき動詞が省略されたものとして解釈される。そのため、動詞を修飾する助詞句だけが遊離助詞句になり得る。続くサブセクションで、遊離助詞句が用いられる各場面について詳しく述べる。

### §105.2 疑問文への回答

疑問詞疑問文に答えるときには、遊離助詞句が使われることが多い。このときに使われる助詞としては、疑問詞を含む動詞修飾の助詞句を構成するものが用いられるか、場合によっては疑問文の構造に関わらず *e* が用いられる。詳しい用法は §58.2 を参照せよ。

(1) *pa qetet a loc te pôd i tazît vo pâd? / vo naflat.*

▶ あなたは昨日の朝どこにいましたか? / 公園です。

回答が節になる場合、以下のように接続詞節が単独で文になることもある。これは助詞句ではないので遊離助詞句ではなく、「遊離接続詞節 (floating coordinate clause)」と呼ぶべきものだが、遊離現象の一種ではあるためここで述べた。

(2) *pa câkes so pil a loc ca fêd? / so câsis a tel e refet.*

▶ 何のためにここに来たのですか? / 友達に会うためです。

### §105.3 *yo* 句

*yo* 句は単独で文を成して呼びかけを表す。これは他の遊離助詞句と異なり、動詞の省略ではなく間投詞のように扱われた結果である。§125 も参照せよ。

(1) *yo 'xastil asen.*

▶ シヤスティルさん。

## §105.4 名詞のみを述べるため

### §105.4.1 概要

名詞は必ず助詞を伴う。したがって、例えば感嘆などで名詞のみを単独で述べようとするときも、何らかの助詞が付けられる。このようなときは、その意味合いに応じて **a** か **e** のどちらかが用いられる。続くサブサブセクションで、それぞれの助詞が使われたときの意味について述べる。

### §105.4.2 遊離 **a** 句

遊離 **a** 句は、これまでの文脈になかったものについて新たに言及したいときに用いられる。これは、**qetat** が省略されたとして解釈される。

(1) **sê, a hitál!**

▶ ねえ、鳥だよ!

(1) が発せられるシチュエーションとしては、外を歩いていて空を見上げたら鳥が飛んでいたのを、それを指差して「鳥だ」と言う場面などが考えられる。これまでに鳥の話はしておらず、新たに鳥を見つけたことを表現したいため、助詞として **a** が選ばれている。

遊離 **a** 句の前に **pa** が付けられると、それがどのような様子であるかを問う疑問文にもなる。この場合、**salat e apéf** などの省略と見なされる。

(2) **pa a tecef i tel?**

▶ 私の運はどうだろう?

### §105.4.3 遊離 **e** 句

遊離 **e** 句は、これまでの文脈で言及された何らかのものや出来事について説明したいときに用いられる。これは、**salat a cit** などの省略として解釈される。そのため、**sal** に係る **e** 句と同様に、遊離 **e** 句の補語に形容詞が置かれることもある。

(1) **qetat vo qôd a zat! e monaf...**

▶ あそこに何かいる! 猫か…。

(2) **pa feges a loc e yelicnelas afik? e ayerif.**

▶ このネックレスを買ったのですか? 綺麗ですね。

遊離 **a** 句のときと同様に、遊離 **e** 句の前にも **pa** が付けられて疑問文になることがある。このときは、その文脈ですでに言及されたものや出来事を受けて、それが **e** 句の補語であるかどうかを問う疑問文になる。

(3) **pa e ziltas?**

▶ からかっているのか?

## (4) pa e ayâl?

▶ 問題ないか?

遊離 e 句の補語に疑問表現が置かれることもある。このとき、e の前には pa が置かれる。この場合も salat a cit などの省略だと考えられて、文脈上これまでできてきたものの正体や様子を問う疑問文となる。

## (5) pa e pet?

▶ それは何?

## (6) peciqak kômas a'l e hâlfeloq acac. pa e apéf?

▶ 新しいワンピース着てみました。どうでしょうか?

疑問文の返答に使われる遊離 e は、この名詞のみを述べるための用法だと考えることができる。詳細は §58.2.2 を参照せよ。

## §105.5 命令表現的な遊離助詞句

動詞型不定辞の名詞用法が遊離 e 句の補語として置かれると、命令の意味になる。dit を用いた命令表現よりも文全体を短くできるため、緊急時などで簡素に表現する必要がある場合に用いられる。助詞に e が使われるのは、動詞として deqig が省略されているからだと考えられる。

## (1) e duqetan!

▶ 動くな!

通常の命令表現よりも相手の注意を惹くので、注意を惹くことの方が主な目的となることも多い。e lic や e qerit 等は、注意を促す典型表現である。

## (2) e lic! qetat ca hif izi dòliq a monaf.

▶ 見て! 塀の上に猫がいる。

文脈によっては、勧誘の意味になることもある。この場合は、動詞として fecev が省略されていると見なせる。

## (3) câ, e caliq!

▶ さあ、出発しよう!

遊離 e 句を用いた命令表現の強さは、シチュエーションや言い方によって変わる。例えば、逃げ出した人に向かって激しい口調で e tidik と言えば乱暴な命令になる。しかし、別れ際に相手を引き留めようと慌てて e tidik と言うことは目上の人に対してでも行うことがあり、粗野な印象はない。

## §105.6 上記以外の遊離助詞句

上記以外の形の遊離助詞句もあり得る。その場合も何らかの動詞が省略されたもの

として解釈されるが、どの動詞が省略されているかは強く文脈に依存する。ただし、ここで基本助接辞が使われることはない。これは、基本助接辞の意味は係る動詞によって決まるため、動詞が省略されると意味が曖昧になりすぎるためだと考えられる。

上で述べた形式に当てはまらない遊離助詞句のうち最もよく見られるのは、〈pa + 一般助接辞 + 疑問詞〉という形である。これは、相手が言った内容を代動詞で受けた *les* や *lac* などが省略されていると解釈される。

(1) *pa vade pil?*

▶ どうして?

(2) *pa qi pil?*

▶ どうやって?

これ以外の形のもものは、一定のパターンが存在せず、意味も強く文脈に依存する。一貫した説明を与えるのは困難なため、いくつか例を挙げるに留める。

(3) *cali zíd aqon edif!*

▶ どんなに遠くまでも!

# モノとコト

## §106 モノとコト

一般に、名詞句や kin 節などの名詞のように扱われる表現は、モノとコトのどちらかに分けることができる。「モノ (entity)」とは、現実もしくは架空の世界にある何らかの物体や抽象的概念のことであり、例えば「リンゴ」や「私の兄」や「右」などが該当する。これと対比して「コト (event)」とは、実際の出来事や空想上の物語や想像などの事象の記述のことであり、例えば「彼が学校へ行った」や「空は青い」などが該当する。モノとコトは次の表に示すように定義することができる。

種類	定義	例
モノ	事を表す代詞以外の名辞の名詞用法	sakil, nîl i tel, soc
コト	事を表す代詞	cal, fal, pil
	動辞の名詞用法	sôd, hisez ie hinad
	kin 節	kin lanes a ces ca kosax

モノかコトかの扱いが特殊な単語に cok がある。この単語は従属節内で被修飾語を指すが、それが指す被修飾語がモノ名詞であれば cok 自身もモノ名詞として扱われ、被修飾語がコト名詞であれば cok 自身もコト名詞として扱われる。

モノとコトは明確に区別され、原則として、モノが置かれるべき場所にコトが置かれることはなく、逆にコトが置かれるべき場所にモノが置かれることもない。ただし、特定の条件のもとでは、コトが置かれるべき場所にモノが置かれることがある。モノとコトの使い分けについては §107 で、使い分けの例外規則については §108 で詳しく述べる。

## §107 モノとコトの使い分け

### §107.1 基本助接辞の補語

基本助接辞の補語には、その基本助接辞に係る単語によって、モノが置かれるかコトが置かれるかが決まっている。どちらになるかは単語ごとに異なり、普遍的な規則はあまり見られない。

例えば、動詞として「読む」の意味の lid は、e 句に「本」のような読む対象となるモノをとる。したがって、lid に係る e 句にコトが置かれることはない。



(1) *lides a ces e xoq afik.*

▶ 彼はこの本を読んだ。

一方で、動詞として「待つ」の意味の *fiq* は、*e* 句に待つ事象となるコトをとる。

(2) *fiqac a tel e kin cakis a ces ca fêd.*

▶ 私は彼がここに来るのを待っている。

形容詞には基本助接辞の助詞用法が非動詞修飾形で係ることがあるが、その補語にモノが置かれるかコトが置かれるかは、同じ単語の動詞用法から推測が可能である。動詞と形容詞の意味関係の法則により、形容詞として使われときにある助接辞の非動詞修飾形に係るなら、動詞として使われたときに同じ助接辞の動詞修飾形に係らせることができるが、この助接辞にモノが置かれるかコトが置かれるかは両者で一致している。動詞と形容詞の意味関係については §26.1 で触れている。

例えば、形容詞として「そっくりの」の意味の *kâf* は、*ica* 句にモノをとる。*kâf* は動詞として使われることもあり、動詞として使われたときの *kâf* は、*ca* 句にモノをとる。ここに、同じ助接辞ならモノをとるかコトをとるかが一致していることが観察できる。

(3) *tôdes a tel e zis akâf ica yaf i tel.*

▶ 私は妹にそっくりな人に出会った。

(4) *kâfat a ces ca yaf i tel.*

▶ 彼女は私の妹にそっくりだ。

## §107.2 基本助接辞以外の助接辞の補語

基本助接辞以外の助接辞(例外助接辞も含む)が助詞として用いられたときの補語については、その助接辞自身に応じてモノになるかコトになるかが決まっている。基本助接辞のときとは違って修飾先の単語にはよらない。

傾向として、基本助接辞以外の助接辞の大多数は、助詞として用いられたときに補語にモノをとる。これは、コトを伴う意味をもつ助接辞は、基本的に助詞としてではなく接続詞として使われるためである。

例えば、*te* が助詞として用いられると、時間を表す名詞を伴ってその時間に動詞の動作が行われたことを表す。時間はモノであるから、*te* の補語としてはモノが置かれる。

(1) *qetet a ces vo kosdes te tazît.*

▶ 彼は昨日大学にいた。

一方で、被修飾語の内容を表す *ke* が助詞として用いられると、その補語にはコトが置かれる。*ke* は接続詞用法をもたないため、節を名詞化する *kin* が必要になるこ

とには注意せよ。

(2) *cazes a tel e rát ike kin ziffexases a ces.*

▶ 私は彼が離婚したという話を聞いた。

### §107.3 形容詞の被修飾語

動詞と形容詞の意味関係の法則により、形容詞の被修飾語は、動詞として使ったときにそれに係る何らかの基本助接辞に置かれる名詞と対応する。動詞に係る基本助接辞の補語にモノとコトのどちらが置かれるかはその単語自身が決めるので、それに従って、形容詞のときの被修飾語がモノとコトのどちらになるかが自動的に決まる。例えば、*xôy* は動詞と形容詞の意味関係が継続対格型であるから、動詞の *e* 句と形容詞の被修飾語が対応するが、動詞の *e* 句にはモノが置かれるので、形容詞の被修飾語にもモノが置かれることになる。

(1) *linifes e tel ca sokxoq axôy.*

▶ 私は綺麗な図書室に連れて行かれた。

動詞と形容詞の意味関係については、§26.1で詳しく述べる。

## §108 モノとコトの例外規則

### §108.1 接続詞用法をもつ助接辞の直後

接続詞用法をもつ助接辞は、助詞として使ったときにモノをとるかコトをとるかに関わらず、助詞としてコトをとって接続詞として使われるときと同じ意味で用いられることがある。これにより、接続詞の用法とモノをとる助詞の用法を両方もつ助接辞は、助詞としてモノとコトの両方をとれることになる。この表現については §102 で詳しく述べる。

### §108.2 内容のあるモノ名詞

「話」の意味の *kíc* や「ニュース」の意味の *kalcac* などの内容をもつ名詞は、定義上モノ名詞であるが、その内容そのものを表しているとしてコト名詞として扱われることがある。

(1) *qolizes a tel e kíc i ces.*

▶ 私は彼の話に疑った。

(1)で使われている *qoliz* は、動詞として使われたときの *e* 句にコトが置かれることがあるので、規則に従えば *e* 句にモノである *kíc* を置くことはできない。しかし、この *kíc* は「話」そのものというより「話の内容」というコトを表していると解釈され、コト名詞として扱われて *qoliz* に係る *e* 句の補語として置かれている。

### §108.3 節の代わりに名詞が置かれる場合

kin 節の内容がそれに含まれる名詞1つのみを述べるだけで十分推測できると判断される場合、kin 節全体がその名詞で置き換えられることがある。このとき、コトである kin 節がモノである名詞に置き換えられるため、コトが置かれるべき場所にモノが置かれることになる。この置き換えについては、§114.1で詳しく述べる。

# 修辭的な表現

## §109 挿入

### §109.1 概要

挿入とは、完全な文の途中もしくは最後に語句が追加された表現であり、文中の内容を補足説明するために用いられる。このとき、そこが挿入部であることを明示するために、挿入される語句の前後にタデックもしくはタデックロットが置かれる。ただし、挿入部が文末にある場合は、挿入部の後ろとなる文末にはタデックやタデックロットが置かれない。

タデックが置かれるかタデックロットが置かれるかによって、挿入できる語句の種類やニュアンスが変わるので、続くサブセクションでその違いを述べる。

### §109.2 記号による違い

#### §109.2.1 タデックによる挿入

タデックによる挿入表現においては、挿入部の前後に置かれているタデックを取り除いて通常の文だと見なすと、正しい完全な文になる。逆に、通常の文から始めて、その中で補足説明となる部分の前後にタデックが置かれることで、挿入表現が作られると考えることもできる。ここで、挿入部となる箇所は、必ずある1つの語句に係っている修飾語句(名詞を修飾している場合は節でも可能)である。したがって、他の語句を修飾する機能をもたない名詞句や動詞句が単独で挿入語句になることはない。

例として、次の文を考える。

(1) *cafoses ocàszocèt a ces fi socavhâr e sokiq axodol séqes e ca's a refet.*

▶ 彼は友達からもらった高価な時計を笑顔で自慢げに見せた。

ここからは、次のような挿入表現が考えられる。まず、副詞句や助詞句は動詞を修飾するものなので、これは挿入表現の挿入部になり得る。

(2) *cafoses, ocàszocèt, a ces fi socavhâr e sokiq axodol séqes e ca's a refet.*

▶ 彼は友達からもらった高価な時計を笑顔で見せたが、自慢げだった。

(3) *cafoses ocàszocèt a ces, fi socavhâr, e sokiq axodol séqes e ca's a refet.*

▶ 彼は友達からもらった高価な時計を自慢気に見せたが、笑みを浮かべていた。

形容詞句や限定節は名詞を修飾するものなので、これも挿入表現の挿入部になり得る。

(4) *cafosos ocàszocèt a ces fi socavhâr e sokiç, axodol, séqes e ca's a refet.*

▶ 彼は友達からもらった時計を笑顔で見せたが、それは高価なものだった。

(5) *cafosos ocàszocèt a ces fi socavhâr e sokiç axodol, séqes e ca's a refet.*

▶ 彼は高価な時計を自慢気に見せたが、それは友達からもらったものだった。

通常の文では、副詞は動詞の直後か節の末尾にしか置かれませんが、挿入表現における挿入部になっている場合に限り、同じ動詞を修飾する助詞句の間にも置かれる。例えば、以下は全てあり得る挿入表現である。

(6) *cafosos a ces, ocàszocèt, fi socavhâr e sokiç axodol séqes e ca's a refet.*

▶ 彼は友達からもらった高価な時計を笑顔で見せたが、自慢げだった。

(7) *cafosos a ces fi socavhâr, ocàszocèt, e sokiç axodol séqes e ca's a refet.*

▶ 彼は友達からもらった高価な時計を笑顔で見せたが、自慢げだった。

### §109.2.2 タデックロットによる挿入

タデックロットによる挿入表現の中には、タデックによる挿入表現のタデックをタデックロットに置き換えたものと見なせるものがある。例えば、以下のような挿入表現があり得る。

(1) *cafosos — ocàszocèt — a ces fi socavhâr e sokiç axodol séqes e ca's a refet.*

(2) *cafosos ocàszocèt a ces — fi socavhâr — e sokiç axodol séqes e ca's a refet.*

(3) *cafosos ocàszocèt a ces fi socavhâr e sokiç — axodol — séqes e ca's a refet.*

(4) *cafosos ocàszocèt a ces fi socavhâr e sokiç axodol — séqes e ca's a refet.*

(5) *cafosos a ces — ocàszocèt — fi socavhâr e sokiç axodol séqes e ca's a refet.*

(6) *cafosos a ces fi socavhâr — ocàszocèt — e sokiç axodol séqes e ca's a refet.*

これに加え、タデックロットによる挿入表現では、動詞を修飾する接続詞節もしくは完全文が挿入されることがある。その場合、挿入部は動詞の後に並べられている副詞もしくは助詞句の間に置かれる。なお、この形はタデックによる挿入表現では見られない。

(7) *cafosos ocàszocèt a ces — bava kéces a tel ca ces e'n dudozat lis — e sokiç axodol.*

▶ 彼は——私はその必要はないと言ったのだが——自慢気に高価な時計を見せた。

(8) *cafosos ocàszocèt — dítikad a tel li cal — a ces e sokiç axodol.*

▶ 自慢気に——私はそれに苛ついていた——彼は高価な時計を見せた。

タデックロットを用いた挿入表現で挿入されている箇所には、読み飛ばしても概ね

問題ないというニュアンスが加わる。そのため、タデックロットによる挿入表現は、タデックによる挿入表現と比べて挿入部が補足説明であるというニュアンスがより強い。

### §109.3 挿入表現かどうかによる意味の違い

挿入部となった修飾語句は、被修飾語が指すものを限定する機能を失い、代わりに被修飾語に追加の補足説明を与える機能をもつ。そのため、挿入された修飾語句は「非限定的用法 (nonrestrictive use)」と呼ばれることがある。このような通常の修飾と挿入表現での機能の違いが、しばしば文全体の意味を大きく変えることがある。

(1) *kavat a tel e refet al'ayos keqilac a vo 'tôkôs.*

▶ 私には東京に住んでいる 3 人の友人がいる。

(2) *kavat a tel e refet al'ayos, keqilac a vo 'tôkôs.*

▶ 私には 3 人の友人がいて、東京に住んでいる。

(1) では、*keqilac* 以下の限定節が通常通り *refet* に係っており、この「友人」という単語が指す範囲を「東京に住んでいる」ものに制限している。したがって、この文は「東京に住んでいる 3 人の友人がいる」ということを述べているに過ぎないため、東京に住んでいない別の友人がいる可能性がある。一方で (2) では、*keqilac* の前にタデックが置かれていて、*keqilac* 以下が挿入表現になっている。そのため、この文はまず「3 人の友人がいる」ということを述べていて、その補足として「その友人は東京に住んでいる」という情報が与えられているため、友人はこの 3 人のみと解釈される。

## §110 強調

### §110.1 *kod, les* による強調

*kod* の *e* 句に *kin* 節が置かれた「～ということが起きる」と直訳できる表現は、*kin* 節内の内容の強調として用いられる。

(1) *kodes a kin beqomas e cifëkkis i tel ivo sod.*

▶ 家にあった私の財布が盗まれてしまった。

強調の内容がある主体の何らかの行動である場合、*kod* の代わりに *les* も使われる。このとき、その主体が *les* の主語になる。

(2) *leses a ces e'n qolvabas a's e takul acik.*

▶ 彼がその箱を持ち去ったのだ。

## §110.2 転移による強調

### §110.2.1 文頭転移

動詞を修飾する助詞句や副詞句は、文頭に転移して直後にタデックが置かれると、強調のニュアンスをもつ。このタデックは省略されない。

- (1) e 'melfih, cafeles a tel.  
 ▶ 私が呼んだのはメルフィアだ。
- (2) okôk, ditat lesis a'c e cal.  
 ▶ それを必ずやりなさい。

従属節内の語句がこの形で強調されることもあるが、あまり例は多くない。なお、強調される語句がもともと従属節内にある場合でも、転移する先は文の初めであり節の初めではないことに注意せよ。

- (3) a yaf i loc, lices a tel e'n folsatac vo caf izi sod i tel.  
 ▶ 私が家の前で散歩しているのを見たのは、あなたの妹だ。

### §110.2.2 文末転移

主節の動詞を修飾する助詞句や副詞句は、文末に転移して直前にタデックが置かれると、若干の強調のニュアンスをもつ。これは文末への挿入表現と同じ形になるので、強調するための特別な構文によって強調が行われているというよりは、文末の語句が最後に補足説明として述べられることで念押しとして強調されていると考えられる。したがって、文頭への移動による強調表現と比べて、この方法での強調度は低い。挿入表現については §109 を参照せよ。

- (1) raflesec a tel te cal, e 'melfih.  
 ▶ 私がそのとき話していたのはメルフィアだ。

## §III 反語

疑問表現を含む文では末尾にバデックが置かれるが、代わりにデックが置かれると疑問内容の否定を表す反語表現になる。これが発音される際は、文末が上昇気味にはならず、平叙文と同様に読まれる。

- (1) pa kilat lesos a pas e cal.  
 ▶ 誰がそんなことをすることができようか。

# 省略

## §112 助詞句の省略

動詞は助詞句によって修飾されるが、動詞に対して必ず必要な助詞句というものは見られず、助詞句は自由に省略される。このとき、明示されていない助詞句には補語として不定代辞があるものとして解釈される。

(1) *bozetes e tel.*

▶ 私は殴られた。

(1)では、主語を表す *a* 句が存在しないため、殴った主体が明示されていない。この場合、*a zis* が省略されていると見なされ、「何らかの人が私を殴った」として解釈される。

存在しない動詞修飾の助詞句は常にその補語が不定代辞であるとして解釈されることから、補語が不定代辞ではない動詞修飾の助詞句は、省略しても文脈上推測が容易である場合であっても省略されない。特に、日本語のように「私」を含む助詞句が省略されることはない。

ただし、これは動詞に係る助詞句についてのみ見られる法則であり、名詞や形容詞に係る助詞句については文脈上推測できる範囲で省略されることがある。これには、節の言い換えと見なせる動詞型不定辞の名詞用法に係る助詞句も含まれる。節の言い換えとしての動詞型不定辞の名詞用法については §28.1 を参照せよ。

## §113 受動相当表現

受動を表現するための特別な語形変化や構文は存在しない。これは、能動と受動の本質的な違いが、主語と目的語のどちらが話題となっているかという点のみであり、そのどちらを話題とするかは助詞句の語順で表現できるためだと考えられる。したがって、他の言語では受動態が用いられるような文は、目的語が文頭寄りの位置に置かれて話題として提示されることで表現される。このような方法で受動の意味合いが出されたものを「受動相当表現 (*passive-like expression*)」と呼ぶことがある。なお、助詞句の順序と話題性の関係については §44 を参照されたい。

(1) *sâfat e ces a zis aves.*

▶ 彼はみんなから好まれている。

受動相当表現では、主語を表す *a* 句が省略されることも多い。主語を省略して目的



語だけを明示することで、「それが何かは具体的に言及しないが何か～する」といった意味になるため、これで「～される」が表現される。助詞句の省略については §112 を参照せよ。

(2) *dôkat e tédsér afik.*

▶ この窓は割られている。

## §114 節の代わりとなる表現

### §114.1 名詞

kin 節および接続詞節において、節の内容全体がその節に含まれる主要な名詞句のみから十分推測できると判断される場合、その名詞句単体で節全体の代わりをすることができる。このとき、名詞が kin 節を代替する場合、kin も消える。

(1) *dí'qologac a'c e'n sôdis a'c e ratbig.*

▶ アイスを食べるのは我慢しなさい。

(2) *dí'qologac a'c e ratbig.*

▶ アイスを食べるのは我慢しなさい。

(1)において、kin 節の内容である「アイスを食べること」という内容は、単に「アイス」という名詞だけ述べても十分伝わると考えられる。そのため、この kin 節全体を *ratbig* に置き換えた (2) も可能である。

(3) *qídites e letoq i tel a dales te salet a'l e coskosaxlêsal.*

▶ 私が小学生だったときに私の腕を犬に噛まれた。

(4) *qídites e letoq i tel a dales te coskosaxlêsal.*

▶ 小学生のときに私の腕を犬に噛まれた。

(3)では、*te* 節の内容である「私が小学生だったとき」という内容は、「小学生」だけでも十分伝わるはずである。そのため、この *te* 以下の節全体を *coskosaxlêsal* で代表した (4) が可能である。

### §114.2 形容詞

コトをとる助詞や接続詞用法をもつ助詞の後には、節の代わりに形容詞句単体が置かれることがある。このとき、その形容詞は〈*salot or nisos* + 何らかの主語 + 形容詞〉という形の節の代わりをしてしていると解釈される。

この表現は、*se* の直後によく見られる。

(1) *xílac a xák se salat a cit e alevac.*

▶ 電灯がオレンジ色の状態で光っている。

(2) *xílac a xák se alevac.*

▶ 電灯がオレンジ色に光っている。

(1)と(2)は同じ意味で、(2)における *alevac* は *salat a cit e alevac* という節の代わりとして用いられていると解釈できる。

(3) *temedes a tel e taqit se nises a cit e azaf.*

▶ 私は壁をそれが赤色になるように塗った。

(4) *temedes a tel e taqit se azaf.*

▶ 私は壁を赤色に塗った。

(3)と(4)は同じ意味で、ここでは(4)における *azaf* は *nises a cit ca azaf* の代わりとして用いられている。

## §115 助詞や連結詞の省略

### §115.1 o

数量の表現で現れる *ile* 句という形において、数量が複数の単位の和として表される場合、〈単位名詞 + 数辞〉という形を繋ぐ *o* は省略されることが多い。省略前後で意味やニュアンスに変化はない。詳しくは §97.1 を参照せよ。

### §115.2 i

日付の表現において、〈*vác or ben or taq* + 名詞型不定辞の数辞〉という形を繋ぐ *i* は省略されることがある。省略前後で意味やニュアンスに変化はない。詳しくは §99.1 を参照せよ。

### §115.3 iva

*S iva Z* という形の表現において、*iva* が省略されて結果的に名詞が2つ並ぶことがある。この省略は、*S* が一般名詞で *Z* が固有名詞の場合にのみ見られる。

(1) *pa qetat vo pâd a zissác 'valdis?*

▶ ヴァルデイス先生はどこにいますか?

日付の表現でも名詞が2つ並ぶ形が使われるが、これも *iva* の省略と見なせる。これについては §99.1 で述べる。



# 縮約

## §116 縮約形

一部の表現には、それを短くした形が存在する。この短くした形は「縮約形 (abbreviation)」と呼ばれる。

縮約形は、それが縮約されたものであることを明示するため、綴りの最初か最後にノークが置かれる。前接辞として前の単語と一体となるものには語頭にノークが置かれ、後接辞として後ろの単語と一体となるものには語末にノークが置かれる。ノークについては §7.5 も参照せよ。

縮約形には全部で以下に示す 10 種類がある。

語句	縮約形
tel	'l
loc	'c
ces	's
cit	't
cok	'k
kin	'n
ditat	di'
avôl ile lèk	al'
acál ile cav	ac'
salat a cit など	s'

縮約するかしないかによって意味や構文は変化しないため、縮約形とその前の形は自由に交換され得る。しかし、縮約される方が自然な場所や縮約されない方が自然な場所があったり、縮約するかしないかでニュアンスが変わることはある。続くセクションで、縮約形の用法や縮約形が使われやすい場面などについて、縮約形別に詳しく述べる。

## §117 縮約の傾向

## §117.1 'l, 'c, 's, 't

## §117.1.1 基本法則

tel, loc, ces, cit の4つの単語は、話題として節の始めに近い位置にあるほど縮約されやすく、新情報として節の終わりに近い位置にあるほど縮約されにくい。ただし、文語では文中で1回目に出てきたものは縮約されない。

(1) pafikak a tel e'n câses a'l te tazîf e qâz i ces.

▶ 昨日彼の父親に会ったことを思い出した。

(2) revat a tel e'n bâgez a ces li tel.

▶ 彼を怒らせてしまったのは私だと思う。

(1)の kin 節内では、「彼の父親」というのが相手に伝えたい新情報であり、「私」はそれほど重要ではないため、tel が縮約されている。一方 (2)の kin 節内では、怒らせてしまった人として「私」が新情報となっているため、tel は縮約されにくい。

口語や詩歌においては、文の中で1回目に出てきたものも縮約されることがある。

## §117.1.2 縮約が起こりにくいケース

## §117.1.3 命令文での loc

命令対象が loc であるような命令文においては、1回目の出現であっても loc はほとんど必ず縮約される。これは口語か文語かに関わらない。

(1) ditat nifetis a'c e rix.

▶ 水を持ってきてください。

命令の対象が目の前にいる「あなた」であることを特に強調したい場合は、loc を縮約しないこともある。この場合、縮約されなかった loc は強めに発音される。

(2) di'cakofis a loc e pec.

▶ あなたが質問に答えてください。

## §117.2 'k

## §117.3 'n

kin は、動詞との結びつきが強いときに縮約されやすい。

(1) panozac a ces e'n dusokat a's e yét.

▶ 彼は真実を知らないふりをしている。

(1)で用いられている panoz は、動詞として「ふりをする」の意味であり、e 句に kin 節をとることで「～するふりをする」を表現する。この表現における kin 節は、「～すること」という節を名詞化したものという意味が弱く、panoz とともに使わ

れることで「～するふりをする」という意味を作っていると考えられる。そのため、panoz は kin 節との結び付きが強いと考えられ、この kin は縮約されやすい傾向がある。

一方、動詞によっては kin との結びつきが弱いものもあり、その場合の kin 節は縮約されにくい。典型的な例としては、kin 節の「～すること」という出来事を表す意味合いが強く残る場合である。

(2) bāgez a ces li kin bozetes e ces a refet i ces.

▶ 彼の友達に殴られて、彼は怒った。

(2) で用いられている bāg は、動詞として「怒る」の意味であり、li 句に kin 節をとって「～することが怒らせる」の意味になっている。この kin 節は、「～すること」の意味合いが強く、動詞の意味に融合しているとは考えにくいので、kin の縮約は起こりにくい。

また、kin 節以下を強調したい場合にも縮約されないことがある。

(3) sâfat a tel e kin xakosos a'l e qilox.

▶ 私は言語を作ることが好きだ。

(3) で用いられている sâf は、e 句に置かれる kin は縮約されることが多い上に、助動詞的に用いられて kin がそもそも現れないのが普通である。しかし、この例文では kin があえて縮約されずに用いられているため、結果として kin 節の内容が少し強調され、「他でもなく言語を作ることが好きなのだ」という意味合いになる。

#### §117.4 di'

ditat が縮約されない状態では丁寧な命令になり、di' に縮約された状態では命令の丁寧度が下がる。詳しくは §70.2 を参照せよ。

#### §117.5 al', ac'

avôi ile lêk, acál ile cav はほとんど必ず al' と ac' に縮約され、縮約しない場合は個数や順位の強調だと解釈される。

なお、「以上」や「以下」を表したいときは ile が別の助詞に置き換えられるが、その形には縮約形がないため、縮約は行われぬ。この場合は、縮約しない形に個数や順位の強調という意味合いはない。

#### §117.6 s'

s' は、salat a cit のような〈sal + a + 指示代辞〉という形の縮約形に由来するが、特有の用法を獲得しており、縮約しない形と縮約する形とでニュアンスが少し異なる。

s' は常に 〈s'e + 補語〉 の形で用いられ、直前に現れたものに対する説明を行う。

(1) cafoşes a ces ca tel e yelicsiloz. s'e ayerif ebam.

▶ 彼は私に指輪を差し出した。それはとても綺麗だった。

同様の表現は遊離 e 句によっても行われるが、遊離 e 句がしばしば間投詞的に感動や詠嘆などを含意するのに対し、〈s'e + 補語〉 の形はそのような感情を含意しない。

# 繰り返しの回避

## §118 繰り返しの代わりをする単語

### §118.1 概要

全く同じ語句が繰り返されるのは避けられる傾向があり、2回目以降の繰り返し部分はその代わりとなる単語に置き換えられることが多い。このときに繰り返しの代わりとして用いられる単語について、続くサブセクションで詳細に述べる。

なお、繰り返し部分を強調するために、あえて代わりとなる表現を使わずに同じ語句を繰り返すこともある。

### §118.2 met による方法

**met** は常に名詞として用いられ、前に出てきた名詞句の代わりをする。なお、**met** は §121 で述べる代辞の一種でもある。

- (1) *kûtat a nîl i tel e sokul iku toq, dà dukûtat a tel e met.*  
 ▶ 私の兄には自分の部屋があるのに、私にはない。

(1) の **met** は、前に出てきた **sokul** の代わりをしている。

**met** と **cit** の違いには注意せよ。**met** はそれが受ける名詞句で指すことができる何かを表すに過ぎないが、**cit** はそれが受ける名詞句と同一のものを指す。例えば、(1) で使われている **met** を **cit** に置き換えると、「私の兄の部屋それそのものを私が所有していない」という意味になり、「何らかの部屋を私が所有していない」という意味にはならない。

### §118.3 I による方法

**I** は常に動詞として用いられ、前に出てきた動詞とそれを修飾する語句全体の代わりをする。動詞とそれを修飾する語句が連続して繰り返される箇所では **I** が使われることで、同じ表現が冗長に繰り返されるのが回避される。ここで、**I** が受ける語句は **I** 自身と同じ文にある必要はなく、直前の文にある場合もある。

- (1) *kavat a tel e monaf. lat a 'melfih avoc.*  
 ▶ 私は猫を飼っている。メルフィアもそうだ。



(2) *nises a hîx zi abik ca azav, ce les zi azaf ca ajôm.*

▶ 空は青から赤に変わり、赤から黒に変わった。

(1) では *lat* が *kavat e monaf* の代わりをしており、(2) では *les* が *nises a hîx* の代わりをしている。

I が否定形の動詞を受ける場合、否定の意味を含めてその代わりをする。したがって、この場合に I が肯定形で使われれば否定の意味になり、I が否定形で使われれば二重否定となり肯定の意味になる。

(3) *dusâfat a ces e cinac, dà dulat a tel.*

▶ 彼は草が好きではないが、私は好きだ。

## §119 合成語化

修飾語句の多い名詞や形容詞などをもう一度言及する目的で、その表現に含まれるいくつかの単語がフェークで繋がられたものが指示語のように使われることがある。この表現は、同じ語句をそのまま繰り返すのは冗長であるが、かといって *ces* や *cit* などの代辞で受けると何を指しているのか曖昧になってしまう場合に見られる。このようにフェークで繋がれた表現を「合成語化(combination)」と言う。

合成語化の具体的な形は次のようになる。合成語化される表現の主要部となっている単語が先頭に置かれ、その修飾語句の中で特に重要と思われる数単語がその後に続き、これらがフェークで繋がられる。ただし、修飾語句の中から抽出される単語は1つであることがほとんどで、2つ以上になることは稀である。またこのとき、先頭の単語は、その文法的品詞に従って活用する。先頭以外の単語は、語幹のみの形が使われ活用はしない。

(1) *te mécivec a tel vo kûzteqiv fe refet, tòdes a zál e zis kilat lakos a qi qilxaléh. salot a zis-qilxaléh acik e fesotqik i tel.*

▶ 私が友達と町中を散歩していたとき、シャレイア語を話せる人に出会った。そのシャレイア語話者は私の同僚だった。

(1) では、*zis kilat lakos a qi qilxaléh* を指すために、*zis* と修飾要素の中の *qilxaléh* を抜き出した *zis-qilxaléh* という合成語化が使われている。これは、単に *cis* で受けると *refet* を指している可能性もあるので、その曖昧性を避けるためである。

# その他の表現

## §120 動詞の同族項

名辞化アプラウトによって動詞型不定辞から名詞型不定辞が作られたとき、しばしばその意味はもとの動詞型不定辞の動詞用法がとる何らかの格に対応する。例えば、*yepel*「歌う」から名辞化アプラウトを経て作られた *yepil*「歌」は、もとの「歌う」の対格に対応する名詞である。

アプラウトによる派生関係のある動詞型不定辞と名詞型不定辞にこのような対応があるとき、その2つの単語が同じ節で使われることは避けられる。例えば、*yepelos e yepil*のように *yepel* と *yepil* を同時に使うのは不自然であり、*yepil* の方を言わず単に *yepelos* とのみ言うのが普通である。しかし、名詞型不定辞の方に修飾語句が係っている場合は、アプラウト関係のある動詞型不定辞と名詞型不定辞が同時に使われることがある。

(1) *yepeles a tel e yepil sâfat ebam e a tel.*

▶ 私は大好きな歌を歌った。



# 代辞

## §121 代辞

### §121.1 総論

以下の表に示す単語を、総称して「代辞 (proform)」と呼ぶ。代辞はその意味に応じて以下の 10 種類に分類される。

- ▶ 近接代辞 (proximal proform)
- ▶ 遠方代辞 (distal proform)
- ▶ 指示代辞 (anaphoric proform)
- ▶ 疑問代辞 (interrogative proform)
- ▶ 不在代辞 (negative proform)
- ▶ 不定代辞 (indefinite proform)
- ▶ 特定代辞 (assertive proform)
- ▶ 任意代辞 (elective proform)
- ▶ 同種代辞 (substitutive proform)
- ▶ 一般代辞 (generic proform)

10 種類の分類それぞれには、人、物、事、場所、修飾を表す 5 つの代辞が属する。ただし、この合計 50 個の組み合わせのうち 10 個の組み合わせに相当する代辞は存在しないため、代辞は 40 個から成る。

	近接	遠方	指示	疑問	不在	不定	特定	任意	同種	一般
人	fes	qos	ces	pas	dus	zis	kos	ris		vas
物	fit	qut	cit	pet	dat	zat	kut	rat	met	
事	fal	qel	cal	pil	dol	zel	kel	rel		
場所	fêd	qôd	cêd	pâd	dûd	zîd	kôd	rîd		
修飾	fik	quk	cik	pek	dak		kuk	rak		

修飾を表す代辞以外は全て名詞としてしか使われず、修飾を表す代辞は全て形容詞としてしか使われない。

以下のサブセクションで、分類ごとに用例を詳しく述べる。

### §121.2 近接代辞

近接代辞は、送り手から距離が近いものを指す。ここでの「距離」というのは、物理的な距離であることもあれば、時間的もしくは心理的な距離であることもある。

(1) ditat liqonis a'c e fit ca koskalad.

- ▶ これをオフィスまで持って行ってください。

### §121.3 遠方代辞

遠方代辞は、送り手から距離が遠いものを指す。ここでの「距離」というのは、物理的な距離であることもあれば、時間的もしくは心理的な距離であることもある。

- (1) *salot a qos e qâz i tel.*  
 ▶ あの人は私の父親だ。

### §121.4 指示代辞

指示代辞は、原則としてそれ以前までの文脈で出てきたものと全く同じものを指す。このときに指す対象は、指示代辞と同じ文にあることもあれば、それ以前の文にあることもある。

- (1) *vade salot a qinat afik e asokes o axodol ebam, ditat yalfesis a loc e cit.*  
 ▶ この絵画はとても重要で高価なものなので、大切に扱いなさい。

指す対象が同じ文にある場合に限り、指示代辞より後ろに現れるものを指すことがある。

### §121.5 疑問代辞

疑問代辞は、それが置かれた箇所にはまるものを問う疑問文を作る。詳細は §58.1 を参照せよ。

### §121.6 不在代辞

不在代辞は、その対象が存在しないことを表す。これらは否定相当語である。詳細は §54 を参照せよ。

### §121.7 不定代辞

不定代辞は、具体的な何かであると特定することなく漠然とその対象を表す。修飾の不定代辞は存在しない。

不定代辞が単独で使われることは稀で、基本的に修飾語句を伴って現れる。

- (1) *pa salat e pas a zis xarat e a ces?*  
 ▶ 彼が愛している人は誰ですか？

### §121.8 特定代辞

特定代辞は、ある特定の対象を指しつつも、それが具体的に何であるかに言及しない。送り手本人がその指す特定の対象が何であるか具体的に知っているとは限らず、送り手と受け手の間で指す対象が1つに定まっていると判断されれば使用される。

- (1) *vade cipases a kos ca loc, ditat delizis a loc zi ces.*  
 ▶ 例の人があなたに頼んだのだから従いなさい。

(2) *pa nifetat a loc e kut?*

▶ あれは持ってきましたか?

### §121.9 任意代辞

任意代辞は、その対象であれば何でも良いことを表す。

(1) *bari kodis e rel, xarit a tel e loc.*

▶ たとえどんなことが起こっても、私はあなたのことを愛している。

### §121.10 同種代辞

同種代辞は、文脈上で前に出てきた名詞を受けて、その語句が繰り返されるのを避ける役割をもつ。物の同種代辞 *met* のみがあり、それ以外を表す同種代辞は存在しない。詳しくは §118.2 で述べる。

### §121.11 一般代辞

一般代辞は、一般論を述べるときに用いられる。人の一般代辞 *vas* のみがあり、それ以外を表す同種代辞は存在しない。

(1) *qĩlos a vas e dev so kòdos a ces e lakad.*

▶ ペンは文字を書くために使う。

## §122 複数回使われた代辞

指示代辞以外の代辞は、同じ文脈で 2 回以上使われた場合、それぞれ別のものを指す。例えば、*fes* という代辞が 2 回使われたとき、1 回目の *fes* と 2 回目の *fes* は異なる人を表す。

(1) *bozetes a fes e fes.*

▶ この人がこの人を殴った。

(1) では、殴った人と殴られた人が両方 *fes* で表現されているが、これは異なる人であると解釈される。2 つ目の *fes* を *ces* に変えると、その *ces* は 1 つ目の *fes* を指すと解釈されるため、文全体は自分で自分を殴ったことを表すようになる。

## §123 〈不定代辞+修飾の代辞〉による言い換え

### §123.1 概要

名詞として使われる 4 種類の代辞は、〈同じ種類を指す不定代辞+同じ分類の修飾の代辞〉という形と意味する内容が同じである。例えば、*ces* は *zis acik* と同じ意味であり、*fêd* は *zĩd afik* と同じ意味である。しかし一般に、より短い *ces* や *fêd* などが用いられる方が圧倒的に多い。長い *zis acik* や *zĩd afik* のような表現が使われる頻度は少なく、これらが使われるときは特別なニュアンスが付加されることが多い。

これについて続くサブセクションで詳しく述べる。

### §123.2 指示代辞

指示代詞が2回以上使われていてそれぞれが指す対象が異なるとき、指すものが異なることを明示するために、2つ目の指示代名詞を〈不定代辞+acik〉という形にすることがある。

(1) *dusalot a tel e zis asokes itazi 'xalih iti duqifot zelqotos a's e ces.*

▶ 私はシャリアにとって無視できないほど大切な人間ではない。

(2) *dusalot a tel e zis asokes itazi 'xalih iti duqifot zelqotos a's e zis acik.*

▶ 私はシャリアにとって無視できないほど大切な人間ではない。

(1)の1つ目の *ces* (縮約形の *'s* になっている) は *'xalih* を指しており、2つ目の *ces* は *zis* を指している。したがって、*iti* 節の意味は「シャリアがその人を無視できないほど」となる。しかし、文意が通らないのであり得ないと分かるものの、両方の *ces* が同じく *'xalih* を指すと受け手が最初に解釈してしまう可能性はある。そこで(2)のように、2つ目の *ces* を *zis acik* に変えることで、1つ目の *ces* と指示対象が異なることを受け手に明示するということが行われることがある。

なお、この表現はあくまで *ces* と *zis acik* が違う対象を表すことが明示されるだけで、どちらがどれを指すかまでは明確にできない。

### §123.3 指示以外の代辞

指示代辞以外の代辞に対して〈不定代辞+同じ分類の修飾の代辞〉という形が用いられると、用いられている修飾の代辞の意味合いが強調される。例えば、*fes* の代わりに *zis afik* が使われると、*afik* の意味が強調されて「他でもなくこの」という意味になる。特に、不在代辞で「何もない」ことの強調や、任意代辞で「どれでも良い」ことの強調のために、不定代辞を用いた冗長な形が用いられることが多い。

# 間投辞

## §124 間投辞

### §124.1 用法

間投辞は常に間投詞として現れる。間投詞は、副詞がタデックによる挿入構文で使われる場合とほぼ同様に使われる。すなわち、動詞の直後や動詞修飾の助詞句の間や節の末尾に置かれ、加えて前後にはタデックが置かれる。挿入構文については§109.2.1を参照せよ。

(1) pa lesac, sê, e pil a loc?

▶ ねえ、あなたは何をしているのですか？

(2) qetet a tel te tazîk, telê, vo sod i refet.

▶ 昨日は、えーっと、友達の家に行きました。

(3) salat a tel e 'melfih, dilfe.

▶ 私はメルフィアです、よろしくお願いします。

また、間投詞は強調構文のように動詞の前に置かれることもあり、このとき間投詞の後にはタデックが置かれる。ただし、強調の意味合いはない。強調構文については§110.2.1を参照せよ。

(4) pî, pa cåkak a zis?

▶ あれ、誰か来ましたか？

さらに、間投詞は単独で文を成すことができる。

(5) dibe!

▶ ごめんなさい！

### §124.2 修飾語句を伴う間投詞

一部の間投詞は空でない格組をもち、修飾語句として助詞句を後ろに伴うことがある。この場合、間投詞と助詞句の全体で1つの間投詞のように扱われる。

(1) hafe e kin lôqes a loc ca tel e dev.

▶ ペンを貸してくれてありがとう。

また、一部の副詞や連述詞は間投詞を修飾することがある。



(2) dibe ebam.

▶ 大変申し訳ありません。

## §125 yo 句

yo 句は例外的に間投詞のように扱われる。したがって、通常の動詞修飾の助詞句の位置に置かれていても前後にタデックが置かれる。また、単独で文を成すことがある。

(1) pa sokat a loc, yo 'kelvis asen, e kin fexases a ces?

▶ ケルヴィスさん、彼が結婚したのを知っていますか?

(2) yo loc!

▶ そのあなた!

## §126 擬音間投辞

擬音間投辞は他の間投辞と同様に用いられ、文中に挿入されたり単独で文を成したりして、そこでその音が発されたことを表す。

(1) déqes a tel ca dezet, ce, toto, telefes a zis e téd.

▶ 私が椅子に座ると、トントンの音が、誰かが扉を叩いた。

擬音間投辞は、助詞の ra を伴って ra 句を構成することがある。ra 句は通常の動詞修飾の助詞句と同様に動詞を修飾し、それが修飾する動詞が表す動作が行われるときに発せられる音を表す。

# 派生語の構成

## §127 合成成分

合成語は、2つ以上の単語の全体もしくは一部を組み合わせて作られる。このときに用いられる単語の全体もしくは一部は、その単語の「合成成分 (composition element)」と呼ばれる。合成成分となることができる単語の部分には、以下に述べる制約がある。

まず、合成成分は必ず単語の音節を語頭から連続していくつか抜き出したものである。ただし、取り出した部分が母音で終わっている場合は、もとの単語においてその次にある子音までが合成成分に含まれる。これにより、合成成分は必ず子音で終わることになる。例を挙げると、*yelicsîk* の合成成分として考えられるものは *yel*, *yelic*, *yelicsîk* であり、*litâlloqis* の場合は *lit*, *litâl*, *litâlloq*, *litâlloqis* となる。

もとの単語がすでに合成語である場合は、その合成語を構成している合成成分の合成成分も全体の合成成分となり得る。例えば、*litâlloqis* は *litâl* と *loqis* が合成されたものであるから、*litâlloqis* の合成成分としては *loqis* の合成成分である *loq* と *loqis* も使われ得る。

## §128 合成語の構成

### §128.1 合成成分による合成語

#### §128.1.1 構成

合成語は、合成される単語の合成成分を順に並べることで構成される。個々の合成成分は、合成後の単語が使われる頻度が低いと思われるほど長くなり、また合成前の単語が合成後の単語においてその意味を保っていると考えられるほど長くなる傾向がある。合成成分が並べられる順番は、基本語順と同様に、修飾語的に働くものがその被修飾語の後ろになる。

例えば、*kedpasif* 「迷宮」は、*pasif* 「迷う」と *kedet* 「建物」の合成により作られている。ここで、*pasif* の合成成分としては *pasif* がそのまま用られ、*kedet* の合成成分としては *ked* が用いられている。*ked* が前で *pasif* が後ろに並べられているのは、「迷宮」が「(人を)迷わせるような建物」というような意味であるので、*pasif* の方が修飾語的に働いているためである。

合成された後の単語が使われる頻度が特に高い場合、単語中の連続した子音のうち

前の子音が取り除かれることがある。例えば、*fésax* という単語は、*fér* の合成成分 *fér* と *kosax* の合成成分 *sax* の合成によるものだが、これらを単に並べた *férsax* からさらに *r* が取り除かれている。

### §128.1.2 意味

合成成分による合成語の意味は、もととなった単語の意味から連想されるものにはなるものの、明確な派生規則は見られない。*sik* 「髪」と *talcaf* 「前側」から作られた *sikcaf* 「前髪」においては、合成前の単語の意味が合成語の意味に直接関わっている。一方、*lirit* 「涙」と *zavak* 「炎」から作られた *lirzal* 「ルビー」においては、比喩的に意味が派生している。また、*rifhal* 「泳ぐ」と *fev* 「すぐに」から *riffev* 「ビニールプール」が作られた例に見られるように、合成によって品詞が変わることもあり得る。

## §128.2 飾辞との合成語

### §128.2.1 構成

飾辞と何らかの単語との合成により、新たな合成語が作られることがある。飾辞は必ず何らかの単語の合成成分であるため、飾辞との合成は2つの単語の合成成分による合成と見なすことができるが、通常の合成成分による合成とは次のような違いがある。まず、飾辞と合成されるもう一方の単語はほぼ必ずその全体が使われ、飾辞と別の単語の一部分とが合成されることは稀である。また、飾辞との合成は生産性が高いことが多く、送り手がその場で新たな単語を作ることがある。

### §128.2.2 意味

飾辞は合成語のジャンルを明確に定める上に、もう一方の単語の意味も合成語の意味に大きく残ることが多い。そのため、飾辞との合成語の意味は、もととなった単語の意味から比較的容易に推測できる。例えば、*nis+* は必ず「見たり関わったりした人に～を引き起こすような」という意味の合成語を作るため、これと *zaz* 「驚く」の合成語である *niszaz* は「驚くべき」の意味だと推測できる。

## §129 アプラウトによる派生

### §129.1 名辞化アプラウト

#### §129.1.1 構成

動詞型不定辞に含まれる最後の母音字を以下の表に従って変えることで、新たな名詞型不定辞が作られることがある。これを「名辞化アプラウト (nominalising ablaut)」と呼ぶ。

変換前	変換後
a	e
e	i
i	a
o	u
u	o

動詞型不定辞の数辞から名詞型不定辞の数辞が作られるときにも、単語派生のときとは少し異なる形ではあるが、名辞化アプラウトが生産的に使われる。§95も参照されたい。

### §129.1.2 意味

名辞化アプラウトによって作られた名詞型不定辞の意味は、もとの動詞型不定辞の意味に関連したものにはなるものの、そこに明確な派生規則は存在しない。ただし、名詞型不定辞の数辞の読みを導く際には、名辞化アプラウトが規則的に使われる。これについては§95を参照せよ。

## §129.2 動辞化アプラウト

### §129.2.1 構成

名詞型不定辞に含まれる最後の母音字を以下の表に従って変えることで、新たな動詞型不定辞が作られることがある。これを「動辞化アプラウト (verbalising ablaut)」と呼ぶ。動辞化アプラウトは名辞化アプラウトの逆操作になっている。

変換前	変換後
a	i
e	a
i	e
o	u
u	o

### §129.2.2 意味

動辞化アプラウトによって作られた動詞型不定辞の意味は、もとの名詞型不定辞の意味に関連したものにはなるものの、そこに明確な派生規則は存在しない。

## §130 間投辞の派生

動詞型不定辞の最後の子音を取り除くことで、間投辞が作られることがある。例えば、hafe「ありがとう」は、hafer「感謝する」から末尾のrを取り除くことで作られている。



# 外来語の転写規則

## §131 外来語の転写方法

外来語がシャレイア語に取り込まれるときは、まず音写によって外来語の音素がシャレイア語の音素に写され、その後でシャレイア語で許容される音節構造になるよう修正が加えられるという、2つのステップが行われる。続くセクションで、それぞれのステップについて詳しく述べる。

なお、音写の元となる部分には、格語尾や人称接辞のような機能的な形態素を取り除いた語幹部分が用いられる。例えば、「古典ギリシャ語」を意味する *qihellad* の *hellad* の部分は古典ギリシャ語の Ἑλλάς に由来するが、Ἑλλάς がそのまま音写されてはおらず、語幹である Ἑλλάδ- が音写されている。

## §132 音写

### §132.1 一般則

まずは、以下に示す国際音声記号とシャレイア文字の対応表をもとに、外来語を国際音声記号で音素表記した際の各字母がシャレイア文字に写される。長母音および多重母音については、主母音が対応表に従って写された後で、以下の規則に従ってダイアクリティカルマークが付けられる。ただし、この規則で *o* や *u* にアキュートが付けられることになった場合、*o* や *u* にアキュートを付けた文字は存在しないので、代わりにグレイブが付される。

- ▶ 長母音 — サークムフレックス
- ▶ 副母音が前舌側の多重母音 — アキュート
- ▶ 副母音が後舌側の多重母音 — グレイヴ

ここで注意すべきなのは、綴りではなく標準的な発音による音素表記を基準にするという点である。例えば、ロシア語の *здравствуйте* の発音は /zdra.stvoj.tɕə/ であって最初の *в* は発音しないため、これを取り除いた部分だけが音写され、音写は *zdrastvuyte* となる。

母音の弱化により生じる曖昧母音は、曖昧母音の音価をもとにして写されるのではなく、弱化する前の母音をもとにして写される。例えば、英語の *presentation* の発音は /pɹɛz.ən.teɪ.jən/ であるが、2つの /ə/ はそれぞれ /e/ と /ɒ/ の弱化だと考えられるため、それぞれ *e* と *o* で写され、全体の音写は *prezentéxon* となる。

/j/ や /w/ などの接近音が1つの独立した音素というより前の子音の調音位置を変化させているに過ぎないと見なせる場合、この接近音は音写の際に削除される。例えば、英語の *cute* の音素表記は /kjʊt/ だが、/k/ と /j/ が独立して発音されるというより /k/ の調音位置を /j/ が口蓋化して /kj/ で1つの子音のように発音されるため、/j/ は音写から削除され、全体の音写は kʊt となる。

### §132.2 英語での諸規則

英語の単語の音写は、イギリスの容認発音を基準として行われる。ただし、/əʊ/ のみは例外的に ò で写される。また、英語は /ʃs/ と /dʒz/ を音素にもたないとするのが普通だが、発音に /ts/ や /dz/ という並びが現れていて、それが通常 [ʃs] や [dʒz] と発音される場合は、その箇所は音素表記でも /ʃs/ や /dʒz/ であったとして音写される。

曖昧母音を写す際に基準となる弱化前の母音は次のように決められる。すなわち、曖昧母音がある音節に仮にアクセントがあったとしたときに自然に想定される発音において、その曖昧母音があった音節に現れる母音を、その曖昧母音の弱化前の母音と見なす。ただし、そのようにして決まる弱化前の母音が長母音や多重母音だった場合でも、ダイアクリティカルマークは付けられない。

### §132.3 日本語での諸規則

日本語の単語の音写に関しては、次のことに留意せよ。まず、ラ行の子音は /r/ と見なされ、ガ行の子音は常に /g/ であるとされ鼻濁音は考慮されない。また、以下の表に示す行を除き、拗音で現れる /j/ は無視される。同じく以下の表に示すように、母音によって前の子音が変わる行は、その変化に従って写される。

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
サ行	sa	xi	su	se	so
ザ行	za	ji	zu	ze	zo
タ行	ta	xi	su	te	to
ダ行	da	ji	zu	de	do
ハ行	ha	hi	fu	he	ho
シャ行	xa	xi	xu	xe	xo
ジャ行	ja	ji	ju	je	jo
チャ行	xa	xi	xu	xe	xo

母音の無声化は音素の変化ではないと考えられるため、音写の際には無声化する前の発音が基準とされる。

## §133 音節構造の調整

シャレイア語では1つの音節内で子音が連続することはないが、他の言語では必ず

しもそうではないので、ただ音写するだけではシャレイア語では容認されない音節構造になる場合がある。したがって、以下に述べる手順により、音写の後で音節構造の調整が行われる。

まず、もとの言語の音節の区切り方に従って、音写した綴りを音節ごとに分ける。このとき、音節に母音が含まれない場合は、子音列のちょうど中央の位置(子音が奇数個の場合は前側)に **e** を入れる。この方法で区切られた音節それぞれに対して、母音から左右それぞれに対して子音 2 つごとに **e** を挿入する。これを挿入した段階で、最初から 1 番目の子音と 2 番目の子音の間に母音がないならば、そこにさらに **e** を入れる。最後から 1 番目の子音と 2 番目の子音の間に母音がないときも、同様にそこに **e** を入れる。例えば、CCCVCCCCC という形の音節であれば、最終的に CeCCVCCeCCeCeC のように **e** が挿入される。

取り入れた単語が不定辞であって単語末が母音である場合、不定辞が母音で終わることを防ぐため、最後に **s** を追加する。

例として、ロシア語の *здравствуйте* の音写 *zdrastvuyte* の音節構造の調整がどのように行われるかを見る。まず、もとのロシア語の単語の音節構造に従って音節を区切ると、*zdra, stvuy, te* の 3 つに分けられる。このそれぞれに対して上の規則に従って **e** が挿入されると、*zedra, setvuy, te* となる。これらを繋げた *zedrasetvuyte* が、音節構造が調整された結果である。





# 補遺

## §134 別名

### §134.1 語彙的品詞

語彙的品詞の3種類の不定辞は、以下の表に示すような短い別名がある。

別名称	現行名称
動辞 (verbal)	動詞型不定辞
名辞 (nominal)	名詞型不定辞
連述辞 (adpredicative)	連述詞型不定辞
特殊辞 (special)	特殊詞型不定辞

### §134.2 副詞と形容詞や動詞との意味関係

副詞と他の品詞との意味関係の分類には、以下の表に示すローマ数字による別名がある。I型がないのは歴史的な理由による。

別名称	現行名称
II型 (of type II)	被修飾語型
III型 (of type III)	文脈補完型
IV型 (of type IV)	kin 節型
V型 (of type V)	fa 節型

## §135 古い用語

### §135.1 語彙的品詞一般

古い文献では、語彙的品詞を「～辞」の代わりに「～詞」と呼んでいることがある。語彙的品詞を「～詞」と呼ぶのは、文法的品詞と紛らわしいため現在は推奨されない。なお、英語名称に変化はない。

### §135.2 語彙的品詞

古い文献では、語彙的品詞について以下の表に挙げるような名称を用いていることがある。飾辞は語彙的品詞ではないが便宜上ここに入れた。これらの名称は、現行の名称に置き換えられ推奨されない。

旧名称	現行名称
副詞型不定辞 (adverbial infinitive)	連述詞型不定辞, 特殊詞型不定辞
特殊助接辞 (special particle)	例外助接辞
準飾辞 (quasidecorative)	飾辞

### §135.3 文法的品詞

古い文献では、以下の表に挙げるように3つの文法的品詞をまとめて「副詞」と呼び、それに形容語を付け加えることでそれぞれを区別していることがある。しかし、この3つの文法的品詞を総称するのは、現在の文法ではほとんど意味がないため推奨されない。

旧名称	現行名称
動詞修飾副詞 (verb-modifying adverb)	副詞
修飾詞修飾副詞 (modificative-modifying adverb)	連述詞
特殊副詞 (special adverb)	特殊詞

### §135.4 態

古い文献では、態を自他として扱い、以下の表のような名称を用いることがある。しかし、態を自他として扱うのは、一般的な言語学での用語法と大きくずれるため現在は推奨されない。

旧名称	現行名称
自動 (intransitive)	通常態
他動 (transitive)	補助態

## 索引

## あ

一般助接辞	49	一般代辞	188
ヴァクット	25	ヴァデック	25
遠方代辞	188	親節	106

## か

開始相	100	格組	80
過去時制	98	活用	68
カルタック	25	間投詞	50
間投辞	48	完了相	100
擬音間投辞	49	期間相	100
基準時間	106	基数表現	151
機能詞	50	機能辞	48
基本格	51	基本形	19
基本助詞句	51	基本助接辞	49
疑問機能辞	92	疑問代辞	188
旧発音	39	kin 節	128
kin 節型	58	kin 節句	128
近接代辞	188	経過主格型	55
経過相	100	経過対格型	55
継続主格型	55	継続相	100
継続対格型	55	軽発音	38
形容詞	50	形容詞句	50
現行発音	39	現在時制	98
限定節	130	限定的用法	79
限定表現	130	語彙の品詞	48
合成語化	185	合成成分	194
肯定形	70	V 型	202
語幹	68	コト	168

## さ

最上表現	142	III 型	202
指示代辞	188	時制直線	98
シャレイア文字	18	主アクセント	46
従属節	72	重発音	38
終了相	100	主格	51

索引

縮約形	180	主節	72
述詞	50	受動相当表現	176
瞬間相	100	小数点	25
飾辞	66	助詞	50
助詞句	51	叙述的用法	79
叙述の現在時制	108	序数表現	152
助接辞	48	助動詞の用法	112
数辞	144	節	50
節化機能辞	128	接続詞	50
接続詞節	52	相直線	100
<b>た</b>			
対格	51	代辞	188
奪格	51	タデック	25
タデックロット	25	タドヴォール	25
タドニビット	25	直接話法	162
通時時制	98	通常態	110
ディカック	25	定高形	19
デック	25	デック類	25
転写	18	動詞	50
動辞	202	動辞化アプラウト	196
動詞型不定辞	48	動詞修飾形	70
同種代辞	188	同等表現	140
特殊詞	202	特殊辞	202
特殊詞型不定辞	48	特定代辞	188
<b>な</b>			
II型	202	二重助詞句	85
任意代辞	188	能格	51
ノーク	25		
<b>は</b>			
パデック	25	比較可能	63
比較不能	63	非限定的用法	174
被修飾語型	58	被修飾節	124
否定形	70	否定相当語	90
非動詞修飾形	70	非動詞修飾副詞形	69
非動詞修飾連述詞形	69	標準形	118
fa節型	58	フェーク	25
フェークレーディック	25	フォーハック	25

## 索引

副アクセント .....	46	副詞 .....	50
副詞句 .....	51	副詞的用法 .....	160
不在代辞 .....	188	不定辞 .....	48
不定代辞 .....	188	文法的品詞 .....	48
文脈補完型 .....	58	別形 .....	118
変音符 .....	19	補語 .....	51
補助態 .....	110		
<b>ま</b>			
未来時制 .....	98	無相 .....	100
名詞 .....	50	名辞 .....	202
名辞化アプラウト .....	195	名詞型不定辞 .....	48
名詞句 .....	50	モノ .....	168
<b>や</b>			
遊離助詞句 .....	164	遊離接続詞節 .....	164
遊離直接話法 .....	162	優劣表現 .....	134
与格 .....	51	IV型 .....	202
<b>ら</b>			
ラクト .....	25	例外助接辞 .....	49
連結詞 .....	50	連結辞 .....	48
連述詞 .....	202	連述辞 .....	202
連述詞型不定辞 .....	48	ロセック .....	25